

選 定 種 の 解 説

1. 野生動物の保護

野生生物種の「保護」には、種そのものの保存と、生態系構成要素としての種の保存が考えられるが、種の保存には人為を全く排除した厳正保存の他に適正な人為管理も含まれる。特に、日本のように国土が狭く人間による自然の利用率が高い国においては、自然に全く人為的影響を及ぼさないで厳正保存することは不可能であるし、原生的自然がほとんど無く、部分的または大部分が破壊されてしまっているような自然を保存維持しようとすれば、破壊された部分を人為で補わざるを得ないことも生じてくる。

例えば、ニホンオオカミは我が国の陸上生態系における最高次の消費者としてシカやイノシシなどの大型植食動物を捕食し、結果として彼らの極端な増殖を抑え、生態系全体が急激に大きく変動するのを抑制する役割を果たしてきた。ニホンオオカミが絶滅した今、シカやイノシシの激増を抑制する自然的な要因は、激増した植食動物自身の過食等による植生破壊に伴う食物不足や伝染病の蔓延などである。今や、ニホンオオカミに代わって捕食者の役割を担うことができるのは、人間か、人為的に導入されたニホンオオカミに近縁の別亜種オオカミしかないだろう。とは言え、人間が管理できる自然の範囲と内容には限界があるし、別亜種オオカミの導入に合意を得ることは非常に困難と思われる。

「種の保存」と「生態系の一員としての種の保存」とは本来同じでなければならないが、現実には必ずしもそのように考えられてはいない。ニホンオオカミ・ニホンカモシカ・ホンシュウジカ・イノシシ・ツキノワグマなどの大型哺乳類は、生態系の中で重要な生態的地位を担っている「鍵的種」であり、それらの消滅によって他の種に与える影響は大きい。

全国的には絶滅の恐れがない種でも、既にその種が消滅してしまっている地域はたくさん見られる。そのような地域の生態系に、消滅してしまった種を復活させることなど現実にはまったくと言っていいほど為されていないし、それを行うかどうかの議論もかみ合わないことが多い。絶滅した種に代わる近縁の種を導入することについては、なおさらである。

種は、形態だけで存在するのではない。その生息する環境の中で、環境から及んでくる諸々の刺激に対して主体的に反応し、生活し、進化できて初めて種として存続できるものである。野生動物の保護は、飼育下に置かれたり、個体群の生活場の広がりや種の地理的な広がりよ

りもずっと狭い範囲に閉じ込められた状態では、完全には行い得ないということである。生息範囲を限りなく狭めつつ、その中での生息適正頭数を云々することは、種の保護にはならない。また、陸上を歩行移動する哺乳類では、特に小型の種の場合、ダムや道路などの建設物によって生息域が分断されてしまい、分断された集団の間での交流ができなくなってしまう恐れも生じる。哺乳類の場合、行動が個体の経験や他個体との交流によって成立する部分が多くあって、自然の環境から引き離されて飼育下に置かれた状態では、例え形態的には完全に見えても種として備わっている性質を「正常」には発揮できないだろうし、やがては野性を喪失してしまうだろう。もしかしたら、人間活動の影響が地球上の隅々にまで及んでいる現在においては、人為的影響を全く受けることのない野生生物などいないのかもしれない。

2. 島根のレッドデータ哺乳類

現在、本県に生息している野生哺乳類は、食虫目6種・翼手目8種・霊長目1種・兎形目1種・齧歯目12種・食肉目8種・偶蹄目2種の合計38種が確認されている。このうちヌートリア(齧歯目)、チョウセンイタチ(食肉目)、アライグマ(食肉目)の3種は外来種である。ここには、ノネコ・ノイヌなどやアライグマ以外のペットの野生化したものは含まれていない。ニホンアシカ(鰭脚目)・ニホンオオカミ・ニホンカワウソ(以上、食肉目)・ニホンカモシカ(偶蹄目)の4種は、現在の島根県で見ることができないので、上記の生息種数に含めてない。過去の本県の狩猟統計にリス類の捕獲の記録があるが、ニホンリスかどうか不明なので、ニホンリスも生息種数に含めてないし、かつて、ヒナコウモリ(翼手目)が隠岐で採集されているが、偶然に飛来した可能性があるので、これも含めてない。一方、樹洞を利用する翼手目は、今後、何種か見つかる可能性がある。

かつて、県内にもニホンオオカミ・ニホンアシカ・ニホンカワウソ・ニホンカモシカが生息していたが、ニホンオオカミは恐らく江戸時代末に、ニホンカワウソとニホンカモシカは明治時代から昭和時代の間に減少し絶滅した。これらは本県では絶滅種に指定されている。

ニホンアシカはクジラ類とともに海生哺乳類に含まれるが、近年になって地球上から絶滅した哺乳類である。脂と肉・皮を得るためと、漁網に掛かった魚を食害し漁網を破る害獣として、主要な繁殖群を中心に幼獣も含めて捕獲(殺)を繰り返し行ったことが「絶滅」の大きな

原因になったと思われる。また、近代的な漁法による魚類の大量漁獲が、ニホンアシカの食糧難を引き起こしたのかもしれない。

いずれにせよ、この数千年間における「絶滅」の大部分が人為的な原因によるものであり、このような絶滅は今後も起こりうるものである。特に、害獣とされるものは、保護が困難な場合が多い。

ツキノワグマは、本県では絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。日本の本土地区（本州・四国・九州）で最大の肉食動物であり、人が襲われる事故が時々あるので「肉食猛獣」のイメージが強い。しかし、実際には植物食中心であり、人を食べるために襲った例はほとんど無いと思われる。中国山地脊梁部の森林で生息適地が減少し中山間地域に分散せざるを得ない状況があるのか、そのような地域の植林地内での冬眠や人身事故もみられる。ツキノワグマが分散し集落付近にまで出現するようになって、有害獣として駆除されることが多くなると、生息数や生息密度が低下し雌雄の出会いが困難になることも考えられる。

本県の準絶滅危惧種に取り上げられている哺乳類は、「情報不足」に入れてもよいようなものや、今すぐには絶滅の恐れはなく、種類によっては今後増加する可能性のあるものも含まれている。

洞穴性のコウモリ類（翼手目）の場合、多くの種は現時点では激滅する恐れは少ないが、特定の洞穴に集団で休息や冬眠・繁殖を行うという性質を有することから、このような洞穴環境が消失したり悪化すれば、そこを利用している数百、数千頭（ユビナガコウモリの繁殖群の場合は数万頭）というコウモリ類がいつ頃に失われてしまうことになる。また、翼手目や食虫目は大量の昆虫を食べるので、生物濃縮による農薬の被害も考えられる。特に翼手目の場合、食虫目などと比べると寿命が非常に長く（20年近く生きるものがある）、それだけ殺虫剤な

どの農薬が体内に濃縮蓄積される率が高くなることも考えられる。

ホンシュウジカの場合、全国的には絶滅の恐れはないが、本県においては個体群が確認されているのは島根半島だけである。ホンシュウジカは、江戸時代末期頃には県下全域に広く分布していたが、明治時代以降、恐らく乱獲によって次第に減少し、昭和時代の中頃にはほとんど島根半島だけに取り残された状態になってしまった。一時期、生息数が極端に減少し絶滅が心配された時期がある。このような歴史を持ち、他の個体群から遠く離れた孤立個体群であるために、本県では準絶滅危惧種にランク付けされていたが、捕獲制限が功を奏し、かなりの数に増加している。また、島根半島以外の場所での目撃例が増え、捕獲例もある。そのため、この度、ランク外とした。

ホンシュウジカ島根半島個体群は長く半島西部の出雲北山山地に限られて分布していたが、狩猟の調整と計画的な駆除による保護管理が行われた結果、分布域は拡大しつつある。また、生息個体数の増加と個体群密度の増大に伴って、造林地や農林作物への被害、自動車と衝突するなどのトラブルも増加している。このような被害やトラブルの対策も考えられなければならない。今後、被害対策と生息個体数調整の手段として狩猟を解禁するにしても駆除数を増やすにしても、本個体群が、田園の広がる平野と湖水と都市によって中国山地から「島」状に隔離された島根半島という特殊な地域に孤立した状態にあることを念頭に置いて、慎重に推移を見守る必要があるだろう。

本概説の目の名称は、日本哺乳類学会種名・標本検討委員会・目名問題検討作業部会（2003）によった。また、学名については、日本哺乳類学会編（1997）によった。
（大畑純二）

哺乳類掲載種一覧			計19種
絶滅（EX）			
・ ニホンアシカ	・ ニホンオオカミ	・ ニホンカワウソ	
・ ニホンカモシカ			計4種
絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）			
・ ツキノワグマ			計1種
絶滅危惧Ⅱ類（VU）			
◇ ミズラモグラ	・ ニホンモモンガ	・ ヤマネ	計3種
準絶滅危惧（NT）			
・ カワネズミ	◇ コモグラ(西日本産小型アズマモグラ)	・ キクガシラコウモリ	
・ コキクガシラコウモリ	・ モモジロコウモリ	・ ユビナガコウモリ	
・ テングコウモリ	・ コテングコウモリ	・ ニホンイタチ	計9種
情報不足（DD）			
・ ホンドノレンコウモリ(注)	・ ニホンリス		計2種
今回の改訂により掲載対象外となった種			
ホンシュウジカ			計1種

(注) 今回の改訂で種名が変更になった種

(前回改訂)	(今回改訂)
ノレンコウモリ	→ ホンドノレンコウモリ

- ・：カテゴリー区分変更なしの種（17種）
 - ↑：上位のカテゴリー区分への変更種（0種）
 - ↓：下位のカテゴリー区分への変更種（0種）
 - ：新規掲載種（0種）
 - ◇：情報不足からの変更種（2種）
 - ◆：情報不足への変更種（0種）

アザラシ目（鰭脚目）アシカ科

ニホンアシカ

Zalophus californianus japonicus (Peters, 1866)

写真 口絵1

島根県：絶滅（EX）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠA類（CR）

【選定理由】

今は絶滅した可能性が高いニホンアシカが、最後まで生息していたのは島根県であり、竹島を中心に隠岐諸島や島根半島においてその生息記録が多く残されている。本県は、あらゆる意味において、ニホンアシカともっとも関係が深い県である。

【概要】

アシカには、カリフォルニアアシカ、ニホンアシカ、ガラバゴスアシカの3亜種が知られており、本亜種は太平洋東西両海岸に分布するアシカの中の日本近海産亜種とされている（近年独立種とする説が有力）。1950年代初期までは島根県竹島・隠岐諸島・島根半島などでその生息情報があるが、その後確実な生息情報がなく、現在本県では絶滅したと思われる。古くは、本州・四国・九州近海に生息し、島根県の沿岸部の他、津軽・房州・伊豆神津島・相模湾・大阪・淡路島・徳島県・能登七つ島・福岡県などに生息記録が残されている。カリフォル

ニアアシカによく似ているが、メスの毛色が淡色であることや、歯のサイズが大型であることなどの違いが知られている。しかし、その生態等についての詳しい研究が進んでおらず、未解明の部分が少なくない。繁殖期に1頭のオスが数頭から15頭くらいのメスを率いてハーレムをつくり、群で生活することや、5～6月に陸上で1頭の子を産むこと、食物としてはイカ・タコ・魚類を好むことなどが分かっている。また、メスや子供は集団で生活するが、オスは非繁殖期に単独又は複数で回遊し、隠岐諸島などに渡来していた可能性が高い。また、洞窟を好んで休息場としていたことなども最近の調査で判明している。

【県内での生息地域・生息環境】

竹島・隠岐諸島・島根半島などの岩礁や近海に生息していた。

【存続を脅かした原因】

狩猟圧、漁網への絡まり、繁殖場の環境悪化など。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	岩礁
×	×	×	×																			×

ネコ目（食肉目）イヌ科

ニホンオオカミ

Canis lupus hodophilax Temminck, 1839

島根県：絶滅（EX）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅（EX）

【選定理由】

江戸時代の諸国産物帳等に産物として記載されているが、現在は生息しない。

【概要】

オオカミ *C. lupus* は全北区に広く分布する種であり、亜種ニホンオオカミ *C. l. hodophilax* は国内では本州・四国・九州に分布した。本種は、オオカミの仲間としては小型で、原始的な形態をしているといわれる。

動物食中心の大型肉食獣であるため、餌動物を狩るための広大な行動圏が必要である。個体群密度はきわめて低く、開発によって生息域が分断されたり餌動物が乱獲された結果、食物や配偶者の確保が困難になったことが絶滅した原因の一つと考えられる。また、伝染病の蔓延とともに家犬との交雑もニホンオオカミ絶滅の原因となった可能性がある。

【県内での生息地域・生息環境】

江戸時代末まで、中国山地脊梁部あたりに生息してい

たらしい。享保元文（1688～1736）刊『諸国産物帳集成第三卷（隠岐・出雲・播磨・備前・備中）』に産物として、文政三年（1820）刊『石見外記』に狼目撃のかなり詳細な聞き書きの記載があるが、実際にニホンオオカミが生息したことを証明するような頭骨や毛皮などの物的な証拠は、県内では見つかっていない。

【存続を脅かした原因】

シカやイノシシなど餌となる大型植食動物の減少や、外来畜犬よりもたらされた伝染病等・家犬との交雑の可能性・生息域の分断狭小化による個体群密度の低下等。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
×	×	×		×					×																

ネコ目（食肉目）イタチ科

ニホンカワウソ

Lutra nippon Imaizumi et Yoshiyuki, 1989

【選定理由】

大正時代には県内各地に生息していたらしい。昭和38年の豪雪時に江の川流域で足跡を見たという不確実情報がある。その後の情報はない。

【概要】

日本固有種。本州・四国・九州・対馬に分布。特別天然記念物。本州以南のニホンカワウソを日本本土の固有種とする説や、北海道やユーラシア大陸に産する種と同一であるとする見解がある。河川や湖沼で淡水魚や両生類などを捕食する生活のため、水辺で目撃されることが多かった。海岸に生息するものもいた。おもに、夜行性。1個体が15km前後の範囲内に3～4カ所の泊まり場を持っていて、そこを渡り歩くらしい。水辺だけを移動するのではなく、陸上を別の河川へと移動することもある。本種の食性と広い行動圏から考えると、全国に広く生息していたのだろうが、もともと個体群密度は低かったものと思われる。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
×	×	×				×	×					×	×					×	×				×	×

島根県：絶滅（EX）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅（EX）

県内における最近の目撃情報のほとんどが、ヌートリアの誤認である。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐を除く県内各地河川流域に生息していたらしい。享保元文（1688～1736）刊『諸国産物帳集成第三卷（隠岐・出雲・播磨・備前・備中）』や文政三年（1820）刊『石見外記』に本種の記録がある。江の川には「えんこう淵」という名の淵や、支流の濁川には「瀬越（おそごえ）」の地名があり、かつて本種が生息していたことをうかがわせる。

【存続を脅かした原因】

密猟。河岸整備などの河川工事。自然河岸の消失。河川汚濁・汚染。淡水魚の減少。河川周辺の森林破壊。生息域の分断による個体群密度の低下。漁網の設置等。

ウシ目（偶蹄目）ウシ科

ニホンカモシカ

Capricornis crispus (Temminck, 1845)

島根県：絶滅（EX）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵1

【選定理由】

江戸時代の諸国産物帳に記録があり、明治時代の初め頃には、まだ、中国山地に生息していたらしい。現在は生息しない。

【概要】

日本固有種。本州・四国・九州に分布。特別天然記念物。ヤギに比較的近縁の原始的なウシ科動物であり、森林内をおもな生息場所としている。雌雄ともに15cm程度の鋭くとがった角を有し、特定のホームレンジ内で単独生活することが多い。おもに樹木の枝や葉を食べる「木の葉食い」である。

【県内での生息地域・生息環境】

西中国山地あたりでは、「うししか」と呼ばれていた。享保元文（1688～1736）刊の『諸国産物帳集成第三卷（隠岐・出雲・播磨・備前・備中）』によると出雲国産物として「カモシカ」が、また、文政三年（1820）刊の『石見外記』には「走獣部」の項に「羚羊（かもしし）」が

記されている。明治時代初め頃には、まだ、西中国山地脊梁部に残存していたようである（一説では、昭和初期まで生息していたとされる）。森林の伐採と造林は必ずしもニホンカモシカの食糧不足を招くことにならず、これだけでニホンカモシカを絶滅に追いやることはできない。ニホンカモシカは、猟犬や野犬などに追われると断崖の狭い岩棚などに逃げ込む。また、冬期には隠れ場所となる崖の岩棚に、1日中、立ちつくしていることがある。この結果、銃猟者には非常にたやすく撃ち取られてしまうことになる。県内からの絶滅は、おそらく、乱獲によるものと思われる。

【存続を脅かした原因】

乱獲。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
×	×	×		×																	

ネコ目（食肉目）クマ科

ツキノワグマ

Selenarctos thibetanus (Cuvier, 1823)

島根県：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵1

島根県固有評価：－

環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（西中国地域のニホンツキノワグマ）LP

【選定理由】

平成6年度に絶滅の恐れがあるという理由で狩猟による捕獲が禁止された。今後、生息環境の破壊が進行すれば、生息個体数が減少し生息密度が低下して、急速に絶滅に向かう恐れがある。

【概要】

国内では本州・四国・九州、国外では台湾、インドシナ北部、ロシア極東地域、中国東北地方、朝鮮半島などに分布する。昆虫や蜂蜜、動物の死骸を食べたり、ごくまれに大型草食獣を捕食することがあるが、植物食が中心で、堅果類や球根・塊根・草本類の地上部など多量の植物を食べている。果樹園や飼養ミツバチへ被害を与えたり、時に、人畜に危害を加えることがあり、有害獣・危険動物として駆除の対象となることがある。冬眠中に出産する。

【県内での生息地域・生息環境】

おもに中国山地脊梁部に分布し、夏緑樹林帯をおもな

生活域としている。近年は、里地域を徘徊してカキやクリなどの果樹園に食害を及ぼすことがある。ツキノワグマの冬眠は、おもに大木の地上よりかなり高い位置にある樹洞で行われるが、大木の根元の土穴や岩穴、大きな倒木の下など地上で行われることもある。造林地内で冬眠する個体も見られる。近年になって大木の茂る森林が少なくなってからは、地上部での冬眠が増えているかもしれない。冬眠期以外の季節に、中国山地脊梁部から遠く離れた平地や、時に海岸付近にまでやって来ることがあるが、この移動の全てが、食物不足や生息環境の破壊によるものかは不明。

【存続を脅かす原因】

生息環境の分断や破壊による個体群の孤立化と生息数の減少。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○		○				○													

モグラ目（食虫目）モグラ科

ミズラモグラ

Euroscaptor mizura (Günther, 1880)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：中国地方固有亜種

環境省：準絶滅危惧（亜種ヒワミズラモグラssp. hiwaensis）NT

【選定理由】

生息数が少なく、生息地が限定されていると考えられる。県内での情報はほとんどない。

【概要】

日本固有種。本州のみに分布し、山岳地帯に生息するとされる。中国地方の他県では広島県と鳥取県で確認されているが、生息確認地点は少なく、発見個体も多くない。県内産は、亜種ヒワミズラモグラに属するものと考えられる。

【県内での生息地域・生息環境】

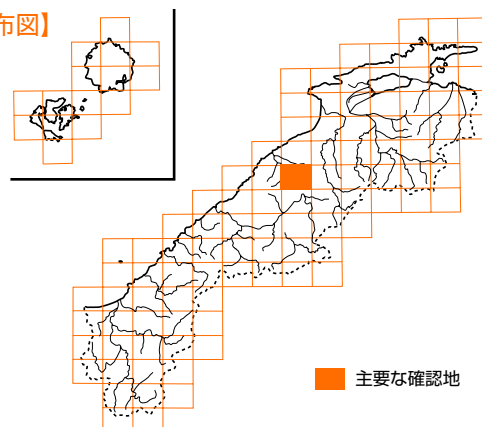
2000年に三瓶山でキツネの糞中から1個体分の骨と毛が発見され、2012年には完全な姿の死体が採集された。広島県境付近等にも生息する可能性があるが、現時点では三瓶山が県内唯一の生息地である。三瓶山の生息地は既知の生息地から遠く離れている。

【存続を脅かす原因】

生息地の開発。個体群の孤立・狭小化。農業等の体内

蓄積も懸念される。

【分布図】



生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
	○			○	○														

齧歯目リス科

ニホンモモンガ

Pteromys momonga Temminck, 1844

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

西中国山地のブナ帯に生息しているが、目撃例はきわめて少ない。森林環境の悪化による絶滅が危惧される。

【概要】

日本固有種。本州・四国・九州に分布。本種はブナ帯から亜高山帯の針葉樹林にかけて分布するとされている。樹木の葉や芽・花などのほか、昆虫や鳥類の卵を食べる。繁殖のため小鳥用の巣箱を利用することがある。夜行性で樹上性。

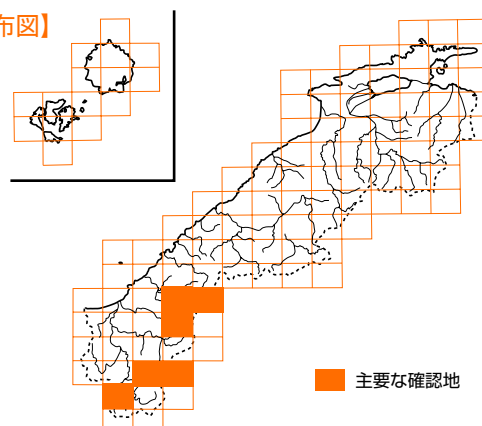
【県内での生息地域・生息環境】

西中国山地の標高800m以上の夏緑樹林に生息するがくわしい生息状況は不明である。他県では標高500m以下でも生息が確認され、標高だけで生息域を推定できないことがわかった。

【存続を脅かす原因】

森林の破壊。森林の分断による個体群の孤立・狭小化。

【分布図】



生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
△	△	○		○															

齧歯目ヤマネ科

ヤマネ

Glirulus japonicus (Schinz, 1845)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵1

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

発見例は局地的で少なく、ほとんどが冬眠時に偶然に見つけられたもの。森林環境の悪化による絶滅が危惧される。

【概要】

本州・四国・九州・隠岐諸島に分布し、平地から亜高山帯にまで生息。日本固有属固有種。天然記念物。虫食中心の雑食性と考えられる。全国的には冬眠や飼育生態等についての情報量は多いが、野生での生態や分布の情報は非常に少ない。

【県内での生息地域・生息環境】

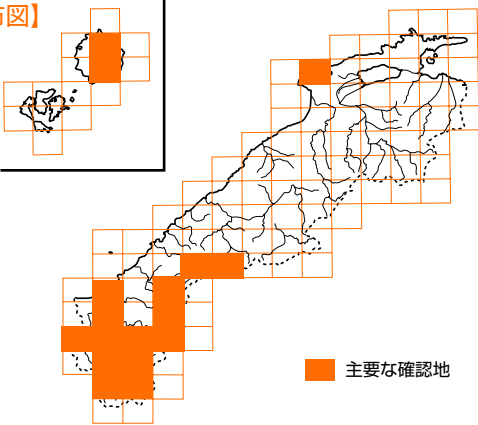
県内では、おもに隠岐（島後）と本土側西部山地で冬眠個体の発見例があり、発見は偶然的。生態や分布範囲等の詳細は不明。発見例の多くが「里山」的な環境である。

【存続を脅かす原因】

里山を含めた森林環境の破壊と、森林（生息域）の分断による個体群の孤立・狭小化。殺虫剤等の体内蓄積も

懸念される。

【分布図】



生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○	○				○													

モグラ目（食虫目）トガリネズミ科

カワネズミ

Chimarrogale platycephala (Temminck, 1842)

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵1

【選定理由】

河川流域を住み場所としているため、護岸改修や水質汚染・汚濁等による生息環境の悪化によって、生息数と生息地の急速な減少が心配される。

【概要】

本州・四国・九州に分布。日本固有種。半水生生活で、溪流に面した石垣や岩礫の間等に巣を営み出産し、移動や捕食はおもに溪流を泳いで行う。水生昆虫やカエル、溪流魚などを捕食し、時に、ヤマメなどの養魚場に大きな被害を及ぼすことがある。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	○	○				○					○								

【県内での生息地域・生息環境】

かつては、隠岐諸島を除く県内各地の河川渓流域にふつうに生息していたが、河川改修などによって岸や川床までもがコンクリートで固められたり、餌となる小魚や水生昆虫が減少して、本種の生息数や生息地も減少している。

【存続を脅かす原因】

河川改修及び水質汚染と汚濁、河川周辺の森林環境の破壊。生息域の分断による個体群の孤立・狭小化。農業等化学物質の体内蓄積も懸念される。

モグラ目（食虫目）モグラ科

コモグラ(西日本産小型アズマモグラ)

Mogera imaizumii Kuroda, 1957 (Small type)

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

現在知られている県内での生息地点は3カ所。目撃や生息に関する情報はほとんどない。

【概要】

日本固有種。本州・四国に分布。中国地方では広島県と山口県にも生息。近年は、コモグラという亜種を認めないでアズマモグラに含める学者が多い。しかし、中国産はアズマモグラとは別種の可能性があるので、県内産はコモグラ（西日本産小型アズマモグラ）としておく。

【県内での生息地域・生息環境】

1995年に出雲平野西部南端付近で収拾されたのが県内の初記録。その後、三瓶山北の原と江の川中流域西側付近で1カ所ずつ採集例がある。分布域の詳細は不明だが、本土側全域に分布している可能性がある。

【存続を脅かす原因】

生息地の開発。個体群の孤立・狭小化。農業等の体内蓄積も懸念される。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
	○	○		○	○			○	○	○									

コウモリ目（翼手目）キクガシラコウモリ科

キクガシラコウモリ

Rhinolophus ferrumequinum (Schreber, 1774)

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵1

【選定理由】

現時点で絶滅の恐れは少ないが、生息洞の周辺環境及び洞内環境の変化または破壊・洞穴そのものの破壊等により激減する恐れがある。

【概要】

北海道中西部から屋久島まで分布。日本産の小翼手目としては大型で、翼を広げた長さは30cmほどになる。「短広翼型」コウモリのため体が大きいわりに小回りができ、狭い洞穴にでも入ることができる。日中は洞穴の天井などに後足で逆さにぶら下がって休息し、夜になると活動

する。森林内などを飛びながら夜行性の飛行性昆虫を捕食する。外気温が10℃以下になると冬眠する。1産1仔。小型の哺乳類としては異例に長寿で、野生で20年以上生存した例がある。

【県内での生息地域・生息環境】

県内全域に分布。海食洞や自然の岩穴、貯蔵穴、廃坑で休息・冬眠。

【存続を脅かす原因】

洞穴環境の変化や破壊、洞穴周辺の森林破壊等。生息洞穴への不用意な入洞。農業等化学物質の体内蓄積も懸念される。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	洞穴	森林	草原	農地	河川	湖沼	洞穴	森林	草原	農地	河川	湖沼
○	○	○	○	○	○			○	○	○	○			○	○	○	○		○

コウモリ目（翼手目）キクガシラコウモリ科

コキクガシラコウモリ

Rhinolophus cornutus Temminck, 1835

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

現時点で絶滅の恐れは少ないが、生息洞の周辺環境及び洞内環境の変化または破壊・洞穴そのものの破壊等により激減する恐れがある。

【概要】

日本固有種の可能性が高い。北海道西部から奄美群島まで分布。外観はキクガシラコウモリに似ているが、ずっと小型。「短広翼型」のため狭い洞穴に入ることができる。日中は廃坑や海食洞などの天井に後足で垂下して休息し、夜間に森林内を飛び回って、ユスリカやヤブカナ

どの非常に小さい飛行性昆虫を捕食する。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐（西ノ島）を含む県内全域に分布。海食洞や自然の岩穴、貯蔵穴、廃坑などで休息・冬眠する。200頭以上の冬眠コロニーが見られる洞穴もある。

【存続を脅かす原因】

洞穴環境の変化や破壊、洞穴周辺の森林破壊等。生息洞穴への不用意な入洞。農薬等化学物質の体内蓄積も懸念される。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	洞穴	森林	草原	農地	河川	湖沼	洞穴	森林	草原	農地	河川	湖沼	洞穴	林地	草地	砂浜	河口	海食洞
○	○	○	○	○	○			○	○	○	○			○	○	○	○			○	○				○

コウモリ目（翼手目）ヒナコウモリ科

モモジロコウモリ

Myotis macrodactylus (Temminck, 1840)

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

現時点で絶滅の恐れは少ないが、生息洞の周辺環境・洞穴の破壊等により激減する恐れがある。1洞当たりの生息数はあまり多くないが、各地の廃坑や洞穴で見られ、目撃はそれほど困難ではない。

【概要】

北海道から奄美大島までと対馬、サハリン、ロシア沿海地方、朝鮮半島に分布。日中の休息や冬眠は、洞穴などで単独で行い、夜、森林内や林冠部などを飛び回って小型の昆虫類を捕食する。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐諸島を含む県全域に分布。海食洞、廃坑、利用されていないトンネルなど各地で見られるが、ふつう一度に見られるのは1～数頭程度である。繁殖期には50頭位のコロニーが見られることもある。

【存続を脅かす原因】

生息洞穴環境の変化や破壊、洞穴周辺の森林破壊等。生息洞穴への不用意な入洞。農薬等化学物質の体内蓄積も懸念される。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	洞穴	森林	草原	農地	河川	湖沼	洞穴	森林	草原	農地	河川	湖沼	洞穴	林地	草地	砂浜	河口	海食洞
○	○	○	○	○	○			○	○	○	○			○	○	○	○			○	○				○

コウモリ目（翼手目）ヒナコウモリ科

ユビナガコウモリ

Miniopterus fuliginosus (Hodgson, 1835)

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵1

【選定理由】

現時点で絶滅の恐れはないが、生息洞（特に冬眠洞と繁殖洞）及び森林など採食空間等の環境変化や破壊によって、激減する恐れがある。

【概要】

アフガニスタン・インド・中国などに分布。国内では本州・四国・九州・対馬・佐渡などに生息する。日本産のコウモリのうち最大の集団を形成する種で、冬眠時には数千頭、繁殖期には数万頭のコロニーを形成することがある。森林などの上を高速で飛行しながら飛行性昆虫

を捕食する。

【県内での生息地域・生息環境】

県内全域。停空飛翔ができないため、比較的大きな洞穴を好む。廃坑や、夏には海食洞などで見られる。県東部海岸には、4～5万頭の繁殖コロニーが形成される海食洞がある。冬眠には別の洞穴が利用されている。

【存続を脅かす原因】

生息洞の環境変化と破壊及び洞穴周辺の生息環境の変化と破壊。繁殖洞や冬眠洞などへの不用意な入洞。農薬等化学物質の体内蓄積も懸念される。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	洞穴	森林	草原	農地	河川	湖沼	洞穴	森林	草原	農地	河川	湖沼	洞穴	林地	草地	砂浜	河口	海食洞
○	○	○	○	○	○			○	○	○	○			○	○	○	○			○	○				○

コウモリ目（翼手目）ヒナコウモリ科

テングコウモリ

Murina leucogaster Milne-Edwards, 1872

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

もともと生息数が多い。県内では冬眠洞が2～3カ所知られているのみで、1年間に1～5頭が目撃されている程度である。

【概要】

北海道・本州・四国・九州、サハリン、ロシア沿海地方、朝鮮半島に分布。日本産を亜種や別種として分ける研究者もいる。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐諸島を除く県内。現在、県中部の4カ所で生息が

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
△	○	○		○				○	○				○						

確認されており、洞穴内で冬眠している個体が観察されている。出産や育児は樹洞で行われると思われるが、県内では報告例がない。森林内を飛翔しながら昆虫類を捕食し、日々の休息はおもに樹洞で行われるものと思われる。廃坑などの内壁のくぼみや発破の穴にもぐって冬眠していることがある。

【存続を脅かす原因】

休息や冬眠するための洞穴環境の変化と破壊、樹洞のある大径木が茂る森林の消失。周辺の森林環境の破壊。農薬等化学物質の体内蓄積も懸念される。

コウモリ目（翼手目）ヒナコウモリ科

コテングコウモリ

Murina ussuriensis Ognev, 1913

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

過去、県内の数カ所で目撃例があるが、目撃個体数は少ない。

【概要】

外観はテングコウモリに似るが、ずっと小型。北海道から屋久島・隠岐諸島・対馬、サハリン、ロシア沿海地方、朝鮮半島に分布。日本産を亜種とする研究者もいる。休息や繁殖の場所として樹洞を利用し洞穴内には入らないが、山間部では、捕食のために民家や家畜舎に入ることがある。他県では、蔓に付いたままのクズなどの

枯れ葉にくるまって休眠していた例が報告されている。また、広島県八幡高原では、雪中で「冬眠」していたコテングコウモリが見つかった。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐諸島を含む県内の森林に生息。過去、隠岐（西ノ島）と三瓶山地域・匹見川中流域での生息確認がある。

【存続を脅かす原因】

休息と冬眠のための樹洞がある大径木が生育するような森林の破壊。農薬等化学物質の体内蓄積も懸念される。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
△	○	○	○	○				○	○				○						

ネコ目（食肉目）イタチ科

ニホンイタチ

Mustela itatsi Temminck, 1844

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵1

【選定理由】

過去に比べて、生息地・個体数ともに減少している。

【概要】

日本固有種。本州・四国・九州・屋久島などに分布し、近年は北海道にも侵入。導入飼育されたチョウセンイタチが野生化し、おもに西日本で分布を広げており、ニホンイタチを駆逐していると言われているが詳細は不明。

【県内での生息地域・生息環境】

県内全域に分布。隠岐諸島は自然分布か否か不明。かつては、水田や池や川などの水辺周辺でよく目撃された。

近年は水田の減少や溜池の消失、河川環境の変化などによって生息環境が悪化している。県内でもチョウセンイタチは分布を広げて集落伝いに山間部にまで侵入しており、平野部ではニホンイタチがほとんど見られなくなっている。

【存続を脅かす原因】

水辺環境の変化と減少。チョウセンイタチとの競合。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	○	○	○	△		△	△	△		△		△	△	△	△				

コウモリ目（翼手目）ヒナコウモリ科

ホンドノレンコウモリ

Myotis nattereri (Kuhl, 1818)

【選定理由】

全国的に生息洞・生息数はきわめて少ない。県内では、毎年秋から冬にかけて1～数頭が目撃されていたが、現在は見る事ができない。

【概要】

ヨーロッパ西部からアフリカ北部・アジア東部などに分布。国内では北海道・本州・四国・九州に分布。冬眠は、洞穴の壁面にあるくぼみやクラック・発破の穴などで単独で行う。

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【県内での生息地域・生息環境】

過去、県中部の使われていなかったトンネルで、毎年9月に1～5頭が目撃できたが、1998年頃からはトンネルが改修され使用されるようになり見られなくなった。

【存続を脅かす原因】

生息洞穴の環境の変化と破壊。洞穴周辺の森林破壊。生息洞への不用意な入洞。農業等の体内蓄積も懸念される。

ネズミ目（齧歯目）リス科

ニホンリス

Sciurus lis Temminck, 1844

【選定理由】

過去の狩猟統計に「リス類」の捕獲記録が見られるが、ニホンリスか否かは不明。過去の生息や、県内に現在も生息しているかは不明。

【概要】

日本固有種。本州・四国に広く分布するが、現在は九州での生息確認はない。平地から亜高山帯にまで分布し、低地では松林などを好むとされるが、照葉樹林の動物ではないらしい。昼行性で、早朝と午後に活動する。ドングリやクルミなど堅果類やマツの実などの果実や種子を

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（中国地方以西のニホンリス）LP

好んで食べる。

【県内での生息地域・生息環境】

国内での分布状況から推察すると、県内からは比較的近年になって人為的な原因によって減少又は消滅した可能性がある。

【存続を脅かす原因】

狩猟、森林破壊等。

1. 鳥根県の鳥類相

日本鳥類目録改訂第7版には、国内で記録された種として、24目81科633種と、国内で繁殖記録のある外来種43種が報告されている。鳥根県でこれまでに報告された鳥類は、明治24年に渡辺盈作が動物学雑誌に「鳥根県下鳥類目録第一回報告」として62種を発表して以来、多くの報告があるが、まとまったものは比較的限られる。和名や分類が現在と異なっているものもあり、一概に比較はできないが、1970年の「鳥根県に分布する鳥類」（鳥根県発行）では21目48科224種（亜種11種を含む）、1978年の「鳥根県鳥類目録」（根岸啓二監修、鳥根県発行）では18目55科286種（亜種を含めば298種）、1983年の「鳥根県の鳥類」（内田 映著、鳥根野鳥の会発行）では297種（亜種を含めば305種）、1984年の「しまねの野鳥」（佐藤仁志ほか著、山陰中央新報社発行）では323種・亜種、1994年の「しまねの野鳥（II）」（濱田義治ほか著、山陰中央新報社発行）では338種・亜種、1997年の「しまねの鳥」（日本野鳥の会鳥根県支部編、鳥根県発行）では358種・亜種が報告されている。さらに、近年確認された種を含めれば、本県で確認された種・亜種は400種余りに及ぶ。

このように、本県に生息する鳥類相については、次第にその概要が明らかになってきており、これまでに本県で確認された鳥類は、国内で記録されている鳥類の約65%に及び、豊富な鳥類相が見られる地域といえよう。

鳥類相の特徴は、地理的条件や自然環境と不可分の関係にある。本県の北西部は日本海に面し、日本海に浮かぶ隠岐諸島もある。また、南部には標高1,000m級の中国山地が連なり、脊梁部を形成している。中国山地は標高がさほど高くなく、古くからたたら製鉄に伴う薪炭生産が盛んに行われてきたため、多くの地域はアカマツやコナラを中心とする二次林が優占し、自然林はごくわずかしか残っていない。また、中海・宍道湖といった国内で5番目と7番目に大きい湖も抱えている。これらの周辺には、出雲平野や安来平野などの広大な水田地帯も広がっており、一帯は水鳥類の絶好の生息域となっている。さらに、朝鮮半島を含む中国大陆と比較的近い位置

にあるなど、自然環境や地理的条件には、他県にみられないようないくつかの特徴があり、それらを反映した鳥類相がみられる。具体的には、マガンやコハクチョウなど冬鳥の日本列島における南限の越冬地となっていることや、大陸系の珍しい鳥類の渡来が多いこと、日本海を直接横断して渡来・渡去する渡り鳥が多いこと、宍道湖・中海が国内最大級の水鳥の渡来地になっていること、カンムリウミスズメなどの稀少な鳥類が隠岐諸島などの無人島で繁殖していることなどが上げられる。

2. 掲載種の選定に当たって

このたびの改定作業に当たっては、改訂しなれどレッドデータブック（2004年、鳥根県）に掲載されている種をベースに、カテゴリー区分のもとに見直しや追加を行った。また、前回の選定と同様に、環境省のレッドデータブック掲載種にはこだわらず、本県における生息状況や絶滅の危険性といった独自の観点から選定作業を行った。特に、留鳥や夏鳥については、繁殖状況を重要視した。

なお、国内に渡来することがまれな種や、迷鳥的な種については、その取り扱いが難しいところがある。本県では、環境省のレッドデータブックに掲載されている種の多くが記録されているが、迷行的な種については取り上げないこととし、ほぼ恒常的に渡来する種に絞って選定を行った。

亜種の取り扱いについては、亜種の識別が可能で亜種ごとの評価が異なる場合には、亜種を種と同様の扱いとした。

絶滅した鳥類としては、トキのみを取り上げた。トキのほかにもコウノトリ、タンチョウ、キタタキなど、過去において繁殖していたり恒常的に渡来していた可能性が高く、絶滅種として取り上げてもよいと思われる種もあったが、確かな生息や繁殖の記録がないため、このたびは取り上げなかった。

分類や学名等については、日本鳥類目録改訂第7版（日本鳥学会2012）を採用した。

（佐藤仁志）

鳥類掲載種一覧

計80種

絶滅（EX）

・ トキ			計1種
------	--	--	-----

絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）

・ カラスバト	◇ ヒメクロウミツバメ	・ ヨシゴイ	
・ オオヨシゴイ	◇ カンムリウミスズメ	・ ハチクマ	
・ オオタカ	・ サシバ	・ クマタカ	
・ ブッポウソウ	・ ハヤブサ	↑ ヤイロチョウ	
○ ウチヤマセンニュウ	◇ イワミセキレイ	◇ コイカル	計15種

絶滅危惧Ⅱ類（VU）

・ ヒシクイ	・ カリガネ	・ オオハクチョウ	
・ アカツクシガモ	◇ ミゾゴイ	・ クロツラヘラサギ	
・ クイナ	・ ヒクイナ	・ ヨタカ	
・ タマシギ	・ コアジサシ	・ ミサゴ	
・ オジロワシ	↑ チュウビ	・ オオコノハズク	
・ コノハズク	・ アカショウビン	↑ ヤマセミ	計18種

準絶滅危惧（NT）

・ マガン	・ コハクチョウ	・ ツクシガモ	
・ オシドリ	・ トモエガモ	・ サンカノゴイ	
・ クロサギ	・ イカルチドリ	・ シロチドリ	
・ ハマシギ	・ ハイイロチュウビ	・ フクロウ	
・ アオバズク	・ トラフズク	・ コミミズク	
・ チョウゲンボウ	・ ホオアカ		計17種

情報不足（DD）

・ コクガン	・ オオミズナギドリ	・ コウノトリ	
・ ヘラサギ	◆ ササゴイ	・ マナヅル	
・ ナベヅル	◆ セイタカシギ	・ オオジシギ	
◆ ホウロクシギ	・ ズグロカモメ	・ マダラウミスズメ	
・ ウミスズメ	・ コウミスズメ	・ オオワシ	
◆ ツミ	◆ ハイタカ	・ イヌワシ	
・ コチョウゲンボウ	◆ サンショウクイ	◆ サンコウチョウ	
・ アカモズ	○ コシアカツバメ	・ コヨシキリ	
◆ ホシムクドリ	○ コルリ	・ ノビタキ	
○ コサメビタキ	○ クロジ		計29種

【記号説明】

- ・：カテゴリー区分変更なしの種（59種）
- ↑：上位のカテゴリー区分への変更種（3種）
- ↓：下位のカテゴリー区分への変更種（0種）
- ：新規掲載種（5種）
- ◇：情報不足からの変更種（5種）
- ◆：情報不足への変更種（8種）

トキ

Nipponia nippon (Temminck, 1835)

島根県：絶滅（EX）

島根県固有評価：－

環境省：野生絶滅（EW）

【選定理由】

島根県内にも、過去においてトキが生息していたが、昭和初期に絶滅してしまった。

【概要】

トキは古くは日本全国に生息していたが、1870年代には乱獲などにより各地で数を減らした。1934年に天然記念物に指定され、1952年に国の特別天然記念物に指定されたが、この時点では能登半島と佐渡島にわずかに生息するのみで、すでに絶滅寸前の状態となっていた。1967年、新潟県は佐渡トキ保護センターを建設し、野生のトキへの給餌や飼育個体での人工繁殖を試みた。その後、1976年に環境庁が人工繁殖に取り組むことを決め、1981年には、最後に残っていた5羽の野生のトキを捕獲し、人工繁殖を本格的にスタートさせた。1999年に初めて人工繁殖に成功したが、2003年に日本産最後のトキが死亡した。その後は、中国産トキによる人工繁殖によりその数を増やし、2007年には国内飼育下のトキが100羽を超

え、2008年には佐渡島で10羽を放鳥し、以後、毎年放鳥が続けられている。また、2008年に分散飼育実施地として石川県、出雲市、長岡市の3カ所が決まり、出雲市では2011年より飼育を開始している。

【県内での生息地域・生息環境】

昭和の初期から中ごろには、隠岐諸島全域に多数生息していたが、狩猟圧などにより急激に減少した。最後の確認は1937年の西ノ島美田地区であるが、1939年の聞き取り調査では、まだ4～6羽が生息していたとの記録が残っており、絶滅は1945年と考えられる。

【存続を脅かした原因】

人口増加や社会の変化に伴うトキの生息環境（採餌地、営巣地など）の消失、狩猟圧、農薬汚染によるエサの減少など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
			×					×		×	×				×	×					

カラスバト

Columba janthina janthina Temminck, 1830

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵2

島根県固有評価: -

環境省:準絶滅危惧(NT)

【選定理由】

タブノキなど常緑広葉樹の林を中心に生息するが、そのような環境は限られている。また、生息数も少なく、繁殖地も限られている。隠岐諸島は、日本海側における数少ない生息地であるが、生息数も多くないことなどから、絶滅が危惧される。

【概要】

ハト科中最大の大きさを誇るカラスバトは種カラスバトの基亜種で、国内では伊豆諸島、本州の温暖部と九州の海岸部およびその周辺の島嶼、沖縄諸島などに分布する。国の天然記念物。国外では韓国南部の海岸や島嶼に生息しており、鬱陵島では郡の鳥に指定されている。キジバトより大型で、全身が紫や緑色の金属光沢のある黒色を呈す。スダジイやタブノキ、ヤブツバキなどからなるよく繁った常緑広葉樹林に生息し、地上や樹上で餌を採る。おもな餌はタブノキやクロガネモチなど果肉のある果実のほか、ヤブツバキやスダジイの堅果など。繁殖

期にはつがいが生息し、大木の枝や樹洞に小枝を積み重ねた浅い皿形の粗雑な巣を作り1個の卵を産む。「ウッウウウウウ ウッウウウ」と大きく奇妙な太い声で鳴き、ウシの声を連想させることからウシバトと呼ばれることもある。なお、小笠原諸島にはアカガシラカラスバト、先島諸島にはヨナクニカラスバトと呼ばれる別亜種が生息している。

【県内での生息地域・生息環境】

本県で確実に繁殖しているのは隠岐諸島のみで、島後や西ノ島などの大きな島のほか、大波加島や大森島などの無人島にも生息する。隠岐諸島以外では、高島で確認されているほか、島根半島などでもまれに観察されることがある。生息地は、照葉樹などが生い茂った比較的人の出入りが少ない森林。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や開発行為など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
△		○	◎	○				○										○	

ミズナギドリ目ウミツバメ科

ヒメクロウミツバメ

Oceanodroma monorhis (Swinhoe, 1867)

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵2

島根県固有評価: -

環境省:絶滅危惧Ⅱ類(VU)

【選定理由】

県内で繁殖が確認されているのは隠岐諸島のみであり、生息数も少ないことから、存続基盤はきわめて脆弱である。

【概要】

全長17-20cmの小型の海鳥。全体に黒褐色で、腰に白色部はない。翼はウミツバメ類としては短めで、上面は大雨覆が淡色のため、その部分が淡い帯状に見える。初列風切基部の羽軸は白いが、野外での確認は難しい。日本のほかロシア極東部、韓国、中国沿岸の無人島などで繁殖している。国内には夏鳥として渡来し、青森県、岩手県、石川県、京都府、福岡県などの島嶼で繁殖している。繁殖地では、夜間に飛来し、夜明け前に飛去する。岩の隙間や土中に穴を掘って営巣するほか、オオミズナギドリの古巣などを利用して繁殖する。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐諸島では、昭和28年および29年に成鳥と雛が採集

され、本種の繁殖が明らかになったが、その後はわずかな目撃情報のみであった。現在は、2005年に環境省自然環境局生物多様性センターのモニタリングサイト1000海鳥調査において、無人島の1つで繁殖していることが改めて確認された。また、同調査は2010年にも実施されており、この時の調査では島全域の飛来数は不明としながらも、調査時の状況から100羽以上の規模と報告している。繁殖が確認されている島では、現在のところ本種の繁殖地存続の脅威となるネズミ類の生息は確認されていないが、一旦侵入した場合の影響は計り知れず、船舶の接岸時にネズミ類を持ち込まない注意喚起などを含め、十分な配慮と見守りが必要である。

【存続を脅かす原因】

ネズミ類やカラス類などによる卵や雛の捕食など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
△			◎																

ヨシゴイ

Ixobrychus sinensis sinensis (Gmelin, 1789)

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵2

島根県固有評価: -

環境省:準絶滅危惧(NT)

【選定理由】

本種(亜種)は、大河川の河口部などにある広大なヨシ原や草原が、人為的な改変により急激に減少してきたことや、中継渡来地の環境悪化などにより、近年渡来数が激減している。

【概要】

日本産のサギ類中でもっとも小型で、全長36cm内外。夏鳥として5月中旬から下旬頃に渡来し、大河川の河口部に広がるヨシ原や、マコモ、ガマなどの繁った湿地の草原に生息する。常にヨシ原などの中に潜み、見通しのよいところに現れることはほとんどない。移動する時は、ヨシ原の上空をすれすれに飛ぶ。夕暮れや夜明け頃によく活動し、じっと立ち止まり待ち伏せして、魚類やカエルなどを捕食する。繁殖期には、「ウー ウー ウー」とうめくように連続して鳴く。5～8月に水辺にあるヨシやマコモの草原に営巣し、5～6個の卵を産む。18日前後で孵化し、約3週間で巣立つ。外敵が近づくと、頸を

ピンと伸ばして正面を向き動かなくなるといった擬態をとることでよく知られている。

【県内での生息地域・生息環境】

以前は、斐伊川や神戸川など大河川の河口部や、隠岐諸島などに渡来し繁殖していた。築地松が点在する斐伊川河口部の水田地帯では、昭和30年代まで竹藪や灌木などに普通に営巣していたようである。斐伊川河口部のヨシ原では、40年ほど前まで比較的普通に見られ繁殖もしていたが、近年激減し姿を見る機会はきわめて少なくなった。

【存続を脅かす原因】

河口部や沼沢地に広がっていた広大なヨシ原の消失や湿地の改変、東南アジアなど越冬地における生息環境の悪化、中継渡来地における環境の悪化など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	○	○	○												△	○	○		○

オオヨシゴイ

Ixobrychus eurhythmus (Swinhoe, 1873)

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

島根県固有評価: -

環境省:絶滅危惧ⅠA類(CR)

【選定理由】

本種はヨシゴイと同様に、大河川の河口部などにある広大なヨシ原や草原が、人為的な改変により急激に減少してきたことや、中継渡来地の環境悪化などにより、近年渡来数が激減している。

【概要】

ヨシゴイより一回り大きい全長39 cmほどの小型のサギ類。オスは頭が黒褐色で、背中が黒っぽい栗褐色。喉から胸にかけて一本の細い縦じまがある。夏鳥として3～4月ごろ渡来し、主として北海道や本州中部以北などで繁殖する。ヨシ原や水草の繁茂した中に潜み、草の間の地上や水中を歩いて活動する。夕暮れ時や夜明け頃によく活動し、魚やカエル、エビ類などを餌としている。繁殖期には「ウォー ウォー ウォー」とある間隔をおいてうめくように連続して鳴く。ヨシやマコモが生育する水辺の草原の上に、茎や葉を束ねて24～30cmの粗末な皿型の巣を作り、5～7月に純白色の卵を5～6個産む。

抱卵中に外敵が接近した時などには、頭と頸部を上方に細長く伸ばし、嘴を空に向け静止し擬態する。冬季は、フィリピンなど東南アジアに渡る。

【県内での生息地域・生息環境】

斐伊川河口部や隠岐諸島などに渡来し繁殖していたが、ヨシ原などの消失に伴い急速に生息数が減少している。斐伊川の河口部では、40年ほど前まで比較的普通に見られ繁殖もしていたが、近年は観察情報がほとんどなく、確実な繁殖記録も見あたらない。

【存続を脅かす原因】

河口部や沼沢地に広がっていた広大なヨシ原の消失や湿地の改変、東南アジアなど越冬地における生息環境の悪化、中継渡来地における環境の悪化など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○		△	○												○	○			○

カンムリウミスズメ

Synthliboramphus wumizusume (Temminck, 1836)

写真 口絵2

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

島根県固有評価: -

環境省:絶滅危惧Ⅱ類(VU)

【選定理由】

確実な繁殖地は隠岐諸島のみで、生息数も多くはないと考えられ、本種の存続基盤はきわめて脆弱である。また、冬鳥としても県下の日本海域に回遊するが、その実態などは不明であり、併せて情報収集を行っていく必要がある。

【概要】

全長24-27cm。夏羽は頭頂に黒く細長い冠羽がある。日本近海で繁殖し、宮崎県の枇榔島、伊豆諸島の三宅島や鳥島、福岡県の沖ノ島や小屋島などが集団繁殖地として知られている。冬季、ウミスズメなどに混じって県内の沿岸海上などに姿を見せることもある。潜水し、魚類や甲殻類を捕食する。国の天然記念物。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐諸島では1969年に採集された卵標本の存在や、1995年に同島で鳴き声が確認されたことなどから、その生息や繁殖の可能性が示唆されてきたが、近年における

確実な繁殖については確認されていなかった。現在は、2010年に環境省自然環境局生物多様性センターのモニタリングサイト1000海鳥調査において無人島の1つで繁殖が確認され、その後の島根県の調査でも繁殖していることなどが確認されている。他の隠岐諸島の島嶼でも、夜間に周辺海上に本種が集まっている様子が観察されており、繁殖の可能性が高いものの確認には至っていない。繁殖が確認されている島以外は、本種の繁殖の脅威となるネズミ類の生息情報があることから、仮に繁殖していたとしても、その数は多くはないと考えられる。海上では、益田市の沖合でも観察されているほか、隠岐航路でもまれに確認される。

【存続を脅かす原因】

ネズミ類やカラス類などによる卵や雛の捕食のほか、油の流出、海洋汚染、魚網への絡まりなど。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
△	△	○	◎																
																		○	◎

ハチクマ

Pernis ptilorhynchus orientalis Taczanowski, 1891

写真 口絵2

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

島根県固有評価: -

環境省:準絶滅危惧(NT)

【選定理由】

本種(亜種)は良好な環境を保つ里山の丘陵帯から山地において、食物連鎖の頂点に立つ猛禽類といえる。県内の生息状況について十分に把握されているわけではないが、個体数は多くない上に、生息適地は減少していると考えられる。

【概要】

種としては、ユーラシア大陸の温帯・亜寒帯で繁殖し、東南アジアやインドに渡って越冬する。国内には本亜種が夏鳥として丘陵地から山地の林に渡来し、5月中旬から10月上旬まで過ごす。全長オス約57cm、メス約61cmと、トビ(全長約60cm)と同じくらいか少し小さい程度の猛禽類で、姿はクマタカに似ているが、本種の方が飛翔時の翼の幅が狭く見える。また、飛翔中、他のタカ類に比べると頸が細長く見える。全体に褐色を主体にした色彩であるが、黒っぽいもの、白っぽいものなど個体による変化が大きい。タカの仲間でありながら蜂を好んで食べ

るといった特異な習性を持っている。もっとも好んで餌にするのは地バチで、特に小型のクロスズメバチ類の幼虫(蜂の子)であるという報告がある。ほかに、アリ、シロアリなどの昆虫、カエル、ヘビなども捕食することもある。

【県内での生息地域・生息環境】

夏鳥として渡来し、丘陵地から山地にかけて生息するが、個体数は多くない。1990年に浜田市で雛のいる巣に蜂の巣を運び込む様子が確認されるなど、里山を中心に営巣が確認されている。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や開発、林相変化などによる生息適地の減少や餌動物の減少などが考えられる。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	○	○	○	○				○											

オオタカ

Accipiter gentilis fujiyamae (Swann et Hartert, 1923)

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵2

島根県固有評価: -

環境省:準絶滅危惧 (NT)

【選定理由】

本種（亜種）は里山部における食物連鎖の頂点に立つ大型の猛禽類で、その生息基盤が脆弱である。関東などでは近年生息数が増加し、レッドデータブックのランクが下げられたりしているが、本県においてはそのような状況はみられない。県内で繁殖が確認されている地域は、比較的人の生活圏に近く開発行為が行われやすいことや、松くい虫による営巣木の枯死などにより急速に生息環境が悪化してきている。

【概要】

種オオタカは、ユーラシア大陸および北アメリカ大陸の北部を中心に北半球に広く分布している。本亜種は、本州・四国のほか、北海道から千島列島・サハリンに分布する。オスの全長約50cm、メス約56cmのカラス大の猛禽類で、森林内や森林に接した草地や農地に生息する。おもにハト類などの鳥類を餌としており、まれにノウサギなどの哺乳類も捕食する。アカマツなど針葉樹の太枝

の付け根などに、小枝を組み合わせた直径60～70cm、厚さ55cmほどの巣をかける。5月ごろ3～4個の淡青灰色の卵を産み、抱卵日数は35～38日で、おもにメスが抱卵する。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では、冬に漂行した個体が農耕地や川原などで比較的良好に見られる。以前は、夏期にも個体が確認されることなどから、繁殖が確実視されていたが、営巣確認には至っていなかった。近年（2000年頃）からになって、数は多くはないが繁殖が確認されるようになった。繁殖は低山部の森林で行い、営巣木はアカマツが多い。

【存続を脅かす原因】

高速道路や林道整備などの開発行為による生息環境の悪化、近年の松くい虫被害に伴う営巣木として利用するアカマツの枯死など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	○	○	○	○	○			○	○	○	△		○	○	○	○		○	

サシバ

Butastur indicus (Gmelin, 1788)

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵2

島根県固有評価: -

環境省:絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

【選定理由】

かつては、県内の里山で普通に見られたが、近年渡来数が激減した。人里に近い環境に営巣するため、人為的な改変により影響を受けやすく、タカ類の中ではもっとも減少率が高い種と考えられ、絶滅が危惧される。

【概要】

夏鳥として渡来する中型のタカで、全長約50cm、翼開長110cm。頭部の白色の眉斑が特徴で、本州から九州の低山や丘陵などで繁殖する。アカマツ林に営巣することが多く、巣はアカマツなどの10～20mの枝上に作り、生息環境がよければ毎年同じ巣を補修して連続して使用することが多い。餌場は、水田や畑、伐採跡地などの開けた土地で、谷に水田が入り込んだ地域を特に好む。電柱や木の枝などにとまって、地上にいるヘビやカエル、トカゲ、大型昆虫などを捕食する。「ピクイー」とか「キンミー」と聞こえる独特の鳴き声の特徴。春に南方から渡来し、4月末から5月初めにかけて2～4個の卵を産

む。1カ月ほどで雛がかえり、40～45日で巣立つ。10月初旬頃、大群で渡りをする事が知られているが、日本海側では太平洋側のように大きな群れを見ることがないことから、山陰地方で繁殖した個体は、瀬戸内海に抜けて九州に入り、島づたいに東南アジア方面へ渡っていくのではないかと考えられる。

【県内での生息地域・生息環境】

県内全域の里山に生息し、特に谷あいの入り組んだ水田地域を好む。中には、里山の森林地帯を中心に生息する個体もいる。

【存続を脅かす原因】

里部における森林の開発、松くい虫による営巣木の減少、谷奥部の水田や畑地の放棄、東南アジアなど越冬地や中継渡来地における生息環境の悪化など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	○	○	○	○	○			○	○	○			○						

クマタカ

Nisaetus nipalensis orientalis (Temminck et Schlegel, 1844)

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵2

島根県固有評価: -

環境省:絶滅危惧ⅠB類(EN)

【選定理由】

森林性の大型のタカで、生態系の頂点に立つ種である。生息数が多い上に、山林の伐採や開発などによる影響が懸念される。また、近年繁殖率の低下も指摘されている。

【概要】

種としては、スリランカ・インド南西部から中国南部・日本にかけて分布する。日本に生息する亜種クマタカは、韓国で観察された情報もあるが、日本が主要な生息地であり、ほぼ日本特産の亜種といえる。国内では、北海道から九州にかけて留鳥として分布し、1年中、同一地域で暮らす。国内の生息数については、最低でも約900ペア(1,800羽)が確認されたという報告がある。生息地の地形的要素としては、大きな谷が重要で、なわばりは普通20km前後。餌はノウサギ、テンなどの哺乳類や、アオダイショウ、シマヘビなどの爬虫類、ヤマドリ、キジなど中型以上の鳥類が多い。1～2月頃、求愛行動や巣

材運びを行い、3月下旬から4月に産卵する。繁殖は古い巣を直しながら毎年使用することが多く、行動圏内に予備の巣を持つことが知られている。営巣に使用する木は、アカマツやモミなどの針葉樹の大木が多く、幹上部の大枝の分かれ部などに、直径1m以上、厚さ70cm以上の大きな巣を作る。

【県内での生息地域・生息環境】

ある程度急峻な斜面を持つ谷のある森林地帯が主たる生息域で、平野部と里山低地部を除くほぼ全域に生息している。営巣は、山地の中腹より下部の針葉樹林の大木で行うことが多く、高樹齢の林内や伐採跡地などを餌場とする。

【存続を脅かす原因】

ダムや道路建設などの林地開発、森林伐採、松くい虫、有害化学物質の蓄積による繁殖力の低下など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	○	○	△	○	○			○	○										

ブッポウソウ

Eurystomus orientalis calonyx Sharpe, 1890

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵3

島根県固有評価: -

環境省:絶滅危惧ⅠB類(EN)

【選定理由】

以前は、県内の山間地で比較的普通に見られたが、近年急激に姿が見られなくなった。営巣木の確保などの保護対策が講じられなければ、絶滅する恐れがある。

【概要】

本亜種は、日本のほか中国東北地方、アムール地方、朝鮮半島に分布する。青緑色の体に赤い嘴を持つ異国情緒の鳥で、夏鳥として渡来する。全長約30cmで、キジバトより少し小型。野外では全体的に黒っぽく見え、ふわふわと飛ぶことが多いが、急旋回することもある。飛ぶと翼の白い紋がよく目立つ。神社や寺など、大きな樹木のある場所を好む。見晴らしのよい高所に止まり、セミやコガネムシ、トンボなどの昆虫を捕食する。餌を捕らえると、また元の場所に戻る習性を持っている。「ゲッゲッ」と濁った声で鳴く。5月下旬から7月上旬、大木に開けられたキツツキの古巣などを利用して営巣する。3～5個の卵を産み、22～23日で孵化し、その後20～26

日ぐらいで巣立ちする。貝殻や缶ジュースの栓などを、巢内に持ち込む変わった習性がある。

【県内での生息地域・生息環境】

近年では、繁殖地は限定された場所に限られてきている。以前は、木の電柱にキツツキなどによって掘られた穴に営巣することが比較的普通に見られたが、木の電柱がコンクリート製にかえられたことなどから激減し、近年急速に姿が見られなくなった。岡山県や鳥取県、広島県などでは、電柱などに人工の巣箱を設置し繁殖場所を確保するなどの保護対策が行われており、本県でも一部の地域で取り組まれている。河川の橋脚にある隙間を利用し、繁殖をしている個体も見られる。

【存続を脅かす原因】

営巣木の消失(特に木製電柱の撤去)、生息環境の悪化など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	○	○	○	○				○		△	○								

ハヤブサ

Falco peregrinus japonensis Gmelin, 1788

島根県：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵3

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

【選定理由】

海岸部における生態系の頂点に立つ重要な種であるが、日本全体での推定個体数が700～1,000羽と少ない。県内の海岸部は、北海道や三陸海岸に次ぐ国内有数の繁殖地域である日本海側地域に含まれるが、近年、繁殖地付近への人の立ち入りなどによる生息環境の悪化や、有害化学物質の蓄積などによる繁殖率の低下などが危惧される。

【概要】

種ハヤブサは、ほぼ全世界に分布し、このうち亜種ハヤブサは東アジア北部と日本に分布する。本県には、留鳥として生息し、人の近寄れない海岸や山の断崖の岩棚に営巣する。羽ばたきと滑翔を交互に行い、直線的に高速で飛翔し、ヒヨドリなどの中型の小鳥類を中心に捕食する。飛翔中の鳥の上空から翼をすぼめて急降下し、脚で蹴り落とし捕らえることが多い。繁殖期は3月下旬から4月上旬で、岩だなの平坦部に直接3～4個の卵を産

む。約1カ月で雛がかえり、40日ほどで巣立つ。冬季など、非繁殖期には全国各地の海岸や平野部などに漂行し、特に広い水面や平坦地のある環境を好む。本県では、冬季に水田地帯などで漂行してきた個体が比較的良好に確認される。

【県内での生息地域・生息環境】

繁殖個体は、切り立った岩場のある海岸部に多く、島根半島や隠岐諸島の海岸部で繁殖地が確認されている。近年になって、内陸部においても繁殖が確認されたが、これはまれなケースである。一方、非繁殖期に漂行する個体は、斐伊川など大河川の河口部や平野部で多く見られ、冬季に個体密度が増加する。

【存続を脅かす原因】

繁殖地付近への釣り人などの立ち入り、有害化学物質の蓄積による繁殖力低下など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	崖地
○	○	○	○	△	△				○	△	○				○	○	○	○			○	○		○	◎

ヤイロチョウ

Pitta nympha Temminck et Schlegel, 1850

島根県：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵3

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類(EN)

【選定理由】

まれな夏鳥で、ごく限られた地域でしか繁殖せず生息数も多くない。本種の生息環境は、照葉樹などが生い茂る豊かな自然が残存した傾斜地などであり、このような優れた自然環境の消滅とともに本種の生息基盤が脆弱となっていることが考えられる。

【概要】

本種は、日本、朝鮮半島および中国にかけて繁殖し、中国南部からインドネシア、ボルネオ島にかけての地域で越冬する。全長約18cmのムクドリ大で、嘴が太く尾が短い。脚は比較的長くて丈夫。地上を歩きながらミミズなどを捕食する。餌はミミズが多いが、サワガニや昆虫、多足類なども捕食する。その名のとおりの体色に特徴があり、頭上部は茶褐色、黒い頭中央線があり、黒くて太い過眼線との間に黄色の眉線がある。背は緑色、腰と肩は光沢のある青色、尾の基部は黒く先端は青、喉から胸は黄白色、腹の中央から下尾筒には鮮やかな赤色の部分があ

る。翼には白斑があり、飛ぶと目立つ。雌雄同色。近年において生息記録のあった地域は、暖温帯の照葉樹林が発達する地域とほぼ一致し、繁殖が確認された森林は、常緑と落葉の広葉樹およびスギ・ヒノキ植林の混成林が多いとされる。

【県内での生息地域・生息環境】

島根県内における確認例はさほど多くはないが、ほぼ県内全域に及んでいる。龍頭が滝や鰐淵寺周辺など、優れた照葉樹林が残っている斜面部で確認されることが多い。確実な繁殖の記録はほとんどないが、1977年7月に、掛合町で巣立ち後間もない幼鳥が保護されたこともあり、本県内で繁殖していることは明らかである。

【存続を脅かす原因】

伐採などに伴う照葉樹林の消滅、生息地への人の立ち入り、越冬地の環境悪化など。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○	○					○															

ウチヤマセンニュウ

Locustella pleskei Taczanowski, 1890

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵3

島根県固有評価: -

環境省:絶滅危惧ⅠB類(EN)

【選定理由】

県内では、本土側の島嶼1カ所で繁殖が確認されているほか、隠岐諸島のいくつかの島嶼で夏季に観察記録がある。日本海に浮かぶ県内の小さな島の一部に渡来・生息しているが、その個体数は非常に少なく、存続基盤はきわめて脆弱である。

【概要】

全長17cm。シマセンニュウによく似ているが、体はやや大きめで嘴が長い。さえずりは、「チッチ チョイチョイチョイ」などと聞こえる鳴き方で、シマセンニュウに似るが、1～2音短い傾向がある。以前は、シマセンニュウの亜種とされていたが、日本鳥類目録改訂第6版(2000)から別種扱いとなった。本種は、ロシア沿海地方や朝鮮半島、日本の沿岸の島嶼で繁殖し、中国南東部やベトナムで越冬する。国内では、夏鳥として渡来し、伊豆諸島のほか紀伊半島周辺や九州近海の小島などで繁殖している。海岸に近いササ藪や草地、照葉樹林などに

生息する。分布がきわめて局所的であり、総個体数は少ないと考えられている。

【県内での生息地域・生息環境】

本土側の島嶼1カ所で2008年に繁殖が確認されている。隠岐諸島では、複数の島嶼で夏季に観察記録があり、繁殖の可能性は高いと考えられるが、現在のところ営巣や巣立ち雛などの確認はできていない。いずれの場合も、小さな島の一部にある草原と灌木が混在するような環境に見られるが、このような適度な生息環境が維持されるかなど、今後の動向について注意深く見守っていく必要がある。

【存続を脅かす原因】

植生の遷移や人為的な環境の改変、釣り人の立ち入りなど。

生息地域			山地地域					里地地域					平野地域					海岸地域				
本	土	側	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	島嶼
◎			○																△			◎

イワミセキレイ

Dendronanthus indicus (Gmelin, 1789)

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵3

島根県固有評価: -

環境省: -

【選定理由】

1960～70年代には県内で本種の繁殖が継続的に確認され、全国的にもまれな事例として注目されていたが、近年は確認されなくなった。原因究明や広範な情報収集をしていく必要がある。

【概要】

全長16cm。胸に二筋の黒帯があり、他のセキレイ類とは異なり尾を左右に水平に振るのが特徴。地上を歩きながら昆虫やクモ類などを採餌する。地鳴きは「ギーツクギーツク」と聞こえる濁った声を出し、「チュチュピーチュチュピー」という高く澄んだ声でさえずる。本種は、ユーラシア大陸東部の中国中北部で繁殖し、冬は中国南部、東南アジアなどに渡る。中国大陸系の種であり、国内には数少ない旅鳥として記録されることがほとんどであるが、1970年代に福岡県や鳥取県で繁殖が確認されたほか、中部から九州にかけて複数の県で繁殖期にさえずっていた記録があり、他地域においても繁殖の可能性

が考えられている。県内では、数カ所で渡来が確認されていたほか、海岸のマツ林で継続的な繁殖が確認され、注目されていた。林の中や林縁、農耕地や草地などに生息する。

【県内での生息地域・生息環境】

1965年に大社海岸で繁殖が確認されて以来、継続的に繁殖が観察されていたが、海岸マツ林における松くい虫の蔓延や、林内環境の変化、1977年から開始された松くい虫の農薬散布の影響などから確認されなくなった。近年では、渡りの時期に海岸部に近い林などでまれに観察された記録がある。

【存続を脅かす原因】

松くい虫による海岸のマツ林の環境変化、松くい虫防除のための薬剤散布、人の立ち入りなど。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
○	△	△	△												△	△	△				○	△		

コイカル

Eophona migratoria migratoria Hartert, 1903

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵3

島根県固有評価: -

環境省: -

【選定理由】

本種（亜種）は、浜田市で繁殖が確認されていたが、近年はみられなくなった。また、毎年越冬していた場所においても観察できなくなり、県内の観察記録はきわめて少なくなった。原因の究明や現状の生息情報の収集を行っていく必要がある。

【概要】

全長19cm。イカルに似るが、より小さくて風切と初列雨覆の羽先は白い。雄成鳥の頭部の黒色部はより広い。地鳴きは濁った声で「ギョッ」「キョッ」と鳴き、さえずりはイカルの声に似て「キーキョ キーコ」などと鳴く。種としては、ロシアのアムール、モンゴル、中国の北東部や中部、朝鮮半島などで繁殖し、冬季は中国南部、台湾、日本などに渡る。国内には、本亜種が旅鳥または冬鳥として渡来し、本州中部以南で比較的多い。1980年に熊本県で繁殖の記録がある。東京でも繁殖例があるが、かご抜けであろうと考えられている。平地から

山地の林に生息し、おもに木の実や草の種子などを食べる。本種（亜種）だけの小群で生活するか、イカルの群れに混ざることもある。

【県内での生息地域・生息環境】

1980年代に浜田市において3年間で複数の繁殖個体が観察されていたが、その後は確認されていない。松江市の城山公園では、近年まで少数が越冬していたが、2002年頃から観察されなくなった。その他の記録としては、冬季または渡りの時期の情報があるが少なく、生息の実態がつかめないことから情報の収集と整理が望まれる。

【存続を脅かす原因】

継続的に生息していた場所の環境改変など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○	○					○						○										

ヒシクイ

Anser fabalis (Latham, 1787)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵3

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

本種の集団渡来地は東日本に片寄っており、それも局地的である。琵琶湖より西の集団渡来地は斐伊川だけで、ここに渡来するヒシクイは体サイズがやや小さい個体が多く、中にはマガンと同サイズの個体も見られる。さらに、亜種オオヒシクイと考えられる大型の個体も数割含まれる。東日本に渡来する個体群とは、繁殖地や渡来ルートが異なる可能性が高く、2010年4月には日本海を北上して大陸へ直接渡るルートが確認されるなど、学術的にも注目されている。マガンの個体数が急増しているのに対し、本種は100羽前後で増減し、増加しない状態が続いており、生息基盤も脆弱なことから県内における絶滅が危惧される。

【概要】

1971年に国の天然記念物に指定され保護されてから、その数が回復傾向にあるが、渡来地は局地的。現在国内には東北地方を中心に約18,000羽が渡来している。国内

に渡来するヒシクイを亜種レベルでみると、タイガ地帯をおもな繁殖地とする亜種オオヒシクイと、ツンドラ地帯をおもな繁殖地とする亜種ヒシクイの2亜種が渡来しており、亜種オオヒシクイが約12,000羽、亜種ヒシクイが約6,000羽である。

【県内での生息地域・生息環境】

集団で定期的に渡来するのは、斐伊川中流から下流部のみで、ねぐらや餌場はおもに斐伊川の河川敷内で、中州をねぐらとし牧草やツルヨシの根などを餌としている。また、周辺の水田で餌をとることもある。この他、斐伊川下流部ではマガンやコハクチョウと行動を共にする個体も1～数羽見られる。

【存続を脅かす原因】

河川改修などの生息環境の改変、湿地などの餌場の消失・環境悪化など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
◎	○	○	○														○	○	○					△	

カリガネ

Anser erythropus (Linnaeus, 1758)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵3

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類（EN）

【選定理由】

斐伊川河口部を中心に、近年毎年渡来しているが、渡来数は少ない。毎年のように複数個体の渡来が確認されている地域は、宮城県などを除けばまれであり、その動向を注目していく必要がある。

【概要】

全長58cm、翼開長128cmのガンの仲間で、マガンより一回り小さい。マガンによく似ているが、嘴が小さくて短く、ピンク色味が強い。成鳥では額の白色部が頭頂の眼と眼を結ぶ線まで達しており、眼を取り巻く黄色いリングがある。鳴き声はマガンより調子が高い。ユーラシア大陸の極北部で繁殖し、中国南部、ハンガリー、カスピ海周辺で越冬する。総個体数は全世界で3～5万羽と推定されており、生息環境の悪化や狩猟の影響などでヨーロッパでも絶滅の危機にあるといわれている。1997年に中国と日本雁を保護する会の共同調査で、中国湖南省にある洞庭湖に13,700羽が確認され注目された。国内

には、ごくまれな冬鳥としてマガンに混じって渡来するが、毎年渡来している地域は限られている。

【県内での生息地域・生息環境】

宍道湖とその周辺に渡来する約4,000羽のマガンに混じって、近年は、ほぼ毎年1～数羽が観察されている。餌場やねぐらはマガンと同じで、おもに出雲平野の刈り取り後の水田を餌場とし、宍道湖の湖面や斐伊川の中州をねぐらとしている。これまでに本種が確認されたのは、宍道湖西岸の斐伊川河口部が多いが、ほかに潟の内の記録などがある。

【存続を脅かす原因】

秋耕や裏作などによる水田の餌場環境の悪化、中州や水面などのねぐら環境の不安定化など。また、近年では撮影者などによるストレスも懸念される。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
◎			△												○	○	○				

オオハクチョウ

Cygnus cygnus (Linnaeus, 1758)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵4

【選定理由】

本県では、従前からコハクチョウに比べ渡来数がきわめて少なく、渡来状況も不安定であることから、動向を注意深く見守っていく必要がある。本種は、マコモが生息している水辺などを好む傾向があるが、そのような生息環境は限られており、水田をおもな餌場としているコハクチョウに比べると、生息基盤が不安定である。

【概要】

国内に渡来するハクチョウ類は、主としてオオハクチョウとコハクチョウの2種で、平成24年度の環境省のガンカモ類生息調査のデータによると、オオハクチョウが約27,000羽、コハクチョウが約40,000羽渡来している。本種は、コハクチョウより一回り大きく、全長約1.4m、翼開長約2.2mで、わが国に生息する鳥類の中でもっとも大きいものの一つ。コハクチョウよりも嘴の黄色部が広く、その先端が三角形にとがり黒色部に食い込むのが特徴。繁殖地は、ユーラシア大陸のタイガ地帯で、コ

ハクチョウが繁殖するツンドラ地帯よりも南部に位置する。日本には冬鳥として渡来し、越冬地は東日本がほとんどである。

【県内での生息地域・生息環境】

県内に渡来するハクチョウ類の大半はコハクチョウで、本種はコハクチョウの群れに1～数羽が混じり、水田で採餌することが多いが、ファミリー単位で渡来することがまれにある。宍道湖西岸の斐伊川河口部や安来平野のほか、隠岐諸島などで観察されることがある。県内では、神戸川河口部には、以前連続して10羽ほどの個体群が渡来していたが、河川工事の影響などから最近では見られなくなった。

【存続を脅かす原因】

河川工事などによる生息環境の悪化、マコモなど餌の減少など。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
◎	○	○	○									△					○	○	○					○

アカツクシガモ

Tadorna ferruginea (Pallas, 1764)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：情報不足（DD）

写真 口絵4

【選定理由】

本県は、朝鮮半島と近い位置にあることなどから、本種が渡来することが多い。特に、斐伊川河口部一帯には毎年のように渡来していたことがあり、貴重な地域となっている。本県は、地理的条件などから、中国大陸の奥部に繁殖する本種の定期的な渡来地として注目されていたが、近年は不安定な渡来状況が続いている。

【概要】

全長約64cmで、ツクシガモとほぼ同大の大型のカモ。全身キツネ色で、嘴と脚、尾羽と翼の先端が黒く、翼を広げると白と黒のコントラストが美しい。オスには頸部に黒色の輪があるが、メスにはない。黒海沿岸からバイカル湖以東までのユーラシア大陸中部に広く分布し、モンゴルやチベットなどで繁殖した個体が、朝鮮半島や国内に冬鳥として渡来する。朝鮮半島には群れで渡来し個体数も多いが、国内に渡来することはまれで、個体数もきわめて少ない。

【県内での生息地域・生息環境】

これまで、斐伊川河口部を中心に、宍道湖や中海の周辺、神西湖、隠岐諸島など数カ所で確認されている。渡来したほとんどの年は、1～数羽の記録であったが、1987年には斐伊川河口部に10羽の群れが渡来したことがある。その後、毎年のように見られていたが、2004年度以降は不安定な渡来状況が続く、記録がない年もある。ねぐらや休息場は河口部の砂州、餌場は周辺の水田を利用している。斐伊川河口部では、水田に飛来し落ち穂や青草などを採食する姿をよく見る。群れで渡来したときは独自で行動することが多いが、1羽の場合にはマガンの群れと行動を共にすることが多い。

【存続を脅かす原因】

生息環境の悪化やカメラマンによる追いかけなど。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
◎	△	△	○														○	○	○					△

ペリカン目サギ科

ミゾゴイ

Gorsachius goisagi (Temminck, 1836)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵4

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

日本列島で繁殖する固有種。生息状況など不明な点が多いが、減少傾向にあると考えられる。情報の集積や調査が望まれる。

【概要】

全長約49cm。全体が栗色で、頭頂は濃い栗色、背中は暗栗褐色で、体の下面はバフ色で中央部に栗色の縦縞があり、のどにも黒い縦線がある。雌雄同色。本種は、おもに夏鳥として渡来し、低山や丘陵地のスギ、ヒノキなどの針葉樹やクリ、ナラ類などの落葉広葉樹、あるいは針広混交林の良く繁った樹林に生息する。沢筋や谷間の溪流などでサワガニやミミズ、魚類などを捕食する。丘陵地の谷戸田のような里山の環境が生息に適していると考えられる。おもに夕方から夜間にかけて、あるいは雨や曇りの日の日暮れから数時間と夜明け前の数時間、「ポォー ポォー」という低い声で鳴くとされる。樹上に皿形の巣をつくるが、コロニー性はなく、つがいごとに

分散して繁殖する。このように、開けた場所でないとこで単独行動するために観察される機会は少ないと考えられる。冬季は、フィリピンおよび台湾を含む中国南部などで越冬するほか、一部は南西諸島や種子島などで越冬する。

【県内での生息地域・生息環境】

夏鳥として4月上旬から中旬に渡来する。県内では西部を中心に繁殖も確認されているが、観察記録はきわめて少なく、生息状況や分布はほとんどわかっていない。

【存続を脅かす原因】

森林の開発や伐採、林相の変化などによる生息適地の減少など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○	△		△	△		○		○	○	○		○			△	△						

ペリカン目トキ科

クロツラヘラサギ

Platalea minor Temminck et Schlegel, 1849

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵4

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類（EN）

【選定理由】

東アジアに局地的に分布する種で、学術的にも貴重である。生息環境の減少も深刻で、国際的に保護対策が必要とされている。

【概要】

全長約70－80cm。全身が白く、しゃもじ形の長い嘴は全体に黒い。ヘラサギに似ているが、目先は黒い皮膚が露出している。夏羽は胸に黄色味があり、後頭に冠羽がでるが、冬羽にはない。幼鳥や若鳥は、風切の先端と外側初列風切は黒く、飛翔時に目立つ。朝鮮半島北西部と中国東北部などで繁殖し、台湾、香港、中国、ベトナム、日本などで越冬する。2013年のクロツラヘラサギ世界一斉調査では、2,725羽が確認され、国内では277羽が記録されている。以前はまれな冬鳥であったが、近年は、九州と沖縄が主要な渡来地となり定期的に越冬している。冬鳥または旅鳥として渡来するが、越夏する個体もあり、その場合は若齢個体であることが多い。干潟、水田、河

川、湖沼などの湿地に生息し、嘴を半開きにして水の中に入れ、横に振りながら、魚類や甲殻類などを捕食する。

【県内での生息地域・生息環境】

県内には干潟のような湿地環境がほとんどないが、冬季または渡りの時期に見られる。斐伊川や飯梨川、益田川、高津川の河口部などで観察例がある。斐伊川河口では、一時的な滞在であることが多いものの、毎年のように渡来しており、夏季の記録もある。1羽で観察されることが多い。

【存続を脅かす原因】

湿地開発、河川改修などによる生息適地の減少（特に広くて浅い湿地環境の消失）など。有害化学物質の蓄積も懸念されている。最大の越冬地である台湾ではボツリヌス菌による大量死が起きたことがある。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	△	○	○														△	○	○					○	

クイナ

Rallus aquaticus indicus Blyth, 1849

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵4

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種（亜種）は、草原などの茂みの中に潜んでいることが多く、観察されにくいことから、生息状況が十分に把握されているわけではないが、個体数は多くないと考えられる。また、生息場所である水辺の草原などが減少しており、生息基盤が脆弱である。

【概要】

全長29cm。キジバトより少し小さく、体色は地味な褐色である。長い嘴は下嘴が赤く、腹部に白と黒の横縞がある。顔には褐色の過眼線があり、眼も赤色。脚は長く、尾は短い。種としてはユーラシア大陸の温帯・亜寒帯などで繁殖し、北方のものは冬季南下する。国内では本亜種が北海道と本州北部で繁殖し、冬は本州中部以南に移動する。湖沼などの水辺の草原やヨシ原、水田や休耕田などに生息するが、半夜行性で、草むらに生息するため、姿を見ることは容易ではない。朝夕には草むらの周りで餌をとることがある。湿地を歩いたり泳いだりしながら、

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○							○	○	○			○	○	○				

昆虫類、両生類、魚類、甲殻類などの動物質のほか、草の種子なども食べる。警戒心が強く、ちょっとした物音などにもすぐ反応して隠れる。単独あるいはつがいで生活し、雛を連れて育てている時期以外は群れをつくることはない。なわばり意識は強く、繁殖地でも越冬地でも一定の範囲を縄張りとして構え、他の個体が侵入してくると追い払うという。

【県内での生息地域・生息環境】

冬鳥として水辺の草原やヨシ原などで観察される。宍道湖西岸や潟の内、飯梨川や益田川周辺などで記録がある。

【存続を脅かす原因】

生息状況などに不明な点も多いが、水辺の草原やヨシ原、水田などの生息適地の減少が考えられる。

ヒクイナ

Porzana fusca erythrorhox (Temminck et Schlegel, 1849)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵4

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

本種（亜種）は、草原などの茂みの中に潜んでいることが多く、観察されにくいことから、県内の生息状況が十分に把握されているわけではないが、個体数は多くないと考えられる。また、生息場所である水辺の草原などが減少している。

【概要】

種としてはインドから東南アジア、中国、朝鮮半島にかけて分布する。全長約23cm。ムクドリくらいの大きさで、体の上面は暗緑褐色。顔から胸にかけて赤茶色。嘴は黒っぽく、脚が赤い。本亜種は夏鳥として九州以北に渡来して繁殖するほか、本州北部以南では少数が越冬する。河川や湖沼のヨシ原、水田などに生息する。非常に警戒心が強く、日中はほとんど姿を現さないが、雨の日などには日中に姿を見かけることがある。飛ぶときには、両脚を下げ、頸を伸ばして低空を直線的に飛ぶ。餌はおもに動物質で昆虫類が多く、両生類や草の種子も食べる。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域								
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○								○	○	○				○	○	○					

繁殖期には、おもに夕方から夜にかけて「キョッキョッキョッキョ」などと金属的な声で連続的に鳴く。水辺の草の中に、イネ科植物、ヨシなどの葉や茎を利用して皿形の巣をつくる。雛は早成性で、孵化後まもなく巣を離れ、親に連れられて歩く。

【県内での生息地域・生息環境】

おもに夏鳥として渡来し、宍道湖西岸や潟の内、益田川河口などで観察記録があるほか、冬季の記録もある。観察されにくく、県内の生息状況については、よく分かっていないのが現状である。

【存続を脅かす原因】

生息状況などに不明な点も多いが、水辺の草原やヨシ原、水田などの生息適地の減少などが考えられる。

ヨタカ

Caprimulgus indicus jotaka Temminck et Schlegel, 1844

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

写真 口絵4

【選定理由】

県内の生息状況が十分に把握されているわけではないが、近年急に個体数が少なくなってきたと思われる。本種（亜種）の好む環境が急激に少なくなってきたことも一つの要因と考えられる。

【概要】

全長約29cm。全体に褐色で、灰色や茶褐色などの斑紋が混じった複雑な模様をしている。嘴は小さいが根元の方が幅広く、扁平で、口を開けると非常に大きい。種としては中国から極東アジアに分布し、北方のものは冬、南へ移動する。国内には本亜種が夏鳥としておもに山地に渡来する。草原帯のある広大な山林地域を好み、草原や灌木の散在する落葉広葉樹や針葉樹の森林に生息する。おもに林縁や明るい林の地上に浅いくぼみを作り産卵する。日中は林内や林縁の大きな枝に平行にとまていることが多く、一見木の瘤のように見える。体の模様が地上に落ちた枯れ葉のようで、じっとしているときは

姿を見つけることが難しい。夕方から夜にかけてと明け方に「キョキョキョキョキョ」と連続して鳴くために、存在に気づくことが多い。長い翼でゆっくり羽ばたいて飛び回るが、飛翔スピードは速い。飛びながら飛翔性の昆虫類を捕食する。

【県内での生息地域・生息環境】

中国山地のほか、本種の好む環境があるところでは、海岸に近い山でもまれに鳴き声を確認することがある。しかし、夜行性であるため観察されにくいこともあり、県内の生息状況や分布については不明な点が多い。県西部では、山地の伐採地で繁殖が確認されたことがある。

【存続を脅かす原因】

森林の開発や林相の変化などによる生息環境の減少、中継渡来地や越冬地における環境の悪化など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域								
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○	○	○				○	○														

タマシギ

Rostratula benghalensis benghalensis (Linnaeus, 1758)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵4

【選定理由】

本種（亜種）の県内の生息状況は十分に把握されていないわけではないが、個体数は少ないと考えられる。また、本種が生息するような湿地環境の減少に伴い、生息数が減少していく可能性がある。

【概要】

全長約24cm。目の回りの曲玉模様と胸から背中に走る白線がよく目立つ。メスは卵を産むだけで、巣づくりや抱卵、子育てはオスが行う。一妻多夫という繁殖習性を持っている。メスの方が額から胸にかけて赤褐色の美しい羽色をしており、繁殖期には「コーコーコー」と連続して鳴く。種としては中国南部からインドまでのアジア地域と、アフリカ大陸、オーストラリアにかけて分布する。国内では、本亜種が本州中部以南の水田、休耕田、蓮田、湿地などに周年生息し、稲の株の間、畦道の上、湿地の草地の中などに巣をつくる。巣をつくる場所は、背丈が低い草（15cmくらい）がまばらに生えたところで

あるという報告がある。越冬できるような年中浅く冠水している場所では周年生息している。成鳥は繁殖期にはほとんど群れをつくらないが、秋から冬にかけては群れをつくる傾向がある。餌はおもに動物質で、ミミズや昆虫類を捕食する。

【県内での生息地域・生息環境】

おもに平野部の水田地帯などで観察記録がある。繁殖期には鳴き声で確認されることも多い。

【存続を脅かす原因】

巣をつくるのに適した場所として、耕したまま放置した水田や埋め立て地のように一時的にできた草地があるが、このような場所は安定して存在しない。また、乾田化が進むなど生息適地が減少していることが考えられる。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域								
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
○	△	○	○								○	○	○				○	○	○					

コアジサシ

Sterna albifrons sinensis Gmelin, 1789

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵5

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

本種（亜種）は、かつては本州以南の各地の水辺で繁殖していたとされるが、近年では全国的に繁殖地が危機に瀕しているところが多い。近年の県内の記録は渡りの時期であり、旅鳥と見られるが、繁殖地が確認できれば、その保護を図る必要がある。

【概要】

全長26cm。全体的には白っぽい小型のアジサシ類。黄色い嘴で、額が白く頭部が黒い。本亜種は中国南部からフィリピン、オーストラリアまで分布する。国内には夏鳥として本州以南に渡来する。海岸、河川、湖沼などの水辺に生息し、水面上をゆっくり飛んで、時には停空飛翔をしながら、ダイビングして小魚を捕食する。繁殖適地は小石混じりの乾燥した裸地であり、砂浜海岸や、河川の河原や中州、埋め立て地などの砂礫地を利用して集団で繁殖する。しかし、砂浜や河川敷など自然の繁殖地は減少しており、人工的に造成された場所で繁殖するこ

とが少なくない。また、埋め立て地では工事の進行にともなって適地が失われることから、本種の営巣環境は不安定な状態にある。さらに、その他の要因として、卵や雛がカラス類などの捕食者によって捕食されたり、河川敷では梅雨時に増水することで流失したりするほか、人や車が砂浜や河原に立ち入ることによって営巣地の放棄を招くことなどがあり、繁殖成功率は高くないとされる。

【県内での生息地域・生息環境】

過去には飯梨川河口などで繁殖行動の記録があるが、現在は県内での繁殖は知られておらず、宍道湖・中海や河川の河口部などの水辺でおもに渡りの時期に観察されている。

【存続を脅かす原因】

安定した繁殖適地の減少や、レジャー等による人の立ち入りなど。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	△	○	△														△	○	○					○	

ミサゴ

Pandion haliaetus haliaetus (Linnaeus, 1758)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵5

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

本種（亜種）は、魚類をおもな餌とするタカで、海岸部や湖沼周辺を中心に県内に広く分布しているが、営巣地など本種を取り巻く環境が年々悪化してきている。中でも、営巣木として利用してきたマツの大きさが、松くい虫のため枯死することが多く、深刻な状況にあるほか、餌としている魚類に蓄積した有害化学物質の取り込みに伴う影響も危惧される。沿岸・湖沼・河川部における生態系の頂点に立つ生物で、その環境指標ともなる種であるが、繁殖成功率が高いとはいえない状況にある。

【概要】

本種は広く世界中に分布する。国内には本亜種が留鳥として生息し、全長55－65cm、翼開長は170cmにも及ぶ。トビよりも翼が細長く、本種の方がスマートである。全体的に白っぽく、日本産のタカ類ではもっとも白く見える。空中で停空飛翔を行い、急降下して水中にいる魚を脚の爪で捕らえる。水上に突き出た杭の上などで、捕ら

えた餌を食している姿がよく見られる。巣は、海岸部の切り立った崖の先端部に作ることが多かったが、近年は大木の樹上にかけることが多くなった。さらに、近年、営巣木不足から、送電鉄塔など人工の構造物に営巣することもある。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では、海岸や湖沼部を中心に広く生息しており、その生息密度も全国有数の高密度地域と考えられる。特に、中海・宍道湖や神西湖周辺における個体密度が高く、隠岐諸島でもよく見られる。河川沿いに内陸部まで入り込むことがあり、ダム湖など山間部の水域でも見られる。

【存続を脅かす原因】

松くい虫による営巣木の枯死、釣り人などの海岸営巣部への接近、餌場環境の悪化、有害化学物質の体内蓄積など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	崖地
○	○	○	○	○		△	△		○			○	○		○			○	○		○			○	○

タカ目タカ科

オジロワシ

Haliaeetus albicilla albicilla (Linnaeus, 1758)

【選定理由】

本種（亜種）は北海道以外では珍しく、本県にはまれな冬鳥として渡来する。以前は、宍道湖西岸部に毎年のように渡来し越冬していたが、近年はその姿を見ることが少なくなった。

【概要】

その名のようにくさび型の白い尾を持ち、暈のように幅の広い翼を持つ褐色のワシ。全長69－92cmで、翼開長は2m以上にも及ぶ。少数が北海道の東部と北部の海岸に近い森林や、内陸の湖沼周辺の森林で繁殖している。北海道の営巣地は、やや増加傾向にあるが、繁殖は必ずしも安定していない。冬季、ロシア極東部などで繁殖した個体も渡来し、北海道や本州北部を中心に越冬する。関東以西ではまれで、特に西日本では渡来数も少ない。国内における越冬個体数は550～850羽とされているが、近年風蓮湖では1,000羽ほどが確認されるなど、渡来数は増加傾向にある。魚類をおもな餌とする海ワシで、厳

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵5

冬期には水禽類や乳類なども餌とする。海岸部や湖沼、大河川の河口部などでよく確認される。おもな繁殖地は、ロシアのカムチャツカ、サハリン、沿海地方などであるが、北海道東・北部などで約150つがいが繁殖している。

【県内での生息地域・生息環境】

冬鳥として渡来し、宍道湖西岸部や神西湖などで比較的良好に見られる。魚類をおもな餌としているが、時にはカモ類を捕獲することもある。宍道湖の場合、斐伊川河口部の中州を休息場としてよく利用し、ねぐらは北部の山林地帯を利用することが知られている。

【存続を脅かす原因】

休息場などへの人の立ち入り（特にカメラマン）、ねぐらに利用していた大木の消失、有害化学物質の体内蓄積など。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域								
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口		
○	△	△	○												○				○	○		△			○	

タカ目タカ科

チュウヒ

Circus spilonotus spilonotus Kaup,1847

【選定理由】

本種（亜種）は、湿地生態系における食物連鎖の頂点に位置し、その生物多様性の豊かさを象徴する種の1つである。以前は、斐伊川河口部を中心に多くの渡来がみられ、繁殖の可能性もあったが、近年では渡来数が減少した。渡来地も限定されており、絶滅が危惧される。

【概要】

オスは全長約48cm、メスは約58cm。翼と尾と足が長め。羽色に個体差が多く、国内で繁殖する個体はトビのような褐色味のある個体が多い。オス成鳥は翼先が黒っぽく、風切り羽と雨覆に黒っぽい黄帯がある。種としては、シベリア東部、モンゴル、中国東北部などで繁殖し、中国中南部、東南アジアなどで越冬する。国内にはおもに冬鳥として渡来するが、北海道、東北、中部地域で少数が繁殖しており、岡山県、山口県でも繁殖が確認されている。ヨシ原や平野部の草原、農耕地などに生息し、日中はヨシ原や草地の上をゆっくりとした羽ばたきと滑空を

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類（EN）

写真 口絵5

繰り返しながら、ネズミや小鳥類、カエルなどの小動物を捕食する。翼をV字型に保って、低空を滑翔するのが特徴。営巣は、水のあるヨシ原の中で行う。

【県内での生息地域・生息環境】

冬鳥として、河川や湖沼の広いヨシ原や農耕地などに渡来し、斐伊川河口部などでは冬季を中心に常時数羽から5羽程度の飛翔が確認されていたが、近年は激減してきた。斐伊川流域では、まれに夏季の観察例があり繁殖の可能性もあったが、繁殖は確認されていない。

【存続を脅かす原因】

湿地開発による生息地の減少（特に広大なヨシ原のある湿地環境）、生息に適した草地や餌場（植生のギャップ地など）、ねぐらの減少、植生の自然遷移など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○		△					○						○	○	○	○			○		○	

オオコノハズク

Otus lempiji semitorques Temminck et Schlegel, 1844

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵5

【選定理由】

以前は、中国山地などで確認されることがあったが、最近ではほとんど見られなくなった。猛禽類である本種（亜種）は、豊かな森の象徴であり、本種が生息することは豊かな自然環境が残存している証ともなる。しかし、もともと個体数もさほど多くなく、その動向を注意深く見守っていく必要がある。

【概要】

種オオコノハズクの分布は、日本のほか、ウスリー地方、中国東北部、サハリン、台湾、フィリピン、インドシナ半島などと広い。全長24cmくらいで、コノハズクより少し大きく、耳羽が長い。眼は橙色で、金色の眼をしたコノハズクと見分けられる。県内には本亜種が留鳥として周年生息する。コノハズクよりも局地的で定着性が強いと言われている。夜行性であることや、鳴き声あまり目立たないことなどから生息確認が難しい種である。平地や山地の豊かな森に棲み、社寺林や竹藪、針葉

樹の密生林内などで確認されることが多い。冬季は暖地に移動することがあり、民家の周辺で観察されることもある。夕方から活動し、小鳥類や小型哺乳類、両生類、昆虫類などを捕食する。鳴き声は「ポッポッポッポ」または「ホッホッホッホ」という低い声で、「キューー」という声も出す。このほか「ティヤーオ」という声は一年中発する。5～6月頃、巨木の樹洞や民家の屋根裏などで繁殖する。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐諸島や中国山地などの豊かな森に生息し、まれに確認される。近年では、島根半島（北山山系）で繁殖が確認されたことがある。

【存続を脅かす原因】

森林の開発、営巣木となる大木のある森林の減少など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域								
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○	○					○															

コノハズク

Otus sunia japonicus Temminck et Schlegel, 1844

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

「声の仏法僧」としてよく知られた鳥で、以前は中国山地などで比較的良好に鳴き声が聞かれたが、最近ではほとんど聞かれなくなった。猛禽類である本種は、豊かな森の象徴であり、本種（亜種）が生息することは豊かな自然環境が残存している証ともなる。しかし、もともと個体数もさほど多くなく、本種が好む自然環境の減少などから、各地から姿を消しつつある。

【概要】

全長約20cmの小型のフクロウの仲間で、国内でみられるフクロウ類では最小。よく目立つ耳羽や、枯れ葉模様の外観、金色の眼などが特徴。体色に個体差があり、全身赤褐色の赤色型が比較的良好に見られる。中国南部やインド、タイ北部、ベトナム北部などでは留鳥。マレー半島、ミンダナオ島などで越冬することが知られている。県内には本亜種が夏鳥として渡来し、5～6月ごろ樹洞内で産卵する。日中は森の中の枝の上や樹洞にいて、じっと

していることがほとんどである。夕方から活動し、オサムシやゴキムシ、ガ類などの昆虫類を捕食する。5月から8月上旬にかけて、夜間「ブッ キョッ キョー」と聞こえる三音を連続して鳴くことから、「姿のブッポウソウ」に対し「声の仏法僧」と呼ばれている。

【県内での生息地域・生息環境】

中国山地脊梁部のブナ帯を主とする豊かな自然環境が残存する森林に、わずかに生息している。安蔵寺山など西中国山地一帯には、良好な自然環境が残存しており、本種の鳴き声が比較的良好に聞かれる。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や開発、営巣木となる大木の減少、越冬地や中継渡来地における生息環境の悪化など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域								
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○	○					○															

ブッポウソウ目カワセミ科

アカショウビン

Halcyon coromanda major (Temminck et Schlegel, 1848)

【選定理由】

本種（亜種）は、夏鳥として渡来するが、その数は少なく、観察される地域も限られている。繁殖に利用する古木なども減少しており、渡来数の減少が危惧される。

【概要】

全長約27cmのカワセミ科の鳥類で、長く大きな嘴が特徴。「炎の鳥」と呼ばれるように、体の大部分は黄褐色を帯びた赤色を呈している。下面は黄色みの強い赤で、脚も赤い。腰にわずかに瑠璃色の羽毛がある。長い嘴は赤くて太い。冬季は台湾、フィリピン、セレベスなどで越冬し、国内には夏鳥として渡来する。山地のよく茂った落葉広葉樹林内の沢筋や溪流近くで見かけることが多い。餌は、カエルや魚、サワガニ、昆虫類など森林内の水辺に棲む小動物である。「キョロロロー キョロロロー」と聞こえるよく響く声で鳴き、その特徴のある鳴声から存在を知ることが多い。早朝によく鳴くほか、雨天や曇りの日には日中でもよく鳴く。繁殖は、森林中の樹洞や

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵5

朽木、垂直に切り立った粘土質の崖などに穴を掘って行う。穴は、あまり深くない。まれに、キイロスズメバチの古巣や、民家の土壁に営巣することもある。

【県内での生息地域・生息環境】

中国山地や隠岐諸島などの森林地帯に夏鳥として渡来し、溪流沿いの林内を中心に生息する。サワガニなどが多く生息したり、大径木が多く残っているような豊かな自然環境の存する地域に多い。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や開発、営巣に利用する大木の減少、餌場としていた谷奥部の水田の耕作放棄、カメラマンによる追っかけなど。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○	○		○			○			○												

ブッポウソウ目カワセミ科

ヤマセミ

Megaceryle lugubris lugubris (Temminck, 1834)

【選定理由】

本種（亜種）の個体数は多くない上に、魚食性でもに溪流に依存し、営巣に適した土壁が必要なことなど、特定の生息環境を必要とする。このような場所は、人為的な影響を受けやすいため減少傾向にあり、今後の動向を注意深く見守っていく必要がある。

【概要】

全長約38cm。国内に生息するカワセミの仲間ではもっとも大型。種としては、インドシナ半島北部、中国南部、朝鮮半島、日本に分布する。国内には、本亜種が九州、四国、本州に生息するほか、北海道に亜種エゾヤマセミが分布する。体の上面は白黒の鹿子模様であり、冠羽が目立つ。山地の溪流や湖に留鳥として生息し、水中にダイビングしておもに魚を捕る。飛びながらキャラキャラと聞こえる声で鳴く。1年を通してつがいごとになわばりを持って分散する。積雪期に平野部河川や下流域に漂行する個体もいる。繁殖期は3～8月で、垂直に近い土

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵5

の壁に深さ90～140cmくらいの穴を掘って営巣し、新しく掘ったり、古い巣を修復して使用したりする。1つの崖には1～数個の穴が掘られている。

【県内での生息地域・生息環境】

留鳥としておもに山地の溪流や湖などに広く生息が認められるが、生息密度は減少していると考えられる。営巣壁は、河川などの水辺から離れた場所にも存在する。斐伊川・神戸川水系で調査した結果では、営巣に利用する土の壁は、高さが5 m以上で、傾斜は80度以上のものがほとんどであった。

【存続を脅かす原因】

河川改修や開発などによる生息適地（営巣に適した土壁や餌となる魚類が多く生息する溪流など）の減少など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	△			○	○					○	○					△						△	

マガン

Anser albifrons albifrons (Scopoli, 1769)

写真 口絵5

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

本種（亜種）は、宍道湖西岸を中心に安定して渡来し、福井平野から西では唯一の集団渡来地として貴重である。一極集中的傾向が強く、病気の発生等によっては個体群消滅の恐れがある。

【概要】

全長72cmの中型のガン類。シベリアなどの極北地で繁殖し、国内には冬鳥として東北地方を中心に約18万羽が渡来する。かつては全国各地で見られたが、狩猟圧や越冬環境の悪化などにより急激に減少した。国の天然記念物に指定され保護されるようになり、渡来数が回復して

きたが、分布は局地的である。

【県内での生息地域・生息環境】

ねぐらは、宍道湖湖心部や斐伊川下流から河口部で、宍道湖西岸域の水田などを餌場とする。1979年以降渡来数が増加し、2010年以降は4,000羽以上を数えるようになった。しかし、最近では2000年代までの増加傾向と異なり、前年の最大数を下回る年もある。

【存続を脅かす原因】

鳥インフルエンザなどの伝染病、水田の秋耕などに伴う餌場の消失など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
◎	○	○	○														○	○	○					○	

コハクチョウ

Cygnus columbianus jankowskyi Alphéraky, 1904

写真 口絵6

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

宍道湖は、本種（亜種）の日本列島における集団渡来地の西南限にあたる。現在のところ、本種の個体群は安定しているが、餌場環境は年々悪化しており、今後さらに進行する恐れがある。

【概要】

シベリアのツンドラ地帯などで繁殖し、国内には冬鳥として渡来する。これまで、北海道を経由して日本列島を南下する渡りのコースが知られていたが、日本海を直接横断して渡来する個体群も確認されている。他地域とは繁殖地が異なる個体群の可能性など、学術的にも注目

される。

【県内での生息地域・生息環境】

宍道湖周辺では、斐伊川下流から河口部を中心とする宍道湖西岸域や、潟の内に定期的に渡来し、最近では1,000羽前後を数える。中海周辺では、飯梨川河口や能義平野などに渡来する。餌場は広大な水田地帯であり、川の中州や水を張った田んぼ、潟の内にある池などをねぐらとする。

【存続を脅かす原因】

水田の乾田化、裏作、秋耕などに伴う餌場の消失など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
◎	○	○	○								○	○					○	○	○					○	

ツクシガモ

Tadorna tadorna (Linnaeus, 1758)

写真 口絵6

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

国内では、干潟の埋め立てなどにより生息地の減少などが懸念されている種で、県内にも毎年少数が渡来するが、県内には本種が好む干潟のような浅瀬はほとんどなく、生息基盤が脆弱である。

【概要】

全長約60cm。体は白く、頭と肩羽は緑色の光沢がある黒で、背から胸に栗色の帯がある。ヨーロッパ中部の沿岸、黒海周辺から中国東北地区までのアジア中央部など広い地域で繁殖し、冬は北アフリカ、ヨーロッパ南部、インド北部、中国、日本などに渡る。国内では、ほぼ全

国的に記録があるが、毎年定期的に渡来する地域は少ない。おもに海岸や河口部の干潟に生息し、甲殻類、貝類、底生動物を食べる。干拓地や水田などで見られることもある。

【県内の生息地と生息環境】

宍道湖や中海には少数が冬鳥として毎年渡来している。また、高津川河口などにも観察記録がある。

【存続を脅かす原因】

河口域の工事や、湿地開発などによる生息適地の減少など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
◎	○	○	○														○	○	○					○	

カモ目カモ科

オシドリ

Aix galericulata (Linnaeus, 1758)

【選定理由】

樹洞で営巣するなど、カモ類の中でも特異な生態を持ち、生息数も多くない。自然度のバロメータとしても貴重な種であるが、生息基盤が脆弱で、今後さらに生息環境の悪化が進行する恐れがある。

【概要】

全長45cmの小型のカモ類で、中国東北部、朝鮮半島、ウスリー、日本などに生息する。冬季には、日本で繁殖した個体が暖地へ移動するほか、大陸から冬鳥として渡来する。周囲を森林で囲まれた河川、溪流、池、ダム湖を好み、木の枝にもよくとまる。雑食性で、林の中の溪

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○						

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：情報不足（DD）

写真 口絵6

流や陸上でシイ・カシ類などのドングリを好んで食べる。水辺やその周辺の大木の樹洞で繁殖し、巣箱を利用することも知られている。

【県内での生息地域・生息環境】

山間部の溪流やダム湖などに生息し、江の川や高津川などには特に多い。冬季に群れて渡来する個体が多いが、中国山地や隠岐島の一部では繁殖もしている。

【存続を脅かす原因】

繁殖に適した樹洞のある古木の減少、シイ・カシ類の減少など。

カモ目カモ科

トモエガモ

Anas formosa Georgi, 1775

【選定理由】

極東地域特有の種で、わが国には冬鳥として渡来するが、1930年前後に境に渡来数が急激に減少している。県内への渡来は年によって差があり、今後急速に減少する恐れがある。

【概要】

全長約40cmの小型のカモ。オスの顔には黄白色と緑色、黒色からなる巴形の模様がある。胸は赤紫褐色で、脇は青灰色。背からの上面は褐色に見える。メスは全体に褐色で嘴の基部に白斑がある。シベリア東部で繁殖し、多くは中国南部や朝鮮半島で越冬する。国内には冬鳥とし

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	○	○	○				△				○	○			○	○	○		△

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

て渡来し、個体数は石川県の片野鴨池など、本州以南の日本海側に比較的多い。

【県内の生息地と生息環境】

宍道湖などの湖沼のほか、高津川河口や溜池などでも見られる。渡来数は年により変動し、記録される数は数羽から数千羽になることもある。一時的な出現のことも多く、宍道湖で数千羽の群れが見られたときも、滞在期間は短かった。

【存続を脅かす原因】

生息適地の環境悪化など。

ペリカン目サギ科

サンカノゴイ

Botaurus stellaris stellaris (Linnaeus, 1758)

【選定理由】

本種（亜種）の国内の分布は局地的で、個体数も多くない。また、ヨシ原などの生息環境適地が減少しており、さらに進行する恐れがある。

【概要】

全長約70cmで、全体に淡黄褐色と暗褐色のまだら模様をしている。種としての繁殖分布はユーラシア大陸中部に広がり、北のものは東南アジア、インド、アフリカで越冬する。国内では、本亜種が北海道で夏鳥または留鳥、本州以南で留鳥または冬鳥として生息する。おもに平地の河川や湖沼のヨシ原など、広い湿性草原に生息するが、

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○		△	○													○	○		

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類（EN）

写真 口絵6

個体数は少ない。日中はヨシ原に潜んでいて、開けた場所にはほとんど姿を現さないうえ、警戒心が強いいため観察されにくい。水辺で魚類や両生類、昆虫類、甲殻類などを採食する。

【県内での生息地域・生息環境】

冬鳥として河川や湖沼のヨシ原などに渡来するが、観察されにくいいため、個体数などの生息状況について不明な点が多い。

【存続を脅かす原因】

湿地開発や河川改修などによるヨシ原などの生息適地の減少など。

ペリカン目サギ科

クロサギ

Egretta sacra sacra (Gmelin, 1789)

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種（亜種）の県内における個体数は多くなく、生息基盤が脆弱であるため、今後容易に減少する恐れがある。

【概要】

全長約62cmで、全身が黒い（本種には白色型があり、南西諸島以南では白色型が多くなるとされている）。種としては、東南アジアからオーストラリアに広く分布する。国内では本亜種が本州以南に留鳥として特に岩礁の多い海岸に生息し、局地的に繁殖する。魚類、甲殻類などを採食する。繁殖期には、小集団あるいはつがいごと

に分散して、海岸などにある低い木の上や岩棚、岩の隙間などに巣をつくる。

【県内での生息地域・生息環境】

留鳥として海岸に生息する。岩礁のある崖地、島嶼などで繁殖も確認されているが、個体数は多くないと考えられる。

【存続を脅かす原因】

海岸部の開発などによる生息適地の減少。営巣地やその周辺への人（磯釣りなど）の立ち入りなど。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	岩礁
○	○	○	○																					○	○

チドリ目チドリ科

イカルチドリ

Charadrius placidus Gray et Gray, 1863

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種は、以前は河川の中流域などで比較的普通に見られたが、近年その姿を見る機会が少なくなっている。生息基盤が悪化傾向にあり、今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

全長20cmほどのチドリの仲間で、河川の中流域などで繁殖する。繁殖期には「ピー ピー」と澄んだ声で鳴きながらテリトリーの上空を飛び回る。国内では九州以北で留鳥として分布し、北海道で夏鳥として渡来するほか、南西諸島では少数が越冬する。繁殖は、主として河川中

流域の川原で行い、小石を集めた簡単な巣を作る。留鳥として生息するが、北日本のものは冬季暖地に移動する。県内では、移動してきた個体を含め、冬季に多くの個体が観察される。

【県内での生息地域・生息環境】

県内の河川中流域などに留鳥として生息し、川原の砂礫地などで少数が繁殖している。

【存続を脅かす原因】

河川改修や、河川の氾濫の減少に伴う砂礫河原の減少、河原の草地化など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	△								○	○	△				△	○	△					△	

チドリ目チドリ科

シロチドリ

Charadrius alexandrinus dealbatus (Swinhoe, 1870)

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

本種（亜種）は、全国的に個体数が減少傾向にある。県内でも繁殖するが、その数は多くなく、人の活動の影響を受けやすい場所にも見られることから、今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

全長17cm。種としては、ユーラシア大陸や北アメリカ大陸などに広く分布し、おもに沿岸部で繁殖する。国内では、本亜種が本州以南で留鳥として、北海道で夏鳥として分布し、海岸の砂浜や河川の河口から中流部にかけての砂礫地で繁殖する。餌はおもに動物質で、昆虫類や

クモ類、ゴカイ類などを食べる。

【県内での生息地域・生息環境】

留鳥として、砂浜海岸や大河川河口部の砂礫地などに生息する。繁殖はほとんどが砂浜やそれに隣接する造成地で、ある程度の広さを必要とする。県内37カ所の砂浜で調査したところ、繁殖の可能性があるつがいは海岸距離が500mよりせまい砂浜では確認できなかったという結果もある。

【存続を脅かす原因】

営巣地への人の立ち入り、砂浜の侵食、環境改変など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○												△	△				◎	○

チドリ目シギ科

ハマシギ

Calidris alpina (Linnaeus, 1758)

【選定理由】

以前は、宍道湖・中海周辺の湿地や水田で普通に見られたが、近年極端に渡来数が減少してきた。今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

全長20cmほどの小型のシギ類。北半球の湿地に広く生息する。国内には、亜種ハマシギが旅鳥または冬鳥として渡来するとされるが、未記載のアラスカ産の亜種なども渡来していると考えられる。やや長めの嘴を持ち、嘴と脚は黒く、夏羽では腹の色が黒くなる。群れで行動し、一群の鳥は採餌、移動、休息などを一斉に行う。河口部

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域												
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼			森林	草原	農地	河川	湖沼				森林	草原	農地	河川	湖沼			林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○																	○	○	○					○	○

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

の湿地や水田などに飛来し、ゴカイや小型甲殻類などを採食する。

【県内での生息地域・生息環境】

県内には春と秋の渡りの時期や、冬季、越冬のために、大河川の河口部や湖沼周辺の水田などに渡来する。以前は数十から数百羽の群れが各地で見られたが、近年は越冬する個体群を中心に、著しくその数が減少している。

【存続を脅かす原因】

繁殖地や中継渡来地の環境悪化、餌場とする干潟や浅瀬の減少など。

タカ目タカ科

ハイイロチュウヒ

Circus cyaneus cyaneus (Linnaeus, 1766)

【選定理由】

チュウヒに比べ減少傾向は顕著ではないが、渡来数も少なく、生息地である広いヨシ原の消失などもあり、今後急速に減少する恐れがある。

【概要】

オスは全長約45cm、メスは約50cm。オス成鳥は、上面と顔から胸までが灰色で下面外側初列風切羽が黒い。メスは上面が褐色で、下面は淡褐色に風切と尾羽に横帯があり、上尾筒は白い。種としては、ユーラシア大陸の亜寒帯や北アメリカ大陸の北部で繁殖し、冬期は南下して

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域								
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○	△	△					○						○	○	○	○			○		○

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

越冬する。国内には冬季に関東以南のヨシ原や平野部の草原、農耕地などに渡来するが、個体数は少ない。ネズミや小鳥類、カエルなどの小動物を捕食する。翼をV字型に保って低空を滑翔する。

【県内での生息地域・生息環境】

冬鳥として、河川や湖沼のヨシ原や農耕地、高原の草地などで観察される。

【存続を脅かす原因】

湿地開発、河川改修などによる生息適地の減少など。

フクロウ目フクロウ科

フクロウ

Strix uralensis Pallas, 1771

【選定理由】

以前は、比較的普通に見られたが、近年、その姿を見ることが少なくなった。今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

全長約50cm。頭部から上面は淡褐色で下面には白地に褐色の縦斑がある。羽角はなく、眼は黒い。国内では4亜種に分類されているが、亜種ごとの分布域は明確ではない。留鳥として九州以北の平地から山地の林に生息する。日中は暗い林の中で休息し、夕暮れから活動し始めることが多いが、日中に活動することもある。おもにネ

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

ズミなどの小型哺乳類や小鳥類を捕食する。夜間に「ゴウホウ ゴロツケ ゴウホウ」と鳴く。おもに大木の樹洞に営巣する。

【県内での生息地域・生息環境】

おもに山地の林に生息する。平野部でも見られるが、繁殖には営巣可能な樹洞が必要。冬季は河畔林で見ることがある。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や開発による生息地の減少など。特に営巣が可能な樹洞がある大木の減少が大きいと考えられる。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○	○	△			○	△	△			○	△	△	△					

アオバズク

Ninox scutulata japonica (Temminck et Schlegel, 1845)

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

以前は、比較的普通に見られたが近年、その姿を見ることが少なくなった。今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

全長約29cm。頭部から上面は黒褐色で、下面には白地に黒褐色の太い縦斑がある。国内には、亜種アオバズクが夏鳥として渡来し、奄美諸島以南には別の亜種リュウキュウアオバズクが留鳥として分布する。本亜種は、平地から山地の林に生息し、営巣が可能な大きな木がある

社寺林などにも見られ、樹洞で営巣する。夜行性で、主として昆虫を採食するが、小鳥やネズミも捕る。夜間に「ホッホウ ホッホウ」と鳴く。

【県内での生息地域・生息環境】

平野部から山地に広く分布し、営巣が可能な木があれば社寺林などでも見られる。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や開発によって生息地が減少しているほか、営巣が可能な樹洞がある大木の減少など。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域							
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○	○					○						○										

トラフズク

Asio otus otus (Linnaeus, 1758)

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

比較的まれにしか確認されない種（亜種）で、県内での繁殖の可能性もある。渡来数は多くなく、今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

全長38cmほどの中型のフクロウの仲間で、耳の部分に当たる羽角が長く伸び出しておりよく目立つ。種としてはユーラシア大陸および北アメリカ大陸の冷温帯で繁殖し、北方の個体は南下して越冬する。国内では、本亜種が本州中部以北で局地的に繁殖し、本州中部以南では冬鳥として渡来する。平地や山地の林、農耕地、河畔林、

草地などに生息し、ネズミ類をおもな餌としている。越冬個体は、大河川の河口部の草原などで見られることが多い。

【県内での生息地域・生息環境】

斐伊川河口部の草原や農耕地、河畔林などで冬季まれに観察される。冬鳥として渡来するが、繁殖の可能性もあり注目される。

【存続を脅かす原因】

生息地である林や草原、農耕地の減少、繁殖する森林の減少、生息地への人や車両の立ち入りなど。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	△	△	○	△	△				○	○	○				○	○	○	○	○					○	

コミミズク

Asio flammeus flammeus (Pontoppidan, 1763)

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種（亜種）は、斐伊川河口部など、場所によっては比較的普通に見られたが、近年その姿を見ることが少なくなった。今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

種としてはユーラシア大陸、南北アメリカ大陸、ハワイ諸島などに広く生息し、国内には本亜種が冬鳥として渡来する。全長39cmほどのフクロウの仲間で、耳のように見える羽角はごく短く、わずかに出ている程度であまり目立たない。河口部や河川沿いの草原などに棲み、地

上近くを飛び回ってネズミなどの小動物を捕食する。普通、昼間は草むらの中で休息し、夕方から採餌行動を行う。フクロウ類としては珍しく、比較的明るい時間帯にも活動する。

【県内での生息地域・生息環境】

河口部の土手沿いの草原や、農耕地、干拓地などの広々とした草原に生息する。

【存続を脅かす原因】

生息地となる草原などの減少、人や車両の立ち入り、繁殖地の環境悪化など。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域							
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	△	△	○												△	○	○	○	○			△		△	

ハヤブサ目ハヤブサ科

チョウゲンボウ

Falco tinnunculus interstinctus McClelland, 1840

【選定理由】

冬鳥として農耕地などに見られるが、近年渡来数が減少していると考えられ、今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

オスは全長33cm、メスは約39cm。キジバトほどの大きさのハヤブサ類。オスは頭頂から顔が青灰色、背中茶褐色で黒い斑点がある。メスは上面が褐色で黒い斑点があり、下面は淡黄褐色で黒い縦斑がある。種としては、極地を除くユーラシアからアフリカに広く分布する。国内では本亜種が中部地方から北海道にかけて繁殖し、冬

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

は全国各地に広がる。平地から高山の草地、農耕地、河原などに生息し、羽ばたきと、短い滑空を繰り返して直線的に飛ぶ。獲物となる小動物は、ネズミ類や小鳥類などで、停空飛翔をしてねらうことが多い。

【県内での生息地域・生息環境】

冬鳥として、おもに平野部の農耕地や河川の草地などで見られる。

【存続を脅かす原因】

農耕地の減少や、河川改修などに伴う生息適地の減少など。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○						○	○				○	○	○					

スズメ目ホオジロ科

ホオアカ

Emberiza fucata fucata Pallas, 1776

【選定理由】

本種（亜種）は、本州中部以北がおもな繁殖地であり、県内でも繁殖の記録がある。生息地が局在していることなどから、今後さらに減少傾向が進行する恐れがある。

【概要】

全長16cm。ほぼスズメくらいの大きさで頬が赤褐色、頭から顎にかけては灰色、背中茶褐色である。胸に黒と褐色の2本の横帯があるのが特徴。国内では、北海道、本州、四国、九州の各地で夏鳥として繁殖し、冬は本州の西南部以南で越冬する。平地から山地の草原に生息し、

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

なかでも比較的草丈の低い乾いたところを好むという。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では河川敷の草原や農耕地などで少数が越冬する。また、1988年の浜田市の繁殖例をはじめ、県西部や東部の河川の河口部あるいは周辺の草原で繁殖が確認されている。

【存続を脅かす原因】

草原の開発や、遷移による生息に適地した草原の減少など。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
◎	○	◎	○		○				○	○				○	○	○					

カモ目カモ科

コクガン

Branta bernicla orientalis Tugarinov, 1941

【選定理由】

本種（亜種）は、県内にはまれな冬鳥として渡来し、個体数は少ない。生息環境が局限されていることなどから、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る特性があるが、情報が不足している。

【概要】

全長約60cm。全体に黒く、頸に不規則な白斑があり、下腹部から上・下尾筒は白い。国内では、北海道、東北地方に多く渡来し、西日本では少ない。おもに海岸の入江や内湾などで、アマモやアオノリなどを食べる。

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【県内での生息地域・生息環境】

宍道湖や中海周辺のほか、島根半島や隠岐諸島などでも記録がある。

【存続を脅かす原因】

生息適地の減少などが考えられるが、県内の渡来数は少なく、その状況の把握も十分ではないことから特定には至らない。

ミズナギドリ目ミズナギドリ科

オオミズナギドリ

Calonectris leucomelas (Temminck, 1836)

【選定理由】

隠岐諸島の無人島などでコロニーが確認されているが、場所によってはその数が減少している。特殊な環境条件に生息し、生息地が局限されていることから、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る特性があるが、情報が不足している。

【概要】

全長49cm、翼開長1.2mの海鳥で、日本近海などの島で繁殖し、海洋をおもな生息場とする。昼間は、魚群を求めて群れで海上を飛び回り、魚を捕食する。地中に穴

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

を掘って繁殖する。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐郡知夫村の大波加島に大規模な集団繁殖地があり、星神島、沖ノ島などのほか、益田市高島が繁殖地となっている。

【存続を脅かす原因】

ネズミ類やカラス類などによる卵や雛の捕食など。

コウノトリ目コウノトリ科

コウノトリ

Ciconia boyciana Swinhoe, 1873

【選定理由】

1960年代に国内で繁殖するものは絶滅し、現在は、大陸産の個体がまれに渡来する。県内への渡来数は少なく、生息環境が局限されていることなどから、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る特性があるが、情報が不足している。

【概要】

全長約110cm。体は白くて、翼の風切羽が黒い。嘴は太くて長く黒い。繁殖地は、シベリア南東部から中国東北部で、冬季は中国東南部へ渡る。

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠA類（CR）

【県内での生息地域・生息環境】

斐伊川や飯梨川河口周辺などで記録があるほか、隠岐（島後）では複数回越夏したことがある。大陸産のものと見られる個体のほか、野生復帰による放鳥個体も飛来している。

【存続を脅かす原因】

開発などによる生息適地の減少や農薬の使用による採食条件の悪化など。

ペリカン目トキ科

ヘラサギ

Platalea leucorodia leucorodia Linnaeus, 1758

【選定理由】

本種（亜種）は、国内に少数が渡来し、県内には1～2羽程度が渡来する。限られた湿地環境に渡来するなど、生息地が局限されていることなどから、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る特性があるが、情報が不足している。

【概要】

全長約83cm。全身白く、しゃもじ形の嘴は黒く、上面に黄色部がある。クロツラヘラサギとは、目先の裸出部が狭く、目がはっきり見える点で識別できる。国内には、

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：情報不足（DD）

冬鳥または旅鳥として渡来し、干潟、水田、河川、湖沼などの湿地に生息する。

【県内での生息地域・生息環境】

冬鳥として斐伊川や飯梨川、高津川の河口部などに渡来する。

【存続を脅かす原因】

湿地開発、河川改修などによる生息適地の減少など。

ペリカン目サギ科

ササゴイ

Butorides striata amurensis (Schrenck, 1860)

【選定理由】

過去に繁殖していた場所で確認されなくなるなど、減少している可能性があるが、ランクを判断するに足りる十分な情報が得られていない。

【概要】

国内には本亜種が夏鳥として九州以北に渡来する。九州南部から南西諸島では、越冬するものもいる。夕方から夜間にかけて盛んに活動するが、日中も活動する。水田や河川などの水辺で魚類や両生類、甲殻類などを捕食する。繁殖期には、水辺近くの雑木林、マツ、スギなど

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

の樹上に巣をつくる。

【県内での生息地域・生息環境】

夏季に個体が確認されることがあるが少ない。以前、江津市で繁殖していた場所があったが、現在はなくなっている。

【存続を脅かす原因】

河川敷の工事や、水辺の樹林地の伐採などによる生息適地の減少など。

ツル目ツル科

マナヅル

Grus vipio Pallas, 1811

【選定理由】

定期的な渡来地である鹿児島県などを除けば、本県は比較的渡来が多い県の一つである。新たな定期渡来地としての可能性もあるが、ランクを判断するに足りる情報が得られていない。

【概要】

東シベリア南部、ロシア極東南部のハンカ湖とアムール川流域、中国東北部、モンゴル東北部で繁殖し、中国南東部の長江下流域、朝鮮半島、日本で越冬する。国内の定期的な渡来地は鹿児島県だけであり、出水地方には

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

総個体の約4割が渡来している。

【県内での生息地域・生息環境】

渡りの時期に見られることが多く、単独または数羽のことが多い。出雲平野などで、まれに越冬する。

【存続を脅かす原因】

ねぐらや餌場環境の悪化、カメラマンによる追い回しなど。

ツル目ツル科

ナベヅル

Grus monacha Temminck, 1835

【選定理由】

定期的な渡来地である鹿児島県や山口県を除けば、本県は比較的渡来が多い県の一つである。新たな定期渡来地としての可能性もあるが、ランクを判断するに足りる情報が得られていない。

【概要】

ロシアのウスリー川東域からアムール川北側地域、中国北東部の一部などで繁殖し、国内には冬鳥として渡来する。

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【県内での生息地域・生息環境】

渡りの時期に見られることが多く、単独または数羽のことが多い。斐伊川河口部などでまれに越冬する。

【存続を脅かす原因】

ねぐらや餌場環境の悪化、カメラマンによる追い回しなど。

チドリ目セイタカシギ科

セイタカシギ

Himantopus himantopus himantopus (Linnaeus, 1758)

【選定理由】

本種（亜種）の県内への渡来数は少なく、ランクを判断するに足りる情報が得られていない。

【概要】

全長約37cm。体の上面は緑色の光沢をした黒で、ほかは白い。長くてまっすぐな嘴と、非常に長い脚が特徴。本亜種は、国内に旅鳥として少数が渡来するほか、各地で繁殖が確認されているが局地的である。湿地で昆虫や甲殻類、小型の魚類などを食べる。

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【県内での生息地域・生息環境】

旅鳥として水田や休耕田、河川の河口部や湖沼の浅瀬などの湿地に少数が渡来する。宍道湖、中海周辺の水田などで毎年1～数羽が見られる。2003年4月には宍道湖西岸で25羽の群れが観察されたことがある。

【存続を脅かす原因】

湿地環境の減少など。

チドリ目シギ科

オオジシギ

Gallinago hardwickii (Gray, 1831)

【選定理由】

国内で繁殖する種で、生息地の減少などが危惧されている。中国地方で少数の繁殖例があり、県内でもその可能性があるが、ランクを判断するに足る情報が得られていない。広島県芸北町では繁殖が確認されていたが、近年は確認されなくなった。

【概要】

全長約30cm。タシギなどによく似ている。サハリンと日本列島で繁殖し、冬はオーストラリア東南部に渡る。繁殖期には、おもに本州中部の山地の草原、東北地方や

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

北海道の平地の草原に生息する。

【県内での生息地域・生息環境】

おもに渡りの時期に、水田などの湿地で観察されている。三瓶山では、ディスプレイフライトが観察されたことがある。

【存続を脅かす原因】

生息適地の環境変化など。

チドリ目シギ科

ホウロクシギ

Numenius madagascariensis (Linnaeus, 1766)

【選定理由】

国内では、おもに旅鳥として定期的に渡来するが、個体数は少ない。ランクを判断するに足る情報が得られていない。

【概要】

全長約61cm。長く下に湾曲した嘴が特徴。ダイシャクシギに似るが全体に褐色が濃く、腰と翼の下面が白くない。国内では、旅鳥として渡来し、海岸の砂浜、入り江の干潟、河口の砂泥地などで見られ、水田に入ることもある。長く湾曲した嘴を深く泥の中に差し込み、ゴカイ

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

ヤカニ類などを捕食する。

【県内での生息地域・生息環境】

県内には干潟のような環境がほとんどなく、渡来数は少ないが、旅鳥として春と秋に河口部の砂泥地や水田などで見られる。

【存続を脅かす原因】

乾田化をはじめとする湿地環境の減少など。

チドリ目カモメ科

ズグロカモメ

Larus saundersi (Swinhoe, 1871)

【選定理由】

世界的にも局地的な分布をしており、個体数に限られている。県内では、冬季に少数が渡来するが、ランクを判断するに足る情報が得られていない。

【概要】

全長約32cm。中国の黄海沿岸や朝鮮半島北部の日本海沿岸などで繁殖し、おもに中国沿岸部や台湾、日本で越冬する。国内には、九州を中心に四国や本州西部、沖縄県などに冬鳥として渡来する。干潟や河口の水辺で魚やカニなどを捕食する。

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【県内での生息地域・生息環境】

冬季に斐伊川河口や飯梨川河口などで、1～数羽が観察されている。

【存続を脅かす原因】

河川改修や開発などによる浅い水辺の減少、生息適地への頻繁な人の立ち入りなど。

チドリ目ウミスズメ科

マダラウミスズメ

Brachyramphus perdix (Pallas, 1811)

【選定理由】

本種は冬鳥として県下の日本海域に渡来する。近年確認されることが少なくなっているが、ランクを判断するに足る情報が得られていない。

【概要】

全長24cmほどで、ウミスズメとほぼ同大。種としては、アリューシャン列島を中心に、東はカナダやアメリカの沿岸、西は日本沿岸に至る範囲に分布する。内陸部で樹上などに単独で営巣し、繁殖するといわれている。冬季、全国各地の沿岸海上などに南下し、魚類のほか甲殻類な

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：情報不足（DD）

どを潜水して捕食する。

【県内での生息地域・生息環境】

日本海の海上や宍道湖・中海などで記録がある。半島部地先の海上や、隠岐航路の船上などで群れが観察される。

【存続を脅かす原因】

油の流出、魚網への絡まりなど。

チドリ目ウミスズメ科

ウミスズメ

Synthliboramphus antiquus (Gmelin, 1789)

【選定理由】

冬鳥として県下の日本海域に渡来するが、近年確認されることが少なくなっている。確認が難しく、ランクを判断するに足る情報が得られていない。

【概要】

全長25cmほどで、嘴が短くて太く、眼の上後方に白線がある。北太平洋、千島アリューシャン列島、北海道天売島などの断崖の岩の上や、岩の割れ目などで繁殖する。冬季、沿岸海上などに南下し、魚類のほか甲殻類などを潜水して捕食する。

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠA類（CR）

【県内での生息地域・生息環境】

日本海の海上や宍道湖・中海などの湖上に渡来する。半島部地先の海上や、隠岐航路の船上などでまれに観察される。

【存続を脅かす原因】

油の流出や海洋汚染、魚網への絡まりなど。

チドリ目ウミスズメ科

コウミスズメ

Aethia pusilla (Pallas, 1811)

【選定理由】

冬鳥として県下の日本海域に渡来することが分かっているが、その実態などは不明であり、ランクを判断するに足る情報が得られていない。

【概要】

全長15cmほどで、ウミスズメ類中もっとも小型の種。北方のチュコト半島、アリューシャン列島、プリビロフ諸島などで繁殖し、繁殖期以外はほとんど海上生活をしている。冬季、島根県沖の海上などに南下し、魚類のほか小型の甲殻類などを潜水して捕食する。

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

【県内での生息地域・生息環境】

日本海の海上や宍道湖などに冬季、渡来する。隠岐航路の船上などから、海上に群れる姿が観察されることがある。

【存続を脅かす原因】

油の流出や海洋汚染、魚網への絡まりなど。

タカ目タカ科

オオワシ

Haliaeetus pelagicus (Pallas, 1811)

【選定理由】

本種はまれに渡来するワシで、個体数も少ない。生息環境が局限されていることなどから、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る特性があるが、情報が不足している。

【概要】

巨大な黄色の嘴がよく目立つ大型のワシで、翼開長は2.3mにも及ぶ。ロシアのオホーツク海周辺やカムチャッカ半島で繁殖し、北海道を中心に冬鳥として渡来する。海ワシの仲間で、魚類を主食とするがカモ類なども捕食

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

する。北海道では、エゾジカの銃猟死体を食べて鉛中毒を起こし、問題となっている。

【県内での生息地域・生息環境】

宍道湖・中海周辺や海岸部、ダム湖などにまれな冬鳥として渡来する。

【存続を脅かす原因】

飛来する湖沼や海岸部の環境改変、カメラマンによる追い回しなど。

タカ目タカ科

ツミ

Accipiter gularis gularis (Temminck et Schlegel, 1844)

【選定理由】

食物連鎖の頂点に位置するタカの1種で、その生息は生態系が豊かであることを証明する。県内で繁殖している可能性もあるが、ランクを判断するに足る情報が得られていない。

【概要】

オスは全長約27cm、メスは約30cm。日本のワシタカ類の内でもっとも小型である。国内では、本亜種が九州以北で繁殖するが、西日本では繁殖記録が少ない。平地から山地の林に生息する。おもに小鳥類を捕食するが、昆虫

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

虫や小型の哺乳類を捕食することもある。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では、少数ながら通年の観察例があり、繁殖の可能性もある。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や開発、林相変化などによる生息適地の減少など。

タカ目タカ科

ハイタカ

Accipiter nisus nisosimilis (Tickell, 1833)

【選定理由】

食物連鎖の頂点に位置するタカの1種で、その生息は生態系が豊かであることを証明する。県内で繁殖している可能性もあるが、ランクを判断するに足る情報が得られていない。

【概要】

オスは全長約32cm、メスは約39cm。国内には本亜種がおもに本州中部以北で繁殖し、冬期は全国で見られる。平地から山地の林に生息し、秋冬には平野部の農耕地やヨシ原にも現れる。おもに小鳥類を捕食するが、小型の

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

哺乳類も捕らえることがある。

【県内での生息地域・生息環境】

冬季に平地や農耕地などで観察されることが多い。夏季に山地などで観察例があり、繁殖の可能性もある。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や開発、林相変化などによる生息適地の減少など。

タカ目タカ科

イヌワシ

Aquila chrysaetos japonica Severtzov, 1888

【選定理由】

県内では、ごくまれに観察されることがある。繁殖環境が局限されていることなどから、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る特性があるが、情報が不足している。

【概要】

オスの全長は約82cm、メスは約89cm。本亜種は、日本および朝鮮半島に分布する。国内では、九州以北の山岳地帯に留鳥として生息しており、広い行動圏を持つ。個体数は少ない。主としてノウサギなどの哺乳類や鳥類、

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類（EN）

爬虫類、両生類を捕食する。

【県内での生息地域・生息環境】

迷行または通過の可能性も含め、中国山地の県境付近などでごくまれに観察される。過去に営巣していたとされる記録がある。

【存続を脅かす原因】

生息適地の減少や生息地への人の接近など。

ハヤブサ目ハヤブサ科

コチョウゲンボウ

Falco columbarius insignis (Clark, 1907)

【選定理由】

県内には冬鳥として渡来するが、個体数は少なく、生息環境が局限されていることなどから、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る特性があるが、情報が不足している。

【概要】

オスは全長約28cm、メスは約32cm。チョウゲンボウより小さい。国内には、冬鳥として広い農耕地、干拓地、河川の草原など開けた場所に生息するが少ない。スピードのある飛翔でも小鳥類を捕食するが、ネズミ類や

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

昆虫、カエルなども捕る。

【県内での生息地域・生息環境】

冬鳥として、農耕地や河川敷などで見られるが、チョウゲンボウよりも個体数は少ない。

【存続を脅かす原因】

農耕地の改変や、河川改修などによる生息適地の減少など。

スズメ目サンショウクイ科

サンショウクイ

Pericrocotus divaricatus divaricatus (Raffles, 1822)

【選定理由】

渡りや繁殖状況、生息環境ごとの個体数の変化などの詳しいデータが不足しており、ランクを判断するに足る十分な情報が得られていない。

【概要】

国内には2亜種が知られており、別亜種のリュウキュウサンショウクイは、屋久島や南西諸島に留鳥として分布する。本亜種は、本州以南に夏鳥として渡来し、おもに山地の雑木林や広葉樹林に生息する。高い木のある広葉樹林に多く、樹林の上層部で活動し、繁殖期の初めを

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

除いてあまり下層部へは降りてこない。「ヒリヒリッ ヒリヒリッ」と、特徴のある声で鳴く。

【県内での生息地域・生息環境】

夏鳥として渡来し、おもに山地の広葉樹林などに生息する。

【存続を脅かす原因】

森林の伐採や、林相の変化などによる生息適地の減少など。

スズメ目カササギヒタキ科

サンコウチョウ

Terpsiphone atrocaudata atrocaudata (Eyton, 1839)

【選定理由】

本種（亜種）は、近年観察される機会が多く、増加してきた可能性があるが、ランクを判断するに足りる十分な情報が得られていない。

【概要】

オスは全長約45cm、メスは約18cm。ただし、オスの全長には、非常に長い尾が含まれる。国内には、夏鳥として渡来し、平地から低山の林に生息する。林床の比較的開けた広葉樹林や、スギ・ヒノキの植林地などの環境を好む。

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

【県内での生息地域・生息環境】

夏鳥として渡来し、低山地から中国山地にかけて比較的広く分布する。里山のスギ林などで観察されることも少なくない。

【存続を脅かす原因】

山地の開発や伐採などによる生息適地の減少、越冬地の環境悪化など。

スズメ目モズ科

アカモズ

Lanius cristatus Linnaeus, 1758

【選定理由】

近年、国内各地で生息数が減少しているとされる。県内では亜種シマアカモズの繁殖記録があり、貴重な例といえる。本種の現在の生息状況は十分に把握されておらず、ランクを判断するに足りる情報が得られていない。

【概要】

亜種アカモズは国内では夏鳥として北海道、本州、四国で繁殖し、亜種シマアカモズはおもに九州南部や南西諸島で繁殖する。本種は平地から山地の明るい林や低木のある草原などに生息する。

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類（EN）

【県内での生息地域・生息環境】

亜種アカモズは、まれに観察される。亜種シマアカモズは大社町で繁殖記録があるほか、三瓶山で観察例がある。

【存続を脅かす原因】

生息適地の環境変化など。

スズメ目ツバメ科

コシアカツバメ

Hirundo daurica japonica Temminck et Schlegel, 1845

【選定理由】

本種（亜種）は、夏鳥として県内に渡来するが、近年減少傾向にある。しかし、ランクを判断するに足りる十分な情報が得られていない。

【概要】

全長19cm。ツバメよりもやや大きく、雌雄同色。頭から背は光沢のある紺色。目の後ろから後ろ首が赤茶色で、腰の橙色が名前の由来となっている。喉から腹までは、ごく薄い茶色で黒褐色の縦斑がある。国内には、夏鳥として渡来し、海岸から市街地の開けたところや農耕地、

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵6

丘陵地などに生息する。

【県内での生息地域・生息環境】

県内に広く見られるが、営巣しているところは多くない。学校や庁舎などの大きなコンクリート製の建物に営巣していることが多い。

【存続を脅かす原因】

建造物の営巣に対する人為的な攪乱のほか、越冬地での環境改変など。

スズメ目ヨシキリ科

コヨシキリ

Acrocephalus bistrigiceps bistrigiceps Swinhoe, 1860

【選定理由】

本種（亜種）は、おもに本州中部以北の草原で繁殖し、県内でも繁殖が確認されている。しかし、ランクを判断するに足りる情報が得られていない。

【概要】

全長13cm前後で、スズメより小さい。国内には夏鳥として渡来し、普通は本州中部以北の草原で繁殖する。オオヨシキリと同じような環境に生息するが、オオヨシキリが草丈の高い密生したヨシ原で繁殖するのに対し、より草丈の低い草原に営巣する傾向がある。

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

【県内での生息地域・生息環境】

旅鳥として渡来するが、一部繁殖する個体も見られる。斐伊川河口部の河川敷の草原で繁殖した事例などがある。

【存続を脅かす原因】

草原の消滅、人の立ち入りなど。

スズメ目ムクドリ科

ホシムクドリ

Sturnus vulgaris poltaratskyi Finsch, 1878

【選定理由】

本種（亜種）は、国内では数少ない冬鳥または迷鳥とされるが、県内には定期的に個体群が越冬している。しかし、ランクを判断するに足りる十分な情報が得られていない。

【概要】

全長22cm。ムクドリよりわずかに小さい。緑や紫色の光沢のある黒い体に黄白色の斑点が密にあることが特徴。国内では、本亜種が数少ない冬鳥としておもに西南日本に渡来し、農耕地などに生息する。ムクドリの群れ

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

の中に混じっていることが多い。

【県内での生息地域・生息環境】

飯梨川河口付近の農耕地に、10～20羽前後が越冬している。最近は、宍道湖西岸域でも秋冬に群れが観察されることがある。

【存続を脅かす原因】

農耕地における生息に適した環境の減少など。

スズメ目ヒタキ科

コルリ

Luscinia cyane bochaiensis (Shulpin, 1928)

【選定理由】

県内で繁殖している可能性が高いが、ランクを判断するに足りる十分な情報が得られていない。生息（繁殖）地が限られており、存続基盤は脆弱である。

【概要】

国内では主として本州中部以北で繁殖し、西日本での繁殖個体数は少ない。広島県や鳥取県では繁殖が確認されており、岡山県、山口県でも夏季にさえずりが確認される。

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵6

【県内での生息地域・生息環境】

渡りの時期に、低山の林などで観察されるほか、夏季に中国山地の標高1,000m前後のササ藪のあるブナ林などで複数のさえずりが確認されており、繁殖の可能性が高い。

【存続を脅かす原因】

繁殖に適した森林環境の改変など。

スズメ目ヒタキ科

ノビタキ

Saxicola torquatus stejnegeri (Parrot, 1908)

【選定理由】

本種（亜種）は、おもに本州中部以北に夏鳥として渡来する。県内でも繁殖記録があるが、繁殖地が局在し、現在の繁殖状況もよく分かっていないため、ランクを判断するに足りる情報が得られていない。

【概要】

全長約13cm。国内では本州中部以北に夏鳥として渡来し、北海道では平地の草原、本州では山地の高原などに生息する。

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

【県内での生息地域・生息環境】

渡りの時期に、平野部の草地や農耕地で通過個体が見られる。三瓶山や弥栄村の草原で繁殖の記録があるが、その後の状況や他地域の生息状況は十分に把握されていない。

【存続を脅かす原因】

繁殖適地の環境変化など。

スズメ目ヒタキ科

コサメビタキ

Muscicapa dauurica dauurica Pallas, 1811

【選定理由】

本種（亜種）は、夏鳥として県内に渡来するが、近年は繁殖記録のみならず、観察例も減少している。しかし、ランクを判断するに足りる十分な情報が得られていない。

【概要】

全長13cm。国内では、北海道から九州までの全国各地に夏鳥として渡来して繁殖する。平地から標高1,000m程度まで分布し、落葉広葉樹林、雑木林、カラマツやスギ、ヒノキなどの人工林などに営巣する。木の枝にコケ

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵6

などで皿状の巣をつくる。

【県内での生息地域・生息環境】

夏鳥として山間部などに渡来する。密生した林より明るい林を好む。比較的大きな樹木がある公園で営巣した例もある。

【存続を脅かす原因】

繁殖に適した森林環境の改変など。

スズメ目ホオジロ科

クロジ

Emberiza variabilis Temminck, 1836

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵6

【選定理由】

本種（亜種）は、県内の中国山地で繁殖している可能性が高いが、ランクを判断するに足りる十分な情報が得られていない。

【概要】

繁殖分布はカムチャッカ半島、サハリン、日本で、ユーラシア大陸東部のごく限られた地域。国内では、おもに本州中部以北で繁殖するが、広島県で繁殖が確認されており、鳥取県で営巣の確認例がある。

【県内での生息地域・生息環境】

渡りの時期や越冬期には、平地や低山でも少数が観察される。夏季に、標高1,000m前後のササ藪のあるブナ林や広葉樹林などの複数の場所で、複数のさえずりが確認されており、近隣県の生息状況からみて繁殖の可能性が高い。

【存続を脅かす原因】

繁殖に適した森林環境の改変など。

鳥

類

絶滅
野生絶滅

絶滅
危惧Ⅰ類

絶滅
危惧Ⅱ類

準
絶滅
危惧

情報
不足

1. 両生類

島根県は、現在までに22種の生息が確認されている。有尾目はサンショウウオ科5種、オオサンショウウオ科1種、イモリ科1種の計7種、無尾目はヒキガエル科2種、アマガエル科1種、アカガエル科9種、アオガエル科3種の計15種である。

県内における分布の特徴は、豊かな自然を反映して海岸部から平野部、中国山地の険しい渓流域や森林の林床まで、多くの種類に恵まれている事である。平野部から中山間地にかけてはトノサマガエル、ヌマガエル、ツチガエル、ニホンアマガエル、シュレーゲルアオガエル、ニホンアカガエル、アズマヒキガエル、ウシガエル、アカハライモリが見られ、さらに山地にかけてはニホンヒキガエル、ヤマアカガエル、タゴガエル、モリアオガエル、カスミサンショウウオ、山地の中流から上流域の小河川などにはカジカガエルやオオサンショウウオ、渓流域にはナガレタゴガエル、ブチサンショウウオ、ヒダサンショウウオ、ハコネサンショウウオが生息している。隠岐諸島には、固有種であるオキサンショウウオとオキタゴガエルが2種生息しているが、どちらかというとも平地よりも高地に生息するサンショウウオやタゴガエルの仲間が平地にも生息していることは大変興味深い。

両生類の卵塊はゼリー状でプヨプヨしており乾燥に弱く、産卵場所は必ず水の中で行う。平野部から中山間地、山地にかけては流れのない平地の溜まった水場である水田や池、山地の中流域から上流域では水の清らかな溪流や小河川が産卵場となり、孵化後も水中で生活し、オタマジャクシから変態して成体になってはじめて陸地に生息する。モリアオガエルやシュレーゲルアオガエルは例外で、池の水際の樹上や水田の畦道の土手等に卵塊は産み付けられるが、孵化したオタマジャクシ（幼生）は、水中でないと生きていけない。両生類は産卵場所である水場が失われると繁殖が出来なくなり、絶滅の危機に瀕する動物である。それぞれの動物はお互いに生息環境や産卵活動が競合しないように、環境に適応し上手く棲み分けて生活しており、生息域でのバランスの変化はその環境に適応していた複数の種の絶滅をも意味することになる。

近年、島根県の豊かな自然にも少し翳りが見えてきたように思える現象がある。国の特別天然記念物であるオオサンショウウオの幼生の生息数がきわめて少なくなっている。中型から大型のオオサンショウウオは自然環境の変化に対応できる能力を十分有しており、人工的

な池や水槽内でも長期間生活できるが、清楚な清流域で成長する幼生や小型のオオサンショウウオの発見例が年々減少していることは大変気になる事である。幼生の生活環は不明な点が多く、次世代を担う幼生の激減は、将来オオサンショウウオの絶滅が予想されるだけに事は重大である。いろいろな要因が考えられるが、産卵床である上流域の岸や岩の下が砂で埋没して、産卵できない状況が生じている。原因は、大雨等による直接的な上流域の環境破壊ばかりでなく、山を構成する森林相や源流のさまざまな要因による水量の変化が重なって起こっていると推察している。特に、産卵場である河川の上流域から小渓流域の自然環境の悪化が懸念される。

環境省第4次レッドリスト（2012）によると掲載種数は43種、内訳は絶滅危惧Ⅰ・Ⅱ類22種、準絶滅危惧20種、情報不足1種である。有尾目はハコネサンショウウオ属以外の全種23種（掲載種全体の54%）、南西諸島固有種15種（同35%）、隠岐・対馬固有種4種（同10%）を占め、他はダルマガエル2種とトノサマガエルである。島根県に生息する両生類は、絶滅危惧種（オキサンショウウオ、カスミサンショウウオ、オオサンショウウオ）、準絶滅危惧種（ヒダサンショウウオ、ブチサンショウウオ、アカハライモリ、オキタゴガエル、トノサマガエル）である。

今回のしまねレッドデータブックの改訂にあたり、環境省のレッドリストを参考としながらも、島根県の豊かな自然の維持を願うとともに、未来にわたって人と生物の共存を意識した選定を行った。特に各地域や地形に応じて、産卵場となる水場における代表種を9種、隠岐島固有種のオキサンショウウオは絶滅危惧種、オキタゴガエルは準絶滅危惧種とするとともに、新たにカスミサンショウウオを準絶滅危惧種として計11種を掲載した。

人が多く住む平野部から山地の中流域にかけては、一昔前は水田地の農薬使用、コンクリート製側溝によるエサとなる昆虫の減少による要因が大きかったが、近年では都市開発に伴う、道路整備（車道・歩道・自転車道）、宅地の造成、公園整備等の公共事業によって小河川や溜池の形状が変化し、産卵場が減少することで影響を受ける種として、カスミサンショウウオ、モリアオガエル、カジカガエル、タゴガエルを選定した。

一方、山地の上流から渓流域では、局地的な自然災害による渓流域および河川の流失による改修工事、防災事業、林道や農道、森林部の公園整備等によって生息環境の変化の影響を直接受けて、今後減少していく要素を多分に持っているとして、分布域が非常に限られているオオサンショウウオ、ナガレタゴガエル、ブチサンショウ

ウオ、ヒダサンショウウオ、ハコネサンショウウオを選定した。

大規模なダムや道路、公園等の建設は、必ず環境アセスメント調査が義務づけられており、その地域での生息調査が行われるとともに今後の影響が議論される仕組みがあるが、都市部における小規模な整備事業は、そこにどんな生物が生きているかさえ調査することなく、工事が行われているのが実情である。それまで普通種とされていたようなカスミサンショウウオやトノサマガエル、ヌマガエル等の島根県ではどこにも生息している種でさえ減少してきている実情を考えると、今後はこれらの動物に自然を見張ってもらう事も考える時期に来ているかも知れない。

両生類は生息域の環境変化に対応するのが下手で、鳥のように変化を察知して飛んで移動することもできずに細々と生き続けるしかなく、絶滅する危険性に常にさらされている事を考慮していくべきである。

2. 爬虫類

本県では、現在までに15種の生息が確認されている。カメ目はイシガメ科2種、ヌマガメ科1種、スッポン科1種の計4種、トカゲ亜目はヤモリ科1種、トカゲ科1種、カナヘビ科1種の計3種、ヘビ亜目はタカチホヘビ科1種、ナミヘビ科6種、クサリヘビ科1種の計8種である。

県内における分布の特徴は、両生類と同様に豊かな自然を反映して多くの種類に恵まれている事である。カメ目では、クサガメ、ニホンイシガメ、ミシシippアカミミガメ、ニホンスッポンが生息している。アカミミガメは、アメリカ南部からペットとして輸入された子供たちに人気のあるミドリガメ（愛称名）で、成長して大型化したことで、脱走または放棄されて野生化しており、住宅地の多い河川では、かなり広範囲に分布している。水の都と呼ばれ松江地区の松江城のお堀、堀川にはアカミミガメが高密度に生息している。最近全国的に騒がれているカミツキガメなどの凶暴なカメの分布については、県内での確認はほとんどないが、まれに外来種の捕獲例が散見される。

外来動物であるミシシippアカミミガメは、非常に大型となり甲羅長が50cmに達する個体もいる。食欲は旺盛で繁殖力も強く、汚染された水質でも生存可能であることから、その生息範囲は急速に拡大している。ニホンイシガメやクサガメと生息域が重なることから、これら日本固有種の減少が問題になっている。県の許可（特別採捕願）を頂いてカニガゴによる捕獲調査を行った結果では、ミシシippアカミミガメ：ニホンイシガメ：クサガメの割合は50:1:1で、ミシシippアカミミガメが圧倒していた。ニホンイシガメ、クサガメは、河川改修などによって分布域が狭くなっていることに加え、外来種の影響を強く受けていることで加速度的に減少していると考えられる。またニホンスッポンは、県内での生息状

態は不明で、今後詳しい生息調査が必要であると考えている。

トカゲ亜目は、ニホンヤモリ、ニホントカゲが平野部の人家近くに比較的多く生息している。ニホンカナヘビはどちらかというと山間部に生息し、低山地では良く見かけることが出来る。

ヘビ亜目は、タカチホヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、シマヘビ、ヒバカリ、シロマダラ、ヤマカガシ、ニホンマムシが生息している。平野部から低山地にかけての人家の近くでは、シマヘビ、シロマダラ、水田ではヤマカガシ、山間部では、アオダイショウ、ヒバカリ、ジムグリ、ニホンマムシ、タカチホヘビが生息している。シマヘビ、ヤマカガシは良く見かけるが、シロマダラやタカチホヘビは夜行性で特有の食性や生息環境を有し、生息数も少ないと考えられ目撃例は少ない。

環境省第4次レッドリスト（2012）によると掲載種数は56種、内訳は絶滅危惧Ⅰ・Ⅱ類36種、準絶滅危惧17種、情報不足3種である。南西諸島固有種42種（掲載種全体の75%）、対馬、南鳥島、男女群島等の固有種8種（同15%）、ウミガメ3種（同5%）を占め、他はニホンイシガメ、タワヤモリ、ニホンスッポンの3種（同5%）である。今回の変更点として、ニホンイシガメは準絶滅危惧種にランク変更。情報不足にニホンスッポンが選定されている。本県に生息する爬虫類は、準絶滅危惧種（ニホンイシガメ）と情報不足種（ニホンスッポン）である。

今回のしまねレッドデータブックの改訂にあたり、両生類と同様に本県の豊かな自然の維持を願うとともに、未来にわたって人と生物の共存を意識した選定を行った。特に爬虫類は、ミミズや両生類、爬虫類、ねずみ等の小型哺乳類をエサとしているため、これらの動物の減少にともなって、年々発見報告例が減少していることを考慮して、平野部と山間部における代表種を掲載した。

平野部から山間地にかけての比較的人家の近くに生息する種としてシロマダラを選定した。シロマダラは、ニホントカゲやニホンカナヘビを捕食する特有の食性を示している。近年、住宅地周囲のコンクリート化やアスファルト化によって石垣や土砂地が減少し、エサとなるこれらの爬虫類の生息地が狭小化したことで、平野部と山間部との境界地域で細々と生きているのが現状である。今後減少していく要素を多分に持っていると推察して選定した。

山間部の代表種としてタカチホヘビ、ジムグリ、ヒバカリを選定した。タカチホヘビは、夜行性で土中に生息しており、環境に対する選択性が強く分布域も限られていることから目撃例も少ない希少種と考えられる。ジムグリは、森林地の代表種で高温環境に弱い特有の習性がある。ヒバカリは、山地の水田周辺に生息する代表種である。ともに局地的な自然災害による改修工事および防災事業、林道や農道、森林部の公園整備等による生息環境の変化の影響を強く受ける可能性が高く、今後減少していく要素を多分に持っていると推察して選定した。

爬虫類の生息分布域は、エサとなる両生類などの影響

を強く受ける可能性が高く、両生類と同様に絶滅する危険性に常にさらされている事を考慮していくべきである。都市部における小規模な整備事業等によって生息地が減少し、それまで普通種と思われていたようなニホン

イシガメ、ニホントカゲでさえ目撃例が少なくなっている実情を考えると、継続的にこれらの動物を見守っていく必要があると思われた。

(秋吉英雄)

両生類・爬虫類掲載種一覧

計15種

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- ・ オオサンショウウオ
- ・ オキサンショウウオ

計2種

準絶滅危惧 (NT)

- カスミサンショウウオ
- ・ プチサンショウウオ
- ・ ヒダサンショウウオ
- ・ ハコネサンショウウオ
- ・ タゴガエル
- ↓ オキタゴガエル
- ・ モリアオガエル
- ・ カジカガエル
- ・ ジムグリ
- ・ ヒバカリ
- ・ シロマダラ
- ・ タカチホヘビ

計12種

情報不足 (DD)

- ナガレタゴガエル

計1種

【記号説明】

- ・ : カテゴリー区分変更なしの種 (12種)
- ↑ : 上位のカテゴリー区分への変更種 (0種)
- ↓ : 下位のカテゴリー区分への変更種 (1種)
- : 新規掲載種 (2種)
- ◇ : 情報不足からの変更種 (0種)
- ◆ : 情報不足への変更種 (0種)

有尾目（サンショウウオ目）オオサンショウウオ科

オオサンショウウオ

Andrias japonicus (Temminck, 1837)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵7

【選定理由】

国の天然記念物に指定されており、学問的価値が高い。西日本の山地にのみ生息し、河川改修工事などにより生息環境が良好とは言えなくなっている。生息地が減少すると同時に、生息地での分布密度が次第に低下していると思われる。

【概要】

体長は50－70cm、体重は2～5kg位のもがよく発見されるが、中には体長150cm、体重30kgになる個体もある。体型は平べったい頭部と大きな尾が特徴で、体色は全身が茶色で、背側と尾に不規則な形の黒斑が点在する。この黒斑は個体によって異なっており、個体識別の手がかりとなる。目は非常に小さく、黒斑にまぎれて見つけにくい。成体は一生を水中で生活しており、昼間は穴に潜み、夜間に流れの緩い部分に出て、魚、サワガニ、カエルなど、目の前で動くものを何でも捕食する。雌雄とも体長40－50cmで性的に成熟し、繁殖活動を行う。産卵は

8～9月にかけて河川上流部の岸の横穴や大石の下などで行われ、1頭のメスは数珠状に連なった卵を400～500個産卵する。孵化した幼生は体長30mm程度で、黒っぽい体色をしている。外鰓が取れて変態を完了するまでには約3年かかる。

【県内での生息地域・生息環境】

中国山地よりの河川に多く生息することが確認されている。河川の岩穴や石の下に潜んでおり、産卵期には上流域へと上って、石の下などで産卵する。

【存続を脅かす原因】

生息域および産卵域における水質汚濁、河川改修工事、砂防ダムの建設工事などの開発事業による生息環境の悪化。特に、土木建設工事関連事業による砂泥流出は、産卵床の埋没を引き起こし致命的である。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域								
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
○	○	○				○						○												

有尾目（サンショウウオ目）オオサンショウウオ科

オキサンショウウオ

Hynobius okiensis Sato, 1940

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：島根県固有種、基準標本産地

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵7

【選定理由】

隠岐（島後）においては、昭和初期からおもに始まった山地の広葉樹から針葉樹への林業樹種転換作業は、戦後さらに増加し、本種の生息環境を悪化させた。さらに山奥での土木工事等による水系の破壊は、幼生の生育環境を悪化させ、本種に激減させる要因を与えた。

【概要】

成体の全長は約13cm、体色に黄味がかった斑紋が出る個体もいるが、ほぼ黒色の個体もいる。本種は前後肢を体側で合わせると、重なり合うことや、卵の色が淡緑白色である点などが異なっている。産卵は早春で、親は冬眠前に溪流の源流近くに集まっている。冬眠を終えると伏流水の中や溪流の岩の下などに産卵する。卵のうはバナナを長くしたような形で、外皮は丈夫である。早春にふ化した幼生は翌年の夏ごろに変態し、水中生活から陸上生活になる。親は溪流からかなり離れた山地までも移動するほど活発な行動力を持っており、夜間の運動量は

昼間の行動量からは考えられないほど大きい。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐（島後）の溪流から山地にかけて生息。山地に棲む流水性の種類のサンショウウオだが、海岸近くから高地まで広く分布している。

【存続を脅かす原因】

隠岐（島後）では常に一定の水量を保っている河川が少なくなってきた。本種の幼生にとっては安定した水量が年間を通してあることが生存の絶対条件でもあるが、夏などに完全に水の無くなる現象が見られる小川が増えてきている。また、親にとっては樹間の落ち葉の下や林間の岩の陰、砂礫の間など乾燥し過ぎない場所が必要であるが必ずしも多いとはいえない。

生息地域				山地地域					里地地域					平野地域					海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	溪流	森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
			◎	◎				◎																	

有尾目（サンショウウオ目）サンショウウオ科

カスミサンショウウオ

Hynobius nebulosus (Schlegel, 1838)

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵7

【選定理由】

平野部の低山縁地から山地の渓流域にかけて広範囲に生息しており、近年沿岸部における道路建設、整備事業等により生息地が急ピッチに減少、この地域における個体数の激減が進行していることから絶滅が危惧される。

【概要】

全長は7-11cm前後で他のサンショウウオにくらべ小型である。体色は黄褐色、暗褐色、灰褐色と地域によって変異が見られる。低山に生息する低地型と標高の高い山地に見られる高地型があり、低地型は尾の上下に黄色の条線が見られるが高地型は不明瞭である。産卵期は12月から3月頃までと長く、低地型と高地型で時期が異なる。卵嚢は1対

でバナナ状または小さく巻いたひも状で透明である。

【県内での生息地域・生息環境】

低地型は県内全域の標高30m前後の山縁部の低山地を中心に見られ、高地型は中山間地の里地から中国山脈の森林域にかけての標高400m以上を中心として生息している。産卵は沿岸部では山縁部側の湧水地や流れのゆるやかな小川等、高地型は湧水地の水溜まり等で行われるが、産卵時期以外は山地の湿地部に生息している。

【存続を脅かす原因】

沿岸部低山地の道路建設、宅地造成等の環境整備や中山間地の環境整備による森林伐採、道路建設等による産卵場所や生息地の消失。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域							
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼	溪流	森林	草原	農地	河川	湖沼	溪流	林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○							○		○			○	○		○			○					

有尾目（サンショウウオ目）サンショウウオ科

ブチサンショウウオ

Hynobius naevius (Schlegel, 1838)

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

写真 口絵7

【選定理由】

本種は溪流性で、標高の比較的高い森林地に多く見られる。道路建設や公園整備などの工事による生息環境の悪化や生息域の狭小化や個体数の減少。

【概要】

全長は8-15cmほどで、多くは地色が青みを帯びた暗褐色で白色ないし灰白色の不規則な斑紋を持っている。腹面にも地衣状斑がある。産卵は伏流水中に行い、丸く巻いた透明でやや青みを帯びた卵嚢の中に、10-20個ほどの卵を産む。幼生は爪が無いが、流水性であり越冬す

る事がある。カスミサンショウウオの高地型に外観はよく似る。

【県内での生息地域・生息環境】

里地から山地にかけて県内の分布は広い。溪流付近の森林に多く見られる。

【存続を脅かす原因】

森林伐採や溪流の水を涸れさせてしまうような林道建設、局地的な自然災害による復旧工事、防災工事等。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域					海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	溪流	森林	草原	農地	河川	湖沼	溪流	森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○		○				○	○					○											

有尾目（サンショウウオ目）サンショウウオ科

ヒダサンショウウオ

Hynobius kimurae Dunn, 1923

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

写真 口絵7

【選定理由】

比較的高い溪流付近に生息地が限られている。山林伐採などによって生息環境が悪化することで生息地が狭小化し、個体数が減少してきている。

【概要】

全長は8-17cm、尾は棒状で、体色は全身が褐色で腹側には斑紋がなく、背側に不規則な形の橙黄色の斑紋がある。産卵は溪流の岩の下に丈夫な膜に包まれた卵塊を、1-3月にかけて産む。幼生は溪流にすみ、平衡棒が無いことから、流水性のサンショウウオである事が分かる。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では山地に生息している。標高が高いところに多いと思われるが、低くても北側の斜面など気温や水温等の条件によっては生息しており、分布域も広い。

【存続を脅かす原因】

標高の低い溪流から高い渓谷にかけて発見例があることから、森林伐採や溪流の水を涸れさせてしまうような林道建設、局地的な自然災害による復旧工事、防災工事等。

生息地域				山地地域				里地地域						平野地域					海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	溪流	森林	草原	農地	河川	湖沼	溪流	森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
○	○	○		◎				◎	◎					◎										

有尾目（サンショウウオ目）サンショウウオ科

ハコネサンショウウオ

Onychodactylus japonicus (Houttuyn, 1782)

【選定理由】

中国山地の標高の高い森林地の渓流域に生息するが、生息環境の悪化によって生息域が狭小化し、個体数も減少している。

【概要】

全長は11－19cmほどでスマートな体型をしているので、他の小型サンショウウオよりも小さく見える。体色は紫褐色で背側の中央部から尾の先まで朱色の縦帯があり、小さな斑紋が背側に見られる。産卵期は5～6月、半透明な丈夫な卵嚢を流水中の岩に付着させる。幼生は3年以上かけて成体になる。渓流性のため足指に爪を

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

持っている。幼生期は外鰓により呼吸するが、成体は肺が発達していないため、主として皮膚呼吸に頼る。

【県内での生息地域・生息環境】

自然度の高い山地の源流付近の森林の渓流に見られる。水質が清楚な溪流に産卵し、幼生は渓流域を生育地として成長する。

【存続を脅かす原因】

生息域および産卵域の森林伐採や溪流の水を涸れさせてしまうような林道建設、局地的な自然災害による復旧工事、防災工事等。

生息地域				山地地域					里地地域					平野地域					海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	溪流	森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
○	○	○		◎				◎																

無尾目（カエル目）アカガエル科

タゴガエル

Rana tagoi tagoi Okada, 1928

【選定理由】

本種は標高の高い林床域や渓流域に多く生息しており、ニホンアカガエルやヤマアカガエルなどと比べて、生息域が狭いため、環境の変化による影響を受けやすい。山間部の林道や農道などの道路工事によって、生息地が減少してきている。

【概要】

体長はメスで6cm、オスは5－6cmほどで、体色は背側が黒褐色から赤茶色、腹側は雲斑状を呈している。繁殖期は3～7月で、溪流沿いの伏流水や岩の下などに、

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

卵黄が豊富な白く大型の卵を少数産みつける。

【県内での生息地域・生息環境】

県内に広く分布している。本種は他のアカガエルとは異なり、標高の高い渓流域に多く生息して繁殖を行っており、山地では水田近くまで降りてきていることもある。

【存続を脅かす原因】

生息域および産卵場所となる領域の森林伐採、水田地の道路建設などによる環境の悪化。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	溪流	森林	草原	農地	河川	湖沼	溪流	森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
◎	◎	◎		○				◎	◎					◎											

無尾目（カエル目）アカガエル科

オキタゴガエル

Rana tagoi okiensis Daito, 1969

【選定理由】

分布域の一部で生息条件が悪化しているため。具体的には溪流保全工（護岸工・落差工事）をはじめとする環境破壊の影響を考慮した。

【概要】

成体は背側隆起が鼓膜の後方で曲がり、前後指趾端が膨らむほか、後肢の水かきの発達が悪い。吻端は円く終わり、喉部に多数の黒色細密斑紋を有する。全長は53mmに達する。溪流近傍の冷涼多湿な林床に隠遁し、土壤動物等を捕食する。繁殖期は早春から春暖季までの間で、溪流沿いの伏流水中に産卵する。卵塊は球状である。卵

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：島根県固有種、基準標本産地

環境省：準絶滅危惧（NT）

写真 口絵7

は径がやや大きくて卵黄に富む。水中で卵黄を消費する幼生期間は黒色素が少ないほか、口器が小さくて尾がかなり長い。日本固有種のタゴガエルの隠岐産亜種である。

【県内での生息地域・生息環境】

島後および西ノ島の、低地帯および山地帯に生息する。各地の環境は天然林、または中低木や草本を有する一部の人工林に覆われた谷間で清冽な流水を有する。

【存続を脅かす原因】

砂防施設、森林皆伐、道路建設、ダム開発および河川改修。

生息地域				山地地域					里地地域					平野地域					海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	溪流	森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
			◎	◎				◎	◎															

無尾目（カエル目）アオガエル科

モリアオガエル

Rhacophorus arboreus (Okada et Kawano, 1924)

【選定理由】

沿岸部における道路建設等の都市整備によって、産卵に適した湖沼が減少していることから、個体数の減少がある。

【概要】

体長はメスで9 cm、オスで7 cm、体色は背側で緑色、腹側は薄黄色をしているが、場合により青緑色から灰褐色まで変化する。手足には吸盤が付いており、コナラ、ミズナラ、ブナなどの広葉樹の樹上で生活するのに都合が良い。産卵は5～7月にかけて淡黄色の泡に包まれた

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

卵塊を、池や水田などの水面に張り出した樹木の小枝に産みつける。

【県内での生息地域・生息環境】

平野部から里地、山地にかけて、県内では比較的広い範囲に分布しており、条件の良い産卵地では数十個の卵塊が確認されている。

【存続を脅かす原因】

平地における土地造成、ほ場整備や産卵場所である池沼の公園整備などによる環境の悪化。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域							
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○		○					◎						○										

無尾目（カエル目）アオガエル科

カジカガエル

Buergeria buergeri (Temminck et Schlegel, 1838)

【選定理由】

自然度の高い清澄な河川を生息域としているため、河川の汚染度を測る指標動物になる。生息環境の悪化による生息地の減少傾向がある。

【概要】

体長はメスで7 cm、オスは4 cmで、体型は平べったく、背側が灰褐色で黒褐色の斑点や縞模様があり、腹側は灰白色である。繁殖期は5～8月頃にオスの鳴き声が聞こえ、産卵は6～7月にかけて行われる。

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【県内での生息地域・生息環境】

出雲市の猪目川や鱒淵寺の付近では、地元の小学生が定期的に観察・研究している事は有名だが、県内全域の山地の清流域や溪流に広く分布している。

【存続を脅かす原因】

中山間地を流れる河川における水質汚濁や河川改修工事による生息環境の悪化。

生息地域				山地地域					里地地域					平野地域					海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	溪流	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	
◎	◎	◎				○		○				◎					○						

トカゲ目ナミヘビ科

ジムグリ

Elaphe conspicillata (Boie, 1826)

【選定理由】

高温が苦手で、おもに山地の森林域に生息しているので生息域が限られている。林道などの道路工事や開発などによって、生息地である森林地が減少してきていると思われる。

【概要】

全長は70–100cmで、背面は赤茶色の地に黒褐色の斑点が散在し、腹面には黒い角ばった市松模様が見られる。森林性で地中の穴に潜りやすく、やや低温を好むことから、夏の高温には弱い。8月ごろに孵化した幼蛇は、体

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

色が成蛇よりも鮮やかである。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では、中国山地を中心とした山地や里地に生息しているが、目撃例が意外と少なく、移動範囲が狭く、ごく限られた領域に生息していると思われる。

【存続を脅かす原因】

里地の土地開発および山地における森林伐採、林道建設などによる森林環境の悪化、および餌となる生物の減少。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○	○	○				◎															

トカゲ目ナミヘビ科

ヒバカリ

Natrix vibakari (Boie, 1826)

【選定理由】

おもに山地やその周辺の水田などで普通に見られる種であったが、最近では減少してきている。また、水田や山地などの環境の変化によって、餌となる動物が減少してきていることから、本種の減少も多大に考えられる。

【概要】

全長が40－60cmの小型のヘビで、背面は褐色または茶褐色、口角から頸部にかけて斜めに淡黄色の帯が入る。腹面は黄白色で、その両端には暗色の点刻がある。おもにカエルやオタマジャクシ、ドジョウなどの小魚、ミミズを食べており、森林や草原、水田や湿地などで生息し

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域							
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○	○	○				○	○	◎														

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

ている。

【県内での生息地域・生息環境】

県内には広く分布しており、山地付近の水場には餌を食べにきた個体を容易に見つける事が出来たが、最近では土地開発や道路工事などで生息環境が変化し、個体数が減ってきていると思われる。

【存続を脅かす原因】

里地から山地にかけての土地開発および山地における森林伐採、林道建設などによる環境の悪化、および餌となる生物の減少。

トカゲ目ヘビ科

シロマダラ

Dinodon orientalis (Hilgendorf, 1880)

【選定理由】

全国的に個体数は少ない種で、さまざまな土地開発などによる影響を強く受け、生息地の環境悪化によって、県内でも個体数が減少してきている。

【概要】

全長は30－70cmと小型のヘビで、背面は灰色もしくは白褐色で黒い黄帯がバンド状にはいる。夜行性で、トカゲやヘビなどをおもに食べる。捕らえようとすると威嚇した後に擬死を行うことが特徴的である。活動する時間帯は狭いが、山地から平地まで、さまざまな環境に生息

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域							
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○	○	○				◎	○	◎				○	○	○								

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵7

している。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では隠岐（島後）をはじめとして、平野部から里地、山地まで広く分布していると思われるが、比較的個体数は少ないことから、目撃報告は少ない。

【存続を脅かす原因】

住宅地周囲のコンクリート化やアスファルト化、ほ場整備、道路建設、公園整備などによる生息地域の環境悪化、および餌となる生物の減少。

トカゲ目ナミヘビ科

タカチホヘビ

Achalinus spinalis Peters, 1869

【選定理由】

全国的に個体数は少ない種で、土地開発などによる生息地の環境の変化を受けやすく、県内での分布も減少してきている。

【概要】

全長は30－60cmと小型で、幼蛇は全身が黒っぽく、成熟すると褐色から紫がかかった褐色となる。背中線上の黒いラインがはっきりと尾端まで入っている。夜行性でジムグリと同様に地中を這い、ミミズをおもに食べている。

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【県内での生息地域・生息環境】

県内は、山地の広い範囲で生息していると思われるが、個体数は少なく、夜行性で地中生活する特異な習性のため人の目に触れる機会は少なく、不明な点が多い。

【存続を脅かす原因】

森林伐採や溪流の水を涸れさせてしまうような林道建設、局地的な自然災害による復旧工事、防災工事等による生息地域の環境悪化、および餌となる生物の減少。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域							
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	地中	森林	草原	農地	河川	湖沼	地中	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○		◎	○			◎	◎	○				◎									

無尾目（カエル目）アカガエル科

ナガレタゴガエル

Rana sakurai Matsui et Matsui, 1990

【選定理由】

生息地が局限しているが、十分な情報を得ていないため。県内初記録からこれまでの間の発見個体数が少数であることを考慮した。

【概要】

成体は後肢の水かきの発達が著しい。全長は63mmに達する。溪流近傍の冷涼多湿な林床に隠遁し、土壤動物を捕食する。繁殖期は早春から春暖季までの間で、溪流水中の岩石下に産卵する。繁殖期とその前後に亘っては皮膚が著しくのびて襞状に弛み、雄の前肢第1趾には一塊の婚姻瘤が生じる。卵塊は球を圧した形状である。卵は

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵7

径が大きくて卵黄に富む。水中で卵黄を消費する幼生期間は黒色素が少ないほか、口器が大きくて尾が長い。日本固有種で関東地方以西の本州に分布する。

【県内での生息地域・生息環境】

県西部の一部で、標高700m以上の山地帯に生息する。当地の環境は、天然林と人工林から成る森林に覆われた谷間で清冽な流水を有する。

【存続を脅かす原因】

捕獲・採取圧および森林皆伐。

両生類
爬虫類

絶滅
野生絶滅

絶滅
危惧Ⅰ類

絶滅
危惧Ⅱ類

準
絶滅
危惧

情報
不足

兩生類・爬虫類

絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

淡水魚類の生息域は、大小の河川、池沼から水田や灌漑用溜池のような人為的要素の強いものまで幅広い淡水環境にある。また、汽水性魚類の場合は、河川下流部や内湾に形成される感潮域と本県の場合、宍道湖・中海・神西湖のような汽水湖そのものが主要な生息環境となる。

1. 淡水環境の様相

淡水魚は、先にあげた多様な水域に生息するが、それぞれの環境は相互に密接につながっていることが普通で、その基本はその地を流れる河川にあるといえる。さらに、河川には、いろいろなタイプの回遊性魚類がくらししており、海とのつながりもまた直接的である。

本県には、一級河川の高津川、江の川、斐伊川を筆頭に、多数の中小河川が中国山地から日本海に向かって流れている。一級河川に次ぐ規模の神戸川は、平成25年に洪水調整目的の放水路で斐伊川とつながったことから、斐伊川水系を構成する一分流河川となった。

本県河川の現状は、総じて魚類全般の数量が減少していることが、漁業関係者をはじめ研究機関また関係する個人の感想としてよく聞かれるようになった。自身の調査経験からも、一昔前に比べて、オイカワやヨシノボリ類など、多くの地で「ハエング」・「ゴリンショ」と称される所謂「雑魚」が大幅に減ったことは多くの河川で共通している。実際に、以前には、生息調査等で投網を打つと、大量に網に掛ったこれらの「雑魚」を外すのに苦労したものの、現在ではそのようなことはほぼなくなった。その傾向は10年前と比べると実感でき、さらに20年前に遡るといっそうその差が明瞭となる。これらの「雑魚」は、水産上有用種であるアユやヤマメのように、移植放流がなされることはないので、生息量の変化は河川環境の変化を強く反映していることがうかがえる。

理由は、特定することは難しいが、よく見られる事例として、河床にシルトが堆積して石や岩の隙間がふさがり、そこにくらす多くの生物の生息空間が喪失していることがあげられる。さらに、石の表面がシルトや泥で覆われることによって、餌となるケイソウなどの付着藻類の生育が妨げられたり、流量や流速の変化によって、従来と異なった藻類が大量繁茂することなどがあげられる。さらに、カワウやサギ類のような水鳥の増殖も、捕食圧として無視できなくなっている。

2. 淡水魚（レッドデータブック掲載種）について

淡水魚のRDB種についての概要は、以下の通りである。

ドクツミミズハゼは、前回に続いて絶滅の判断をした。絶滅危惧Ⅰ類には、ゴギ、オヤニラミ、ミナミアカヒレタビラ、イシドジョウ、イトヨの5種がある。これらの魚種の生息環境は、渓谷の細流から下流の緩流域まで多様であるが、それぞれの種が生息するに適する環境が損なわれる傾向が依然続いているといえる。特に、イトヨにおいて、産卵期に遡上するのに適した河川環境の喪失、また、ミナミアカヒレタビラにおいては、本種の原記載地である小河川における個体数の減少は深刻である。

絶滅危惧Ⅱ類には、サクラマス、カジカ（大型卵）、ルリヨシノボリ、カワヤツメ、スナヤツメ、イシドンコの6種が挙げられる。これらの種は、河川の清流にくらす種と両側回遊性のものが含まれる。生息環境の変化は、堰堤や護岸改修など洪水調整目的の人工構築物による影響が大きい。人為的な河川形態の平準化は、本来これらの魚種が必要とする淵と瀬のバランスが損なわれている例も少なからず見られる。また、回遊性の魚種にとっては、遡下上に効果的な魚道や生息しやすい下流環境の創造など、河川の連続性の観点から川のあり方を再度見直す必要がある。

準絶滅危惧には、ズナガニゴイ、アブラボテ、アカザ、アユカケ、オオヨシノボリ、サンインコガタスジシマドジョウ、ウツセミカジカ（中卵型）の7種がある。これらの種は、上の絶滅危惧Ⅰ類およびⅡ類の魚種のところで述べた原因と同様である。アブラボテに関しては、産卵に適した二枚貝の生息状況によるところも大きく、周辺生物の生息も同時に考えていく必要がある。また、サンインコガタスジシマドジョウについては、生息が確認される河川においては、少なからず個体数が多いと思われるが、分布する河川の確認および生息数の把握が今後必要なことと思われる。

3. 汽水環境の様相

先に述べたとおり、汽水性魚類がくらす「汽水環境」は、さまざまな場所と要因によって形成されるのであって、その現況をひとくくりで記述することは適切ではないので、ここでは、宍道湖と中海について述べることにする。

この二つの汽水湖の様相は、先の河川と同様に、生息する魚自体の減少を指摘しなくてはならない。一例をあげるならば、ビリングは、中海地方で「メゴズ」と呼ばれる水産上の有用魚種であるが、近年その減少が著しい。かつては、初夏のころには、方々の船着き場において、春先に生まれた若魚があたかも長い帯が漂うように群れていたものであるが、現在では、群れ自体の規模がきわめて小さく、散在的である。このような、減少の著しい種は、マハゼやワカサギ等の漁獲対象魚のみならず、タツノオトシゴの仲間やクルマサヨリ等多くあげられる。一方で、増加はないものの、減少幅が小さいものに、スズキやコノシロ等があり、それらの魚種は相対的に漁獲に占める割合が高くなっている。別な表現をするならば、生息する魚種数そのものは大きな変化はないものの、特定な種の数量割合が著しく高くなっているのが最大の特徴である。

要因は、河川の場合と同様に特定することは困難であるが、その中でも、湖底環境の悪化による生息域の減少と餌生物の不安定化があげられる。つまり、両湖において夏季を中心に発生する湖底の貧酸素水域の拡大は、多くの魚類の生息環境そのものだけでなく、餌生物の消失を伴うことが予想される。そのほかに、海水温の上昇傾向が続く中での海水の流入量の増加に伴う湖水の高塩分化と、反対に頻発する集中豪雨による塩分低下と水温の激変など、汽水環境を取り巻く状況は厳しさが増している。さら地球温暖化による水温の上昇は、夏季における生息環境の悪化とともにプランクトンやベントスなどの餌生物の変化なども懸念材料となる。

4. 汽水性魚類（レッドデータブック掲載種）について

汽水性魚類の今回のRDB掲載種についての概要は以下の通りである。

今回該当する汽水性魚類は、I類のクルマサヨリ、II類のシンジコハゼ、サンゴタツ、ヨウジウオの4種である。シンジコハゼの場合は分布域の変化が生息数の減少に関係している可能性がある。本種の記載当時は、文字通り穴道湖を主要分布域としていたが、現在では西半分の水域に分布が後退している。原因は、海水温の上昇に伴う高塩分化とともに近似種のビリングとの相互作用も考えられる。クルマサヨリ、サンゴタツ、ヨウジウオについては、産卵やそもそもの生息環境として必要なウミトラノオやコアマモなどの海藻・海草の減少と不安定化が挙げられる。現在は、オゴノリやジュズモがときに大量繁茂することがあるが、これらの魚種に利用されることは少ないようである。さらに、大量繁茂した藻類は、そのまま枯死することによって、湖底の貧酸素化を助長することになり、上の魚種の生息をいっそう脅かすことになる。

今回、汽水性魚類は4種を取り上げているが、汽水域は、淡水域に比べて生物の生産性が高く、必然的に魚の生息数も多い。また、塩分をはじめとする微妙な環境バランスの上に生態系が成り立っていることから、今後、減少の著しい魚種については、RDBの記載を検討すべき魚種が増えるものと思われる。

（越川敏樹）

汽水・淡水魚類掲載種一覧

計24種

絶滅 (EX)

- ・ ドウクツミミズハゼ

計1種

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

- ・ ミナミアカヒレタビラ
- ↑ インドジョウ
- ↑ 日本海系イトヨ (注2)
- ↑ クルメサヨリ

- ・ ゴギ
- ・ オヤニラミ

計6種

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- ・ スナヤツメ南方種 (注3)
- ヨウジウオ
- ↑ イシドンコ
- ・ カワヤツメ
- サンゴタツ
- ・ ルリヨシノボリ

- ・ サクラマス
- ◎ カジカ (大卵型:河川陸封型) (注4)
- ・ シンジコハゼ

計9種

準絶滅危惧 (NT)

- ・ アブラボテ
- ・ アカザ
- ・ オオヨシノボリ
- ・ ズナガニゴイ
- ・ アユカケ (カマキリ)

- ◇ サンインコガタスジシマドジョウ (注5)
- ◎ ウツセミカジカ (小卵型・中卵型:両側回遊型) (注4)

計7種

情報不足 (DD)

- ・ カワアナゴ

計1種

今回の改訂により掲載対象外となった種

タモロコ

カジカ

計2種

(注1) 前回の改訂で「アカヒレタビラ」とした亜種は、その後の分類学的な変更によりさらに3亜種に区分された。鳥根県産の旧「アカヒレタビラ」は、現在のミナミアカヒレタビラに対応しており、名称を変更した。

(注2) 前回の改訂で「イトヨ」とした種は、その後の分類学的な検討により、学名未決定の種を含んでいることが判明した。鳥根県産の旧「イトヨ」はこの学名未決定の種である「日本海系イトヨ」に対応することから、名称を変更した。

(注3) 前回の改訂で「スナヤツメ」とした種は、その後の分類学的な変更によりさらに2種に区分され、いずれも学名未決定の種とされた。鳥根県産の旧「スナヤツメ」はこの学名未決定の種である「スナヤツメ南方種」に対応することから、名称を変更した。

(注4) 前回の改訂で「カジカ」とした種は、カジカ大卵型、カジカ中卵型が含まれているとしていたが、分類学的な検討により、中卵型がウツセミカジカに含まれるとされたため、今回、カジカ (大卵型) とウツセミカジカ (小卵型・中卵型) を分けて掲載した。

(注5) 今回の改訂で種名が変更になった種

(前回改訂)

(今回改訂)

スジシマドジョウ小型種 点小型 → サンインコガタスジシマドジョウ

【記号説明】

- ・ : カテゴリー区分変更なしの種 (15種)
- ↑ : 上位のカテゴリー区分への変更種 (4種)
- ↓ : 下位のカテゴリー区分への変更種 (0種)
- : 新規掲載種 (2種)
- ◇ : 情報不足からの変更種 (1種)
- ◆ : 情報不足への変更種 (0種)
- ◎ : その他変更種 (2種)

ドウクツミミズハゼ

Luciogobius albus Regan, 1940

島根県：絶滅（EX）

島根県固有評価：基準標本産地

環境省：絶滅危惧ⅠA類（CR）

写真 口絵8

【選定理由】

八束町大根島で最後に確認されたのは、1952年8月で、その後の確認例はない。50年以上確認されておらず、生息地の環境も悪化してきていることなどから、絶滅したものと考えられる。

【概要】

大根島の洞窟で1931年に採集された2標本に基づいて、1940年に日本固有の新種として記載された。生息地は大根島と長崎県五島列島富江町の溶岩洞穴、高知県の新莊川しか知られていない。国内で知られている唯一の洞窟性水生脊椎動物で、全長は5cmほど。眼は退化しており、小さな黒点状をなし皮下に埋没している。体表には黒色素胞が乏しく、生時の体色は淡紅色を呈する。他の盲目性ハゼであるネムリミミズハゼやイドミミズハゼに比べ頭が大きく、体長の1/4以上を占める。脊椎骨数は31で、ネムリミミズハゼの36、イドミミズハゼの35～37より少ない。また、近縁のミミズハゼ類に比べ、本

種は背びれや尻びれが発達している。地下水中に生息するトビムシ類を餌とすると考えられている。現在、生息が確認されているのは福江町福江島の溶岩洞穴だけである。ここでも採集記録は少ない。本種は、もともと生息個体数がきわめて少なく、生物学知見に乏しい種である。

【県内での生息地域・生息環境】

大根島の溶岩洞窟内などに生息していたが、50年以上生息確認がなく、現在は絶滅したものと思われる。

【存続を脅かした原因】

もともと生息数がきわめて少なかったことや、洞窟内の土砂の堆積等による生息環境の悪化など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	潟干		林地	草地	砂浜	河口	
○																			○						

ミナミアカヒレタビラ

Acheilognathus tabira jordani Arai, Fujikawa and Nagata, 2007

島根県：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵8

島根県固有評価：分布限界種（西限）

環境省：絶滅危惧ⅠA類（CR）

【選定理由】

県内での生息地はきわめて少なく、局所的である。近年生息が確認されている河川でも生息個体数の減少や産卵母貝であるイシガイ科二枚貝の減少が確認されており、近い将来絶滅が危惧される。

【概要】

従来アカヒレタビラとされていたものが、アカヒレタビラ、キタノアカヒレタビラ、ミナミアカヒレタビラの3亜種に分けられ、山陰地方と北陸地方に生息するタビラはミナミアカヒレタビラとなった。県中部の河川はミナミアカヒレタビラの西限分布域である。全長の最大は8cmで、野生化での寿命は2～3年、産卵期は4～6月である。なお本種は2012年3月に島根県の指定希少野生動植物に指定され、捕獲等が原則禁止となった。

【県内での生息地域・生息環境】

県中部及び東部の限られた河川にのみ生息する。県中部の河川においてはきわめて狭い範囲にのみ生息して

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	○															○			

イシドジョウ

Cobitis takatsuensis Mizuno, 1970

島根県：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵8

島根県固有評価：基準標本産地

環境省：絶滅危惧ⅠB類（EN）

【選定理由】

県中西部の限られた水系にしか生息していない上に、生息に適した環境も限られている。生息個体数も多くなく、大きな移動もしないことなどから、絶滅が危惧される。

【概要】

日本固有の小型のシマドジョウ属魚類で、1970年に高津川水系の福川川で発見され、新種として記載された。全長は通常4～6cmで、最大でもオス6cm、メス8cm未満。尾柄背縁と腹縁に竜骨状隆起が発達し、他のシマドジョウ属魚類に比べ寸胴である。体色は白色から淡黄褐色で、背びれと尾びれに3～5本の暗色点列がある。中国地方と九州地方に分布している。頬部に縦帯を持ち、背部から体側中央にかけて3列の暗色縦帯を持つものが多い。河川上流から中流の礫が積み重なる水通しのよい淵尻に生息し、水温が13～15℃になると砂礫底に深く潜りこんで越冬する。5月下旬から7月中旬が繁殖期で、

その時の水温は16～20℃であることや、大きな移動は行わず、雑食性で、天然での寿命は約2年であることなどが分かっている。四国に分布しているものは他の地域に分布しているイシドジョウと比べて形態が違うことから、2006年11月に新種とされヒナイシドジョウとなった。その特徴は鼻先から眼を貫いて1本の褐色線があり、ほほに線が無く、尾びれの根元に小さな黒点があることなどで、イシドジョウと見分けられる。

【県内での生息地域・生息環境】

県中西部の河川の上中流部で確認されている。一部の生息地はダム建設により消滅する。礫が積み重なった水通しのよい場所に生息し、泥の堆積のない淵尻部など、生息域はかなり限定されている。

【存続を脅かす原因】

ダムの建設、河川改修や流域開発による淵の消失、礫底の目詰まりなど。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
	○	○				○					○								

ゴギ

Salvelinus leucomaenis imbrius Jordan and McGregor, 1925

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵8

島根県固有評価:基準標本産地

環境省:絶滅危惧Ⅱ類(VU)

【選定理由】

西中国山地を流れる一部の河川にのみ分布し、河川上流域に生息する。開発や河川改修、自然林伐採などによる生息環境の荒廃で生息数が減少している。

【概要】

全長20-30cm前後だが、近年は30cmに達するものはまれである。他のイワナの亜種とは異なり、背部に見られる虫食い状の白色斑が吻端まで存在するのが本亜種の特徴である。本亜種は世界のイワナ属魚類の中で、もっとも南方に分布するもののひとつであり、氷期の遺存的な存在だと考えられる。水質が良好で、夏でも水温が20℃(多くは15℃以下)を超えない河川の最上流域に生息し、おもに昆虫類や小動物を捕食している。繁殖期は10月下旬から11月中旬で、メスが川底に産卵床を掘り、その中に産卵する。ふ化した仔魚は翌春まで産卵床内にとどまり、腹部の卵黄で发育していく。本亜種は稚魚期から障害物や岩陰に潜む性質が強く、野外ではなかなか発見し

づらい。

【県内での生息地域・生息状況】

県内では斐伊川水系から高津川水系まで分布するが、どの生息地でも生息数は減少傾向にあると思われる。近年、本亜種の生息域に別亜種ニッコウイワナの生息が確認されており、亜種間雑種形成による遺伝的独自性の喪失、遺伝子汚染が心配される。また、本亜種の生息域にヤマメなどのサケ科魚類を移入すると、競合によって本亜種が減少する可能性がある。近縁種、競合種の移入は厳に慎まなければならない。

【存続を脅かす原因】

河川改修や構造物の建設。水質汚染。伐採による広葉樹の減少。近縁種の移入による遺伝的独自性の喪失。競合する魚類の移入。釣りなど捕獲による採集圧。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	○	○				○													

日本海系イトヨ

Gasterosteus sp.

島根県:絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

写真 口絵8

島根県固有評価:分布限界種(南限)

環境省:絶滅のおそれのある地域個体群LP

【選定理由】

北方系魚種であり、県内は南限域となる。宍道湖・中海水域以外ではきわめてまれであり、当水域においても最近減少が著しい。

【概要】

本種は、背びれに3本と腹びれに1対の鋭い棘をもち、体側に連続した大きなうろこ(鱗板)が並ぶ。従来、イトヨと称されていたが、日本海系イトヨと太平洋系降海型イトヨ、太平洋系陸封型イトヨに分類された。日本海系イトヨの分布は、北海道から島根半島の日本海側、北海道から利根川の太平洋沿岸、北海道オホーツク海沿岸で、国外ではサハリンや千島列島、朝鮮半島東岸である。産卵期は春で、成魚は河川を遡上し、流れの緩やかな水草帯で産卵する。産卵生態はユニークで、赤と青の婚姻色の出たオスが水草などでトンネル状の巣を作り、メスを誘って産卵させ放精する。その後、オスは卵と孵化仔魚を保護する。水生昆虫や小型の甲殻類などを食べる。

【県内での生息地域・生息環境】

かつては、産卵期の春に、全県下の河川の下流域や水田の用水路に普通に見られたが、戦後の高度成長期を境にして激減した。宍道湖・中海水域は一時の絶滅状態の時期を経て、生息数は徐々に回復していた。産卵遡上前の3月に、当水域に張られた小型定置網において、1994年頃は1回の操業で数十個体も漁獲されていたことがあるが、2001年頃からは数個体程度となり、一時漁獲数が増えた時期もあったが、2010年頃からはほとんど漁獲されなくなっている。

【存続を脅かす原因】

水質と河川改修などに伴う生息環境の悪化。産卵場所と巣の材料となる水生植物の減少。生息域における夏季の高水温。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	△	△	△												○				

クルメサヨリ

Hyporhamphus intermedius (Cantor, 1842)

島根県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

写真 口絵8

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧 (NT)

【選定理由】

かつて宍道湖・中海水域においては一般的な魚種であったが、1990年前後より激減し、現在ではきわめてまれとなった。

【概要】

全長10－18cm。近縁のサヨリに似るが、本種は成長しても全長18cmと小型である。また、下顎がより長く、先端下面が黒色で、サヨリのように朱紅色はない。汽水性の魚で、サヨリほど海域と河川を広範囲に回遊することはない。青森県以南の内湾や河口に成育し、朝鮮半島や中国などに分布が知られる。

【県内での生息地域・生息環境】

大型河川の感潮域と宍道湖・中海水域、神西湖などに見られる。だが、最近はいずれの水域でも減少が著しく、きわめてまれな魚種となった。宍道湖・中海水域においては、定置網や刺し網などで、1回に十数匹から数十匹単位で漁獲されていたが、最近ではこのようなことも減

少している。

【存続を脅かす原因】

宍道湖・中海水域の場合は、埋め立てや護岸工事による渚と藻場の減少が、産卵や餌場また稚幼魚の成育場の喪失につながり、個体数の減少を引き起こしたと思われる。汽水の当水域内で生活史の大半を送る本種にとっては、汽水域の環境悪化は直接存続につながってくる。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	汽水
◎	△	△	△													○					○	○

オヤニラミ

Coreoperca kawamebari (Temminck and Schlegel, 1843)

島根県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

写真 口絵8

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類 (EN)

【選定理由】

河川改修や水の汚れによる環境破壊により、生息域が狭められており、近い将来の絶滅も危惧される。

【概要】

全長は最大で13cmとされているが、多くの個体が10cm前後の大きさである。鰓蓋には暗朱色の線が放射状に伸び、ヨツメという地方名が示すように、その後端に眼状斑がある。体側には6～7本の横縞がある。清涼で、流れが緩やかな河川の中・下流域に生息する。砂礫底の単調な河床よりも、大小の石が転がっている場所を好む。肉食性で、エビや水生昆虫などを捕食する。産卵期は4月下旬から9月頃とされるが、産卵は5～6月にかけての期間に集中する。メスは、ヨシやツルヨシなどの水生植物、倒れ込んでいるササの茎などに、およそ100個の卵を産み付ける。孵化するまでの間、オスは外敵を追い払ったり、新鮮な水を卵に送るなど、かいがいしく卵を保護する。国内では京都府桂川水系（保津川）・由良川

以西の本州や四国東北部、九州北部の限られた河川に、国外では朝鮮半島に生息している。

【県内での生息地域・生息環境】

島根県では高津川水系および江の川水系の本流や限られた支流にのみ生息している。本種を天然記念物に指定して保護活動を行っている自治体もある。

【存続を脅かす原因】

河川改修などによる生息環境の悪化や産卵床となる水生植物の減少。また、観賞魚として乱獲されるおそれがある。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
	◎	○									○										

ヤツメウナギ目ヤツメウナギ科

スナヤツメ南方種

Lethenteron sp. S.

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵8

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

生息地における生息条件の悪化が進み、近年、生息数が激減傾向にある。また、生息範囲も限定されている。

【概要】

全長15cm程度。円口類と呼ばれる無顎綱の仲間で、原始的な脊椎動物である。体は細長く、後半部でやや側扁する。口は円盤状で、顎がなく、眼の後ろに鰓孔が7つある。近縁種のカワヤツメは河川と海を回遊するが、本種は河川の中上流域で一生を過ごす陸封型である。川底の砂泥中に産卵し、生まれた幼生（アンモシーテス）はそのまま柔らかい砂泥の中で、有機物や珪藻などをロート状の口で食べている。幼生は数年を経て秋に変態して成体となり、翌年の春に産卵し斃死する。近年の研究から、本種は遺伝的に隔離された2集団（北方種と南方種）が確認されている。これらは形態からの識別は難しく、DNA解析を行う必要がある。

【県内での生息地域・生息環境】

県内の大型河川の中上流域やそこにつながる用水路の砂泥底部に生息する。特に、水がきれい水の水の通りがよい細砂と多少泥の混じる場所を好む。河川には比較的良好な生息場所が残っているが、それらにおいても近年は減少が著しい。1960年代まで県内の大中河川に普通に生息していたが、河川改修工事によって川筋が直線化し、川本来の多様な形態が失われ、生息環境が喪失している。

【存続を脅かす原因】

河川改修に伴うコンクリート護岸化や直線化、水質汚濁による生息条件の悪化など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○										○						○							

ヤツメウナギ目ヤツメウナギ科

カワヤツメ

Lethenteron japonicum (Martens, 1868)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵9

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

本県西部を南限とする北方系種であり、もともと生息数は少ない。近年は河川改修工事等による生息環境の悪化により、多くの河川では絶滅かもしれないと見られてきた種となっている。

【概要】

円口類に属し、口は吸盤状で顎がなく、内骨格はすべて軟骨性である。脊椎動物の中でもっとも原始的なグループに属する。体側の前部にえら穴が7つ並び、本物の目と合わせて「八つ目」と呼ばれる。回遊性で、河川で生まれた幼生はアンモシーテスと呼ばれ、2～3年間河川にとどまって泥の中の有機物や珪藻を食べて生活する。幼生はやがて変態して成体の形態となって海に降り、吸盤状の口で他の魚に吸い付いて体液を吸うといわれる。そして数年間における海域での生活を経て、再び河川に遡上し、産卵してその生涯を閉じる。北海道と茨城県、島根県以北の本州に分布する。

【県内での生息地域・生息環境】

本県においては、ほとんどの1級および2級河川での生息が知られているが、現在ではどこもきわめてまれである。宍道湖・中海では、時折定置網に入ることがあるので、流入河川で繁殖が行われているようで、実際に、中流域から下流域にかけて幼魚や変態した降海前の幼魚が採集されることがある。生息密度はごく低い。近年は、繁殖の為に河川に遡上する個体がほとんど見られなくなっている。

【存続を脅かす原因】

幼生は、川の流れのゆるやかな澄んだ砂泥底に潜伏して生活しており、近年の河川改修工事によってその生活環境は真っ先に影響を受けてきた。さらに、多くの河川に随所に設けられたダムや大小の堰堤によって、海とのつながりが妨げられていることも大きな要因である。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	汽水
◎	○	○										○						○						○	○

サクラマス

Oncorhynchus masou masou (Brevoort, 1856)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

写真 口絵9

【選定理由】

本種は、ヤマメ（河川生活タイプ）の降海したもの。県内はヤマメの自然分布の南方に位置し、もともと降海する割合は北日本に比べ少ない。近年はさらに降海する個体が減少している。

【概要】

全長40－60cm。先に述べた、ヤマメの降海したもので、パーマーク（楕円形の斑紋）が消失して全体が銀白色となり、背びれの先が黒くなる（銀化（ギンケ）またはスモルト）。河川の上流域で生まれてから、1年目の春に降海するものが多い。降海後は近海でオキアミや小魚などを食べ、翌年の春に40－60cmに育って河川を遡上し、その秋にヤマメに混じって産卵し死亡する。北海道・東北・箱根以東の関東・北陸・山陰・九州の瀬戸内海に注がない河川に分布する。それ以外の地域には、体側に朱点の散在する近縁のサツキマス（アマゴ）の分布域となる。国外では、樺太・朝鮮半島の東側・台湾に分布する。

【県内での生息地域・生息環境】

本県では、沿岸の定置網にまれに入ることがある程度で、その数は少ない。宍道湖中海水域では20年ほど前までは、1棟の網で年間10尾程度獲れていたが、近年はほとんど漁獲されない。

【存続を脅かす原因】

森林伐採や砂防ダムおよび河川改修工事によるヤマメの生息環境の悪化があげられる。流域に設けられた魚道が十分に機能しないことや、各種のダムや堰堤によって、海との繋がりが断ち切られていることも原因である。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域							
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	汽水
○	○	○										○						○						○	○

ヨウジウオ

Syngnathus schlegeli Kaup, 1856

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵9

【選定理由】

中海を中心に生息しており、定置網などで時折混獲されているが、近年確認される機会が減少している。

【概要】

全長30cmほど。日本産ヨウジウオ類では大型の部類。体は大輪でおおわれて、吻は長い筒状で腹びれはない。体色は褐色で不規則な模様のあるものや緑銀色のものなど変異に富む。中海で同所的に生息するガンテンイシヨウジは吻が短いことなどから区別できる。北海道以南の日本各地、朝鮮半島、中国、台湾、東シナ海、南シナ海、トンキン湾、沿海州の沿岸域の浅い内湾に生息する。アマモ場に多く生息している。底生性だが、胸びれと背びれをせわしなく動かして浮遊している。プランクトンを吸い込むようにして食べる。メスがオスの育児嚢に産卵してオスがふ化するまで育てる。産卵期は、3月中旬から6月頃で、体長10mmで産出されるが遊泳能力はきわめて低く、稚魚は流れ藻とともに採集されることが多い。

【県内での生息地域・生息環境】

中海を中心に大橋川や宍道湖東岸のアマモ場で確認されている。2000年頃から中海での定置網による漁獲数が減少傾向になり、2005年以降著しく減少している。近縁種のガンテンイシヨウジは、太平洋沿岸に多く分布しているが、近年の水温上昇の影響により、宍道湖の全域と大橋川、中海で普通に見ることができる。ヨウジウオとガンテンイシヨウジともに宍道湖西岸の塩分濃度の低い水域でも見られることがある。

【存続を脅かす原因】

アマモ場の消失など環境の改変による生息環境の悪化。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	汽水
◎	○	○																			○	○

トゲウオ目ヨウジウオ科

サンゴタツ

Hippocampus mohnikei Bleeker, 1853

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵9

【選定理由】

中海を中心に生息しており、定置網などで時折漁獲されているが、近年確認される機会が減少している。

【概要】

全長8cmほど。日本産タツノオトシゴ類ではもっとも小型。タツノオトシゴに似るが頂冠がなめらかなことや生息域が異なる。体は大輪でおおわれて、吻は筒状で腹びれはない。タツノオトシゴの仲間の中では吻は短い部類に入る。黒色や黄色など体色の変異に富む。北海道から九州西部、東シナ海、中国の沿岸域の浅い内湾に生息する。アマモ場に多く生息し、海草に尾部を巻き付けて体を支え、浮遊しているプランクトンを吸い込むようにして食べる。本州中部での産卵期は春から秋で、メスがオスの育児嚢に産卵して、オスがふ化して泳ぎ出てくるまで育てる。孵化直後の仔魚は3.5mm程度で、8mm程に成長すると泳ぎ出てくる。稚魚は表層を漂い、流れ藻などについていることが多い。世界的に漢方薬の原料とし

てなどの需要により、乱獲が進んでいることから、絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約の付属書Ⅱ（輸出入許可必要）にタツノオトシゴが記載されている。

【県内での生息地域・生息環境】

中海を中心に大橋川や宍道湖東岸のアマモ場で確認されている。島根県立宍道湖自然館の採集記録（未発表データ）によると近年、採集個体数が著しく減少している。

【存続を脅かす原因】

アマモ場の消失など環境の改変による生息環境の悪化。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	汽水
◎	○	○																						○	○

スズキ目カジカ科

カジカ(大卵型:河川陸封型)

Cottus pollux Günther, 1873

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

写真 口絵9

【選定理由】

本種は、河川の水質や水生生物の生息環境が良好に保持されていることを示す代表的な種であるが、すべての生息地において河川の生息環境が悪化し、個体数が減少している。

【概要】

日本固有種で、大卵型、中卵型・小卵型（ウツセミカジカ）があり、これらはすでに種レベルにまで分化していることが知られている。大卵型は河川の上流域に生息し、海に下ることはない。県内には、大卵型と中卵型が生息していると考えられるが、詳細な調査は行われていない。全長7－9cmで、時に12cmに達することもある。瀬の砂礫底や礫底に生息する底生魚である。体色は周囲の環境や体調によって異なり、灰褐色から暗褐色まで変化に富んでいる。体側に、4～5個の暗色の斑紋がある。体形はハゼ類に似るが、カジカ類にはうろこがないことや、頭部側面に棘を有することなど区別できる。水生昆

虫や小型甲殻類、時には小魚も食べる。産卵は、3月中旬から6月中旬で、川の瀬の石の下側にオスが空間を作り、メスを誘って石の下面に卵を産みつけさせる。

【県内での生息地域・生息環境】

県内において生息が確かめられている河川は、高津川、江の川、神戸川、斐伊川、飯梨川などの大型の河川である。河川によっては、中～下流に両側回遊性の中卵型（ウツセミカジカ）が、上流部に陸封性の大卵型（カジカ）が生息している。

【存続を脅かす原因】

河川改修に伴う人工護岸や河川構造物の影響、ダムによる流量の減少など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○				○						○													

イシドンコ

Odontobutis hikimius Iwata and Sakai, 2002

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：基準標本産地

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵9

【選定理由】

生息域は局所的で、生息域での繁殖は確認されているが、生息数はあまり多くない。鑑賞魚として乱獲されるおそれがある。

【概要】

高津川水系匹見川で採集された個体に基づき、2002年に新種として記載された。外部形態はドンコによく似るが、遺伝的に大きく離れているほか、後鼻孔から眼窩後方に伸びる孔器列とえら蓋上にある孔器列に違いが見られることや、うろこが小さく数が多いなどの違いがある。また、下顎下面の斑点の黄色味が強く、体高が低い傾向にある。ドンコが流れの比較的緩やかな場所を好むのに対し、本種は流れが速く石がごろごろしているような場所がよく見られ、川底の石の隙間に身を潜めていることが多い。5～7月の産卵期になると、オスはふだん隠れがにしている石の下にある砂や小石を口で掘り出して産卵室を作る。メスは産卵室の天井部分に産卵することが

多いが、壁面にまでおよぶこともある。卵は楕円形で、付着糸により産卵基質に付着する。産卵・放精後、オスはすぐにメスを追い出す。その後オスはふ化するまで卵のそばで胸びれを使って卵に新鮮な水を送り、卵に酸素を供給する。

【県内での生息地域・生息環境】

高津川水系とその周辺にしか生息しておらず、きわめて局所的。匹見川がおもな生息地で、高津川本流での生息数は少ない。

【存続を脅かす原因】

河川改修などによる生息環境の悪化やドンコとの交雑などが危惧される。また、観賞魚として乱獲されるおそれがある。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
		○				○					○								

ルリヨシノボリ

Rhinogobius sp. CO

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵9

【選定理由】

県内において本種の生息が確認されているのは、3つの河川と1つの湖沼だけである。生息数も少なく、いずれの地域においても近年個体数が減少してきており、中には絶滅した可能性の高い河川もある。

【概要】

ヨシノボリの仲間は、形態、生態の両面で変異性に富み、現在全国の河川・湖沼に生息するものは10種以上に分類されている。県内には、両側回遊性のものが5種と、河川陸封性のものが1種生息している。ヨシノボリの中では大型で全長7～10cm、時に12cmに達するものもある。生時に頬に美しいルリ色の小さな斑点が散在する。しかし、標本では、そのルリ色斑点は消失するので、尾びれ基部にある太い八字状の濃色斑などが手がかりとなる。北海道から九州にかけての日本全国の小・中河川の中～上流域に生息し、まれに湖沼に陸封されている個体群もみられる。河川の早瀬から淵頭にかけての急流部に生息

していることが多い。雑食性で、付着藻類や小型の水生昆虫をおもな餌としている。西日本での産卵は5～7月で、オスが半ば砂に埋まった石の下に産卵室をつくり、メスが天井面に卵を産みつける。県内では、日本海に注ぐ河川勾配が大きく、水量の豊かな小・中河川の早瀬に生息しているほか、堰止め湖に陸封された個体群も確認されている。

【県内での生息地域・生息環境】

県内中東部の河川のほか、堰止め湖でも確認されている。

【存続を脅かす原因】

河川改修などによる生息環境の悪化、湖沼においてはオオクチバスの放流など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	○					○	○				○								

シンジコハゼ

Gymnogobius taranetzi (Pinchuk, 1978)

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：分布域限界種

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵9

【選定理由】

本種は、おもに汽水域に生息しており宍道湖以外の水域でも確認されているが、その確認場所および生息数は少ない。

【概要】

全長メス6cm、オス5.5cm。中海に多い近縁のピリングとは酷似するが、メスの婚姻色と頭部の感覚器官の形状で識別できる。婚姻色は本種が体側に6～7本のあざやかな橙色の横斑が現れるのに対してピリングの場合はそれがない。また、頭部の感覚器官では、本種が感覚管の両端2個の感覚孔が開いているのに対して、ピリングでは管が連結していて孔は3個開いている。

【県内での生息地域・生息環境】

宍道湖での産卵は3月から4月上旬にかけて、オスが湖底に巣穴を掘ってメスを誘って行われる。孵化した仔魚は、わんどや船着場などの風波を避ける場所に集まって浮遊生活をおくる。成長は早く、夏過ぎには親魚サイ

ズにまで達し、秋の深まりとともに生殖巣が発達してくる。食性は稚魚・成魚ともに、イサザアミ・ユスリカの幼虫・ゴカイ類・コツブムシなどの底生動物の他に藻類も食う。2000年頃までは、宍道湖全域で確認されたが、2009年以降は生息数が減少している。現在は、宍道湖西岸と周辺の水路、安来市の中海流入河川の水路で見られる。国内では、富山県、石川県、他にロシア沿海州や朝鮮半島からも確認されている。益田市にも生息が確認されていたが、近年見られなくなり絶滅した可能性が高い。また、松江近郊の溜池にも生息し、陸封の可能性が高い。最近の研究では、ロシアや韓国産の*Gymnogobius taranetzi*と国内に分布するシンジコハゼとは、遺伝的に分化が認められるとしている。

【存続を脅かす原因】

わんどや旧来の船着場などの、仔稚魚の生育する場所を保全することが必要。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	汽水
◎		△															○				○	○

コイ目コイ科

アブラボテ

Tanakia limbata (Temminck and Schlegel, 1846)

写真 口絵10

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

県内では、中西部の一部の水域にのみ生息する。生息数も多くはない。

【概要】

全長4－7cm。繁殖期は4～6月頃で、オスには追星と重油色と黒色を基調とした婚姻色があらわれる。メスでは腹部から産卵管が伸び、これを用いて二枚貝の鰓内に産卵する。本種を含むタナゴ類の繁殖には、産卵母貝となるイシガイ目の二枚貝の生息が不可欠である。また、二枚貝の繁殖時には、グロキディウム幼生が寄生する底生魚類の存在がなければならない。すなわち本種が

生息するためには、これらの生物たちが共存した多様な自然環境が必要である。また、貝から浮出した仔稚魚は水生植物などがある岸辺付近で群れを形成して生活するため、このような環境も本種にとって重要である。

【県内での生息地域・生息環境】

県内中西部の限られた自然環境が良好な水域に生息する。

【存続を脅かす原因】

河川や水路の改修、ヘドロの堆積や水質悪化などによる二枚貝の減少。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○										○					○					

コイ目コイ科

ズナガニゴイ

Hemibarbus longirostris (Regan, 1908)

写真 口絵10

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

生息地域が限られ、個体数も少ない。

【概要】

国内におけるニゴイの仲間は、本種とニゴイ、コウライニゴイの3種が知られている。コイに似るが、1対の口ひげ（コイの口ひげは2対）や低い体高、長い吻などで比別できる。本種は、ニゴイよりもさらに頭と吻が長く、体色は淡黄色で、背面と体側に褐色の斑紋と小褐色点が散在する。全長約20cmで、ニゴイよりも上流域の流れのゆるやかな底層近くに生息している。産卵は5～6月で、メスの方がオスよりも尻びれが長くなり、産卵直

前に水底の砂をかき混ぜる。カゲロウなどの水生昆虫の幼虫をおもな餌としている。近畿地方以西の本州の河川に不連続に分布している。

【県内での生息地域・生息環境】

本種は県内では県中部の限られた河川のみ生息が知られている。河底が岩、礫、砂と多彩に組み合わさった清流を好む。

【存続を脅かす原因】

河川改修などによる生息環境の悪化や競合種の増加など。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
	○										○										

コイ目ドジョウ科

サンインコガタスジシマドジョウ

Cobitis minamorii saninensis Nakajima, 2012

写真 口絵10

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類（EN）

【選定理由】

最近になってシマドジョウ属の分類が整理しなおされたことによる。

【概要】

従来、スジシマドジョウ小型種点小型（*Cobitis* sp. 2, subsp. 3）と称されていたもの。全長5－7cmで、体はやや細長く、シマドジョウよりも小型である。体側の斑紋は雌雄で異なる。オスが線列型で、典型的なスジシマ型であるのに対し、メスは点列型か破線型で、シマドジョウの斑紋に似ている。平野部の河川の中・下流や農

業用水路、浅所の砂泥底に棲む。砂泥底にひそむユスリカの幼虫などの水生昆虫やミミズなどを食べる。繁殖期は6～7月と考えられるが、詳細は不明である。兵庫県の岸田川から本県の神戸川までの山陰地方に分布する。

【県内での生息地域・生息環境】

県東部の平野部を流れる砂泥底の河川や用水路。

【存続を脅かす原因】

河川改修などによる生息環境の悪化。また、観賞魚として乱獲されるおそれがある。

生息地域				山地地域				里地地域					平野地域					海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○											○					○					

ナマズ目アカザ科

アカザ

Liobagrus reinii Hilgendorf, 1878

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵10

【選定理由】

本種の生息にとって清流であることが必須条件である。

【概要】

全長7～10cm。日本の淡水魚では珍しい赤色系の体色をもつ小型のナマズである。8本の口ひげがあり、ひれは棘状になっていて、不用意に捕まえると刺される。水のきれいな川の中流から中上流の流れのある石の下に潜む。産卵は、5～6月に流れのかなり早い瀬の石の下に100～120個の卵がゼリー状に産みつけられる。日本固有

種で、宮城県・秋田県以南の本州、四国、九州に分布する。

【県内での生息地域・生息環境】

中規模以上の河川の清流域に広く分布するが、もともとその分布密度は低い。近年は生息環境の悪化に伴って、姿を見なくなった河川も少なくない。

【存続を脅かす原因】

ダム・堰堤の他各種の河川工事によって、清流が減少し、本種の産卵場所や餌生物の生息環境が失われてきたことによる。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○				○					○										

スズキ目カジカ科

アユカケ(カマキリ)

Cottus kazika Jordan and Starks, 1904

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵10

【選定理由】

かつては県内の多くの河川中流域に普通に見られた。しかし、現在では生息域・生息数ともに減少している。

【概要】

全長20cm、灰褐色の地に4本の暗色横帯があり、他のカジカ類同様、うろこはまったくない。体型は、ハゼ類に似るが、ハゼ類（ドンコは除く）のように腹びれは吸盤状になっておらず、分離している。河川中流域の瀬の礫底を好む。幼魚期はおもに水生昆虫を食べ、10cmを超えるとアユなどの小魚を食べる。日本固有種で、本州の

日本海側に多く、福井県ではアラレガコと呼ばれ、生息地が天然記念物に指定されている。

【県内での生息地域・生息環境】

県内のほとんどの河川の中流域に生息しているが、川を遡上する力は弱く、多くの河川では堰堤の存在により、本来の生息域ではない河口域に生息している場合が多い。江の川河口域では産卵場が確認されている。

【存続を脅かす原因】

生息に適した砂礫帯の河床の減少、遡上を妨げる堰堤の建設など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
○	○	○	○								○					○					○

スズキ目カジカ科

ウツセミカジカ(小卵型・中卵型・両側回遊型)

Cottus reinii Hilgendorf, 1879

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠB類（EN）

写真 口絵10

【選定理由】

河川の水質や自然環境が良好なところに生息するが、すべての生息地において生息環境が悪化し、個体数が減少している。

【概要】

県内には、カジカ（大卵型：河川陸封型）とウツセミカジカ（中卵型：両側回遊型）が生息していると考えられるが、詳細な調査は行われていない。ウツセミカジカ（中卵型：両側回遊型）の稚魚は夏場に河口域で数多く観察される。全長7～9cmで時に12cmに達する。瀬の砂礫底や礫底に生息する。体色は環境によって異なり、灰

褐色から暗褐色まで変化に富み、体側に4～5個の暗色の斑紋がある。ハゼ類に似るがうろこがないことや頬に棘を有することなど区別できる。水生昆虫や甲殻類などを食べる。産卵期は3月中旬から6月中旬で、川の瀬の石の下側にオスが巣を作り、メスが卵を産む。

【県内での生息地域・生息環境】

県内において生息が確かめられているのは斐伊川をはじめとする大型河川の中下流域。

【存続を脅かす原因】

河川改修に伴う人工護岸や遡上を妨げる河川構築物、ダムによる流水量の減少など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域									
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○										○						○						○	

オオヨシノボリ

Rhinogobius fluviatilis Tanaka, 1925

島根県：準絶滅危惧（NT）

写真 口絵10

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

水量が豊富で流れの早い場所に生息し、生息数もあまり多くない。近年、減少傾向にある。

【概要】

本種は従来「ヨシノボリ黒色大型（*Rhinogobius* sp. LD）」と称されていたもので、全長は約8cm、時に10cmを超える個体もみられる。全体的に黒味が強く、特に繁殖期のオスはほとんど黒一色となる。メスと未成魚は淡褐色の地に濃褐色の不規則の斑点がある。頬には斑紋がない。識別にもっとも有効な特徴として、胸びれの根元の明瞭な1個の黒色斑がある。また、尾びれの基部に上

下に長い黒色斑が1個あり、これも本種の特徴である。北海道を除く日本全国に分布し、雑食性で付着藻類や水生昆虫などをおもに食べる。

【県内での生息地域・生息環境】

県内においては、比較的大型の河川に生息する傾向が強く、高津川など西部地方の河川で生息数が多い。県中央部から東部にかけての河川では、生息数が少ない。

【存続を脅かす原因】

河川改修などに伴う生息環境の悪化など。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域			
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地
○	○	○				○					○								

スズキ目カワアナゴ科

カワアナゴ

Eleotris oxycephala Temminck and Schlegel, 1845

【選定理由】

近年その生息が確認された。島根県西部での初確認後、徐々に県東部での確認事例も増加し、県内全域で生息域が拡大している可能性もあるが、なお詳細な調査が必要である。

【概要】

全長20－30cmほど。ハゼ類に似るが、腹びれは吸盤状ではなく左右に分離。頭部が大きく、下面には白い斑点が散在する。体色の変化が著しい。茨城県以南の本州太平洋側や、四国、九州、屋久島、および福井県から鹿児島県にかけての日本海、東シナ海沿岸の河川に生息する。

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵10

比較的大きな河川の下流部域から河口域に棲み、日中は石や倒木の空隙に潜っており、おもに夜間に活動する。

【県内での生息地域・生息環境】

2000年に益田川下流部で初めて確認された後、江川下流部でも確認。その後2010年には高津川および斐伊川水系、2011年に大社堀川水系、2013年に斐伊川水系で生息が確認されている。河川の下流部の流れの緩やかな淡水域や汽水域に生息する。

【存続を脅かす原因】

生息環境の悪化など。